川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

四月號

昭和廿四年四月一日発行三十四年四月号（毎月一回一日発行）創刊大正十三年・通巻三百八十三号

No. 383

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

皇太子さまのご成婚を祝う

本社四月句会

川柳雑誌社 催
主宰

川雑の句会が道頓堀へ！
どうとんぼり文楽座別館四階

ゼヒ柳友お誘いの上ご出席ください。

日時　四月十六日（木）午後六時

場所　文楽座別館四階
市電道頓堀電停南へ二〇米西側
市電日本橋一丁目電停北へ百米西側
（入口は右側から階段を上ってください）

兼題
「祝」（三句）中島生々庵選
「反省」（三句）川村好郎選
「桜」（三句）正本水客選
「身分」（三句）真鍋一瓢選

席題　三題（当日発表）

句評　戸田・古方

呈賞　☆各題天位　☆兼題「祝」天位に不朽洞賞

会費　百円

幹事　紫杏・淡舟・いさむ・潮花・文秋・唐佑・狂二・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・氷断・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切四月十四日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・住吉㊷六〇八一

—5月本社句会—
〃兼題〃
実力
砂浜
かんしゃく
テレビ

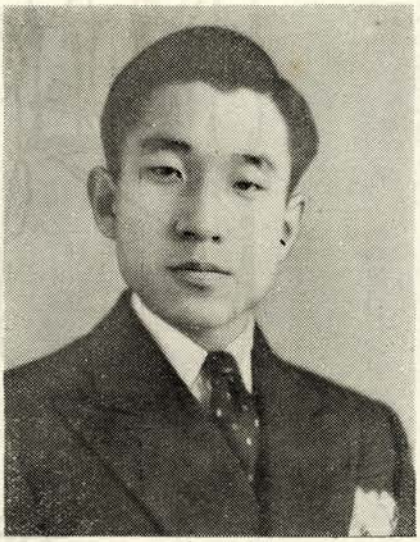
日本盛酒坊

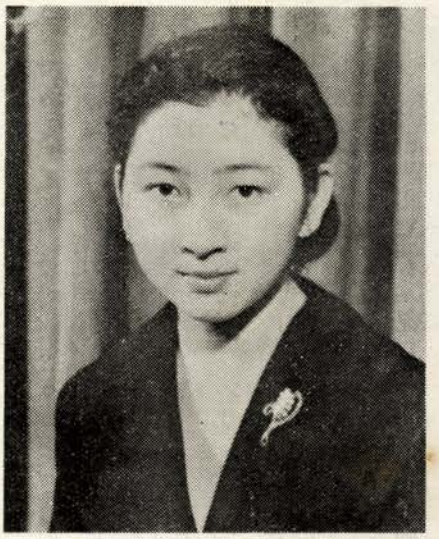
灘の清酒
ニホンサカリ

和やかに　まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・南九郎右衛門町に
（近日開店）

皇太子さまの御成婚を祝して





私のような野人は天皇が雲の上から降りて来られて人間天皇になられただけでも、ガク然として驚き、多くの束縛から解放せられたことであろうと感じ、失礼にもホッとしたものであった。

今度又皇太子さまが庶民の中から皇太子妃に正田美智子さんをお選みになられたと新聞や雑誌で知った時には曽て天皇が雲の上から降りられた時にも倍して心の温たまる思いがしたのであった。

その御成婚の佳き日が四月十日となった。

私は社会的にも、経済的にも全く別の世界に住んで来た一野人に過ぎないが、国民の一員として衷心からお慶び申上げると共に幾久しく皇室の御繁栄を祈念してやまない。

御成婚飲むより外に手を知らず

川柳雑誌社主幹
麻生 路郎 謹記

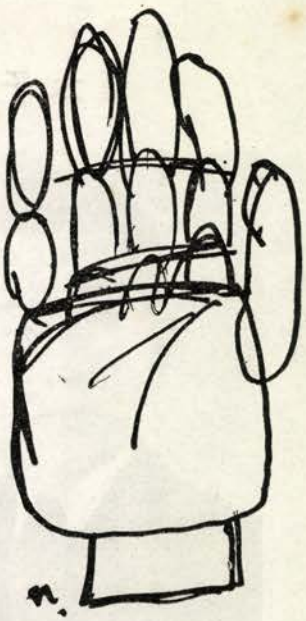
四月号目次

題字……麻生 路郎
表紙……野尻 弘

皇太子さまの御成婚を祝して……麻生 路郎…(三)
三要素の再認識……清水 白柳…(一七)
批評に溫たかさを……森下 冬青…(四四)
おらが国……浜田久米雄…(一五)
新川柳鑑賞……麻生 路郎…(四)
川柳に惚れる……後藤 梅志…(二八)
ロマン風の随想……高鷲 亜鈍…(二二)
五十万円のうぐいす……松江 梅里…(三二)
ある老俳人の川柳観……東野 大八…(二六)
活字ジャーナリズムと電波ジャーナリズム……不二田三夫…(二七)
痴人の柳信……木山 遠二…(二〇)
平将門……冨士野鞍馬…(一八)
無鬼氏の定年……酒井ひか平…(三二)
雅号由来記……若本多久志…(一六)
太貫き勧進帳……前田 伍健…(一六)
草一郎句抄……(二三)
内藤草一郎をしのぶ……魔花麗・暁舟・柳葉…(二四)
快夢起・平八郎……(二五)
大万川柳八周年記念大会……(二〇)
課題吟には短評を……亀崎 漫歩…(一九)

★

川柳塔……麻生路郎選…(六)
同舟近詠……諸家…(一九)
近作柳樽……麻生路郎選 北川春巣選…(二〇)
一路集〔愛情〕……若本多久志選…(一六)
〔自炊〕……冨岡淡舟選…(一六)
〔見栄〕……直原七面山選…(二七)
金泥集……麻生霞乃選…(二九)
各地柳壇……(四〇)
不朽洞会から……(三九)
柳界展望……(三八)
青ペン・赤ペン……(四六)



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔六四七〕

手ぶらとはかくもたのしきものなるか　（村鶴子）

何んでもない表現であるが、この句を一読すると、何んとなく朗らかで愉快になる。いつも、何んかかんか持って歩いている人が、たまたま何一つ持たずに、ブラブラ歩いたとしたら、斯うした思いがするのに違いない。

〔六四八〕

賀状書くスピード落し思うこと　（不二）

十二月も残り少なくなった。誰れ彼へ賀状を書くことは一つの事務に外ならなかったが、ある名に突きあたって、急にスピードを落して書きながらもいろいろと思い出を辿ったというのである。それは遠い昔に別れた女であったかも知れない。そうした思いが句外ににじみ出ている。

〔六四九〕

出世すりゃ兄が下座で酌をする　（六花）

大学を出た弟が、警察署長を経て知事にまでなる。地方としては出世に違いない。そうなると、なんかの集りがあっても兄の方が下座で酌をするのを見かけるが、この句から兄ではあるがやむを得ないという諦らめと、この弟の兄だという幾分の誇りとが感ぜられぬでもない、複雑な感情を汲みとることが出来る。

〔六五〇〕

順序不同とどん尻を慰めるころ　（むじな）

俺が俺がの世の中で、あちらをたてれば、こちらがふくれる。こちらをたてればあちらがふくれる。そんな時に、順序不同として発表する便法がある。一番どん尻に自分の名前が掲げられても順序不同としてあるので、その四文字に慰められて辛抱するというのである。どん尻に自分の名前を並べられた人の心理を巧くつかんでいる。

〔六五一〕

百姓でなけりゃ故里よいところ　（旭童）

山はわが寒村を抱きかかえているし、河は流れ流れて海にそそいでいるし、山紫水明の美くしさは誇るに足ると云えようが、猫の額のような土地柄だけに私達を養うに足る収穫はのぞむべくもないと云うのであろう。「百姓でなけりゃ」が暗にそれを指摘しているではないか。一百姓として生を享けた人間が古さとに対する述懐の句である。

〔六五二〕

世論もう聞えぬ袴子へそりかえり　（明林）

すべての政治家は世論に敏感でなければならないのであるが、総理だの総裁だのという椅子にそりかえって我が世の春を謳うようになると、もう世論などは聞えぬようになるものである。イヤもう聞こうともしなくなるものである。

〔六五三〕

サーカスが引上げスリも引上げる　（甲吉）

サーカスがやって来て、天然の美のはやしが流れて来ると場末の人々の心は自然と浮き立つものである。しかし、そこには銀蠅のようにスリがくっついて来ることを忘れてはならない。

「ああ、しもた」

と云っても後の祭で、サーカスが引上げるとスリも又引上げて行くというのである。サーカスとスリとを対照にして場末らしい情景が巧みに描かれていて面白い。

〔六五四〕

年ごろがヒップ互いに目ではかり　（不二子）

年ごろの娘同士が、それとなく相手のヒップを目ではかって、その余りに大きいのに、驚いたり、意を安んじたりしたというのである。ヒップだけに目ではかりがよく利いているし、ユーモラスな感じがよく出ていると思う。

〔六五五〕

小遣を呉れる財布を覗いて見　（一傘）

「お小遣い、幾ら呉れるかしら、たんとお金があるのかしら」と小遣を呉れる財布を覗きながらも、そんなことを考えるさまがうけとれるのである。スナップ的な句ではあるが、非常に面白いと思う。

〔六五六〕

娘にも盲腸があり慌てさせ　（豊年）

娘が病気をした。診てもらったら盲腸だといわれた。

「へへイ、盲腸。美しい娘に盲腸」

と慌てたというのである。美しい顔、美しい眼、美しい手などを外にして娘を思わなかったのである。現実は盲腸の存在をハッキリと認識させたのである。こんなことは娘の盲腸に限っていないところに多少の穿ち味もあると云えよう。

〔六五七〕

ゆたんぽの底に値札をはつたまま　（古方）

病人が出来て急にゆたんぽを求めたのであろう。ふと、気がつくと、ゆたんぽに値札が貼ったままである。慌てて買いにやったその時のことがまざまざとアタマにうかんで来る。という句である。淡々とした家庭の写生句である。

〔六五八〕

メートルに直す間横へよらされる　（圭井堂）

メートル法実施後、斯うした情景をあちこちの店先で見せられるに違いない。

時事吟だけに、いのちの短い句ではあるが、一寸横へ寄らされて、換算しているふぜいに捨てがたいものがある

〔六五九〕

掌へのる姉となり南無阿彌陀　（十悟）

しんみりとした句である。この句一読すると、身うちがジーンとする。作者の実感を詠んだものであろう。迫真力の強さがそれを物語っている。掌へのる姉とは云うまでもなく、お骨になった姉と云う意味であるが、川柳語として垢抜けのした表現である。

〔六六〇〕

寒けたつものに机のわが入歯　（堰子）

机の上に、自分の入歯が置かれてある。自分のからだの一部分には違いないが、見れば見るほど変な感じがして寒けがするというのである。

この句、感じの句であるが感じよりも穿ち味の方がより強くひびく。

〔六六一〕

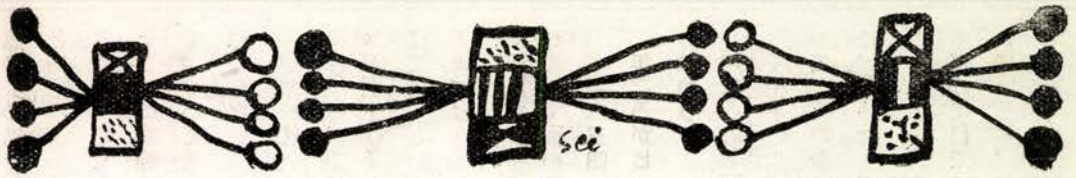
市場籠の中まで夕焼赤く染め　（杜的）

夕餉の準備で市場へ出かけた主婦の提げた市場籠の中まで夕焼けが赤く染めているのを見て、その美しさに、心がなんとなくなごやかになったのである。詩情豊かで、短歌的な句だと云えよう。

〔六六二〕

養老院今のおりんは恋をする　（甲吉）

以前は姥捨山にも比されていた養老院も時代のズレで、今ではうら寂びしいとか、物のあわれとかいう響きがよほど薄れたようである。養老院で老人同士が恋愛したり、結婚したりしている。「楢山節考」のおりん婆さんは恋をするどころか、若いもののギセイになるため、みずからすすんで楢山行きを決行するので作者は時代のズレのいかに大きいかに驚いてこの句を詠んだのであろう。「今のおりんは」の中七の用法は実に巧みでこの句に筋金を通したと云えよう。



川柳塔

豊中市　戸田古方

放談のおちおのろけになっていた
殺しやなかったのでチャンネルをかえ

大阪市　市場没食子

事なかれ主義を労組コヅキ出し
嬶曳きの無理は利のつく金を借り
去るものは疎し名前もど忘れし
顔ぶれに圧倒されて酔うて来ず

西宮市　若本多久志

三回忌だんだん着物派手になり
子の意見黙って聞けばズレを知り
火葬場は順番通り焼けてゆき

堺市　川村好郎

捨てられた方は思い出ばかり逐い
金あれば亭主は要らぬともう言わず

大阪市　正本水客

土砂降りのなかを見学きれぎれに
思い違いのまま重大な声を出し
耳いたきことが祝詞のなかにあり

豊中市　黒川紫香

貫禄がついた時分に停年さ

大阪市　丸尾潮花

何も彼も承知してます眼で笑い
単調なものに力士のインタビュー

ホノルル市　築山快夢起

一世の話題　血圧　癌　恩給
冨士子ファン今日も御隠居見えて居り
孫にまで従う齢となりにけり

豊中市　福田妄夢

雪を見てその清潔に目を閉じた
親捨てた二人と知らぬ運転手

奈良県　尾崎方正

赤い靴履く気になった嫁き遅れ
窓際へ尻を並べた閑散日

堺市　吉田圭井堂

病む子すら社交の華は医者まかせ
ポロ会社の船で遭難した不運

宇部市　国弘半休

言い訳けの語尾を上げれば口答え
バスで越す峠の雪は見下され

防府市　長野井蛙

実弾の威力一夜で寝返らせ
宝石の光るその手で万引し
頭数押の一手にだけたより

岡山県　直原七面山

着こなしがどうのとこうるさき夫

外人に日本語で道訊ねられ
幕曳きの脚だけテレビへ御出演
単調なものに力士のインタビュー

ホノルル市　築山快夢起

一世の話題　血圧　癌　恩給
冨士子ファン今日も御隠居見えて居り
孫にまで従う齢となりにけり

豊中市　福田妄夢

雪を見てその清潔に目を閉じた
親捨てた二人と知らぬ運転手

奈良県　尾崎方正

赤い靴履く気になった嫁き遅れ
窓際へ尻を並べた閑散日

堺市　吉田圭井堂

病む子すら社交の華は医者まかせ
ポロ会社の船で遭難した不運

宇部市　国弘半休

言い訳けの語尾を上げれば口答え
バスで越す峠の雪は見下され

防府市　長野井蛙

実弾の威力一夜で寝返らせ
宝石の光るその手で万引し
頭数押の一手にだけたより

岡山県　直原七面山

着こなしがどうのとこうるさき夫

大阪市　丸尾潮花

何も彼も承知してます眼で笑い
単調なものに力士のインタビュー

ホノルル市　築山快夢起

一世の話題　血圧　癌　恩給
冨士子ファン今日も御隠居見えて居り
孫にまで従う齢となりにけり

豊中市　福田妄夢

雪を見てその清潔に目を閉じた
親捨てた二人と知らぬ運転手

奈良県　尾崎方正

赤い靴履く気になった嫁き遅れ
窓際へ尻を並べた閑散日

堺市　吉田圭井堂

病む子すら社交の華は医者まかせ
ポロ会社の船で遭難した不運

宇部市　国弘半休

言い訳けの語尾を上げれば口答え
バスで越す峠の雪は見下され

防府市　長野井蛙

実弾の威力一夜で寝返らせ
宝石の光るその手で万引し
頭数押の一手にだけたより

岡山県　直原七面山

着こなしがどうのとこうるさき夫

定年へ

第二のスタートへの酒だ君笑え

白浜行

啄木を思い出させる白い砂
段々畠日本の狭いのがわかり

大阪市　西いわを

旅行好き家で死ねたはせめてもの
一噸のトラックで来た公益社

堺市　八木摩天郎

まわりまわってまわって親類かふんそうか
南極で鰥夫のようにしてくらし

ホノルル市　遺句　内藤草一郎

女部屋らしくごたごたきちんと片付けて
その維持費お安くすまぬ美しさ
お上品に飲めば本当の味がせず
人の裏知らずにくらす有難味

東京都　遺句　宮田不二

女なり事前運動よく効いて
マネキンの乳房あらわに着せ替える

悩みなどありそうもない禿っぷり
ビール浴びて女流作家のエロ談義
どた靴の先にチラホラ春の風
大阪市　西森花村

ラッシュアワみんな他人の顔となり
傘さげて相合傘のにくらしさ
下関市　石川侃流洞

人がいいと云われておって何処か抜け
親分の有無を言わせぬ声となり
正直がいて結論がまだ出せず
倉敷市　木村千容

坊ちゃんと呼ばれお顔は半白髪
呆として生きる処世もありはあり
ラーブ首相来倉
ドイツ語の国歌きくとは思わざり
倉敷市　田垣方大

角帽はあみだにすると不良めき
水筒をかけて花見のパパとなり
春うららモーターも眠い音になり
加賀市　野村味平

さし替えて菊人形は日延べをし
婚約はしたけどピッコを知らなんだ
新しい世相を禅寺煙ぶたがり
大阪市　木村水堂

新聞を配る子供に零下二度
尻に敷くニュース仕入れる主婦の会
高槻市　福田丁路

御免遊ばせお先にテレビ買いまして
法律の抜け道通りやんせ通りやんせ
商魂はたくましミッチー何んとかや
大阪市　真鍋一瓢

靴磨きさそかと下手に子を叱り
五十五の満期ペン先換えるよに
虎の威を借りる啖呵もどもり勝ち
達者なが故の阿呆が目だつなり
日韓問題
ままならぬ世に韓国と云う隣り
大阪市　後藤梅志

客僧はどこにいるのか二月堂
東条のようで補聴器つけられず
伊吹山が降ったと会社休みそう
米子市　小西雄々

愛情をコンプレックスにする演技
一票がほしいお世辞がこそばゆい
大阪市　吾郷玲人

お電話へパパビジネスの声になり
歌舞伎座へ勤務播磨屋とは誰や
大阪市　山川阿茶

金箔をとって本能だけになり
南極の犬
尾を振られ人間穴がほしいなり
大阪市　金井文秋

ももひきに似ててもはやりだからよし
誰れや来てはるとテレビをやっと立ち
貸本屋はいいなと子供にうらやまれ
小松市　伊藤茶仏

夢のない生活を妻に指摘され
加賀市　那谷光郎

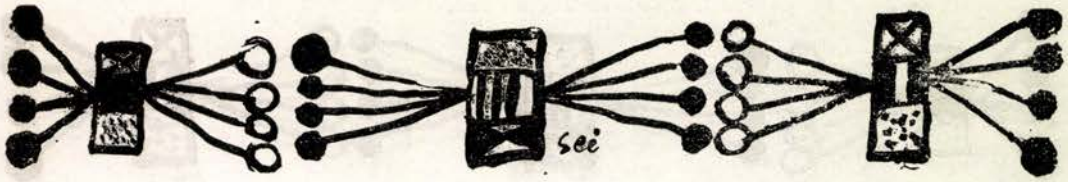
ポスターの美人画失業してる部屋
社長兼小使掃除は背広着て
大阪市　北川春巣

生長の家はお医者に隠しとき
梅の枝持てば女の春姿
泊り客あるのに鼠ようあばれ
テレビ見るのが職業も楽でなし
バスすいて来て洋傘がこけ続け
岡山県　浜田久米雄

山の駅駅長さんに何か着き
年頃を持てば通り魔などが出て
戸を開けたとたん蔭口かと思い
岡山市　逸見灯竿

お隣に頼んでおいたのに空巣
貧乏の影法師まで貧しそう
大阪市　武部香林

赤い国明日のいのちを誰が知ろ



働き蜂キッスすませた靴を履き
大阪市　木下　幽王

道頓堀一そ水など流れるな
しゃぼん玉ふらりふらりと俺みたい
ふと見れば妻も陣平が似合う齢
死とはこんなに悲しきものか骨袋
失業をすれば成程失業者ばかり
出雲市　尼　緑之助

借金のことで春風に立話
踏み切れぬ話あいにく酒がない
泥酔の怒号寒月影をひき
縁談に雪の出雲の炬燵酒
おしゃべりも蔵に負けぬ女客
大阪市　水谷竹荘

台所電化にしてと甘えられ
恋人もないのに切ぶ二枚くれ
くたくたにされても嬉し孫の守り
鳥取市　杉谷湖山

うるさい旦那で仕事渉らず
母一人娘一人窓のチューリップ
課長から意外電話でのみに来い
大晦日今年の嘘もつき納め
京都市　大鶴喜由

早よ嫁にやらにや柘榴の如と裂けん
顔美しく頭も肉もなかりけり

煙草銭で日毎日毎に突き出され
十円のパン千円をバーで呑み
妓侍れば急ぎ紳士となるあわれ
岡山県　福島鉄児

時代ずれしてる頭と気付かざり
これしきの事で家裁の世話になり
岡山市　服部十九平

サイレンへ箸を手にしたままで立ち
尼崎市　長谷川三司

伊勢エビの値だんを聞けば生きてます
葉ぼたんの喰べられそうな色に映え
兵庫県　若林草右

停年で器用貧乏が役に立ち
松葉杖ついて冬山から戻り
課長夫人砂糖買うのを不思議がり
汗かいてまでオーバーを着るも年
大阪市　足立春雄

今日も又人焼くまきを割っており
便乗の車五尺八寸小さく坐し
熊本市　有働莱春

禿げかけていますと生徒ズバリ云い
よろめきの恋ハイヤーをよく使い
鑑定料百円の列に俺もいる
青春を貝になりたい日で埋め
広島県　山田季賛

遮断機が今朝の運勢のじゃまをする
有名になり山下清も楽でなし
大阪市　山本葉光

あかぎれやニキビに克って鉋研ぐ
恩借を返しそこねた寄附をする
倉敷市　水谷谷水

うち非売品やと気骨おらせる娘
長続きしたのはパチンコだけで死に
はなむけにバーテンダーも酌いでくれ
難物難物と御自身棚にあげ
古参とはにくまれやくもせにゃならず
倉敷市　椙原一善

結婚詐欺に掛かる程のあせり
人をぶつ真似も踊りの形になり
奥さん奥さんと気安う借られ
岡山県　田村藤波

じじむさい母がそれほど好きなのか
岡山県　岡田夜潮

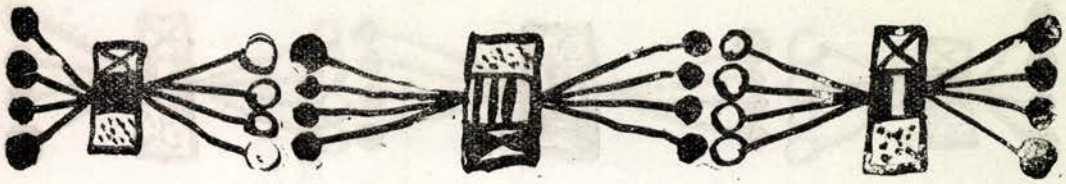
盛装の皺を恐れて坐らない
供出後余韻嫋々の鐘聞けず
無いものは無いで通せる有りがたさ
大阪市　稲葉鳩花

裏の裏知らないままで停年さ
木枯よ吹け吹け僕はサンドマン
茨木市　下山清潮

車窓から山の広告自若たる
賀状見て此処にも借金あったわね　岡山県　本田恵二朗
モーニングなんぞ着るから漫画めき　京都市　松川杜的
紋付を着ながら挨拶教えられ　山中温泉に遊びて
運ちゃんのシシの話へ宿近く
あれが白山だよとロープウェイの窓による　鳥取市　森本法泉子
ぜいたくがしたいばかりの共稼ぎ
名誉税などと寄附金とりに来る　川西市　竹内圭三
ランドセル石をけりけり帰って来
ヒョロヒョロと来て終電でチャンと去に　尼崎市　藤井春日
セーラ服巧みに唇受けてたち
女尊男卑社風とならば如何せん　岡山市　津田麦太楼
バトミントンよっぽど閑な消防署
女房の吉左右一杯やって待ち
眉引けば雪の気配のれんじ窓　吹田市　橋本幸男
四月十日あやかり組の多い事
パパも留守ママも出かけて僕とチビ　堺市　高崎雄声

商魂は幼稚園児を奪いあい
テレビ今横綱土俵割るところ
明日明日と言うてとうとう大晦日　島根県　藤井明朗
一票へ義理からませて来た家主　岡山県　永松東岸
これ買って来てねと妻の書いたもの
アパートに陳列されたように住み
不細工な男の根気あなどれず　倉敷市　野田素身郎
三度目の結婚こっそり式を挙げ
手伝ってもらえば肩を揉まされる
満員車一人降りれば二人乗り　大阪市　清水望峰
旅にいて蟹つかまえては見たものの　大阪市　木村十悟
売り惜しみあと味悪い儲けよう
道ならぬ恋信心と別なりき　大阪市　伊達堰子
焼き場だけ便利な籤の家当り
なんぞ買う積りの市場押されて出　大阪市　不二田一三夫
コチコチの右派よとママを批判する
まともに暮らし腹の立つこと多く

たこ焼き屋やれと文筆あなどられ　兵庫県　酒井ひか平
パパの愛双生児一度に抱いてやり
山の雪亡父の白髪を思い出し
新任のすべり落ちそに椅子にかけ　大阪府　深見雅堂
靴みがく人も株をば買うとかや
人間の条件を観て
人間でなかった昔へ共鳴し　宇部市　津秋六花
盲判押す出勤を見送られ
お隣りは公僕今夜も酔って居り　神戸市　野村初甫
寒かったでしょうとオーバを脱がす妻でなし
顔だけで見合美事に落第し　岡山県　池田古心
よろめいているなと世間すぐ覚り　東京都　石居高志
やあやあの仲がだんだん偉うなり
本当に好きよと聞きもせぬに言い　松江市　勝谷山川児
退職を奨める方の年が上
週刊誌一冊残る出張さ　大阪府　早川清生
わりにシャンやないか渡伯する花嫁



本殿へ通訳ぎこちなくお辞儀
きれいな人ないなと京で妻にいう
妻にしてからのモデルはもう脱がず

堺市　辻　圭水

婚約をしてから時間とんで過ぎ
父さんの早出みんなを起して出

加賀市　中松恒雄

勝って飲み負けても飲むに変りなく

岡山県　野々口美舟

割り込んで下車まで紳士眼をつむり
末席を汚すに紅もうすうぬり
後ぞいのひがみで家の娘までひね

西宮市　小浜牧人

若者の闘志ポキポキ骨を鳴らし
税務署でうっかり失言してしまい

西宮市　菱田満秋

誕生日かそうか僕とこ命日だ
お人形だからニグロに頬もよせ
ぼろくそに云われ首相という身分

岡山県　池上知恵美

三泊の旅へ睡眠薬を持ち

大阪市　橘高薫風子

風邪ひいただけで男の嵩だかし
智恵の輪を抜くよう汚職無罪なり
逃げおおせるものと女は思うて居
アパートは灰の捨て場所にも困り

下関市　中村九呂平

余りにも能無し賀正だけで来る
あてこすり軽くそらして咳払い

奈良市　宮口笛生

助士の汗紅蓮の炎反射する
閉切れば機関車ぬくきぬくき冬
轢死体人間もろい姿なり

大阪市　桝本露児

こいつまだ生きていたのか年賀状

大阪市　池戸桃村

こうまでも異うか看護婦さん私服

大阪市　西川晃

白骨になって家出が戻って来
部分品換えるが如く馘にする
流石代議士筋の通った嘘を言う

釜ヶ崎風景

焚火ちろちろ強盗に行く相談

名古屋市　野田一念

祈るのもよいが稼げと意見され
喰い逃げに執行猶予にはならず
呼鈴を鳴らさず神はやってくる

岡山市　林葵丘

大正の匂いがしている一張羅
ちぐはぐな皿で新婚せったいし

神戸市　仲どんたく

日本髷ほんに今夜は節分か
ドライヤーの中で練ってる夜のプラン
パチンコ屋軍艦マーチで客を呼び
別れぎわ女は一つ叩いとき

平田市　久家代仕男

お父さん庭見えますかと拭きもせで
講評のしまいに惜しむらくがつき

大阪市　本多柳志

今日からは僧正という声で読み
奥伝をいくつも持ってまだ嫁かず
講釈の上手い謡が聞いとれず

出雲市　原独仙

産む鶏へ妻はどっさり餌をやる
鶏の勤評上下の棚を吊り

大阪市　大谷月都

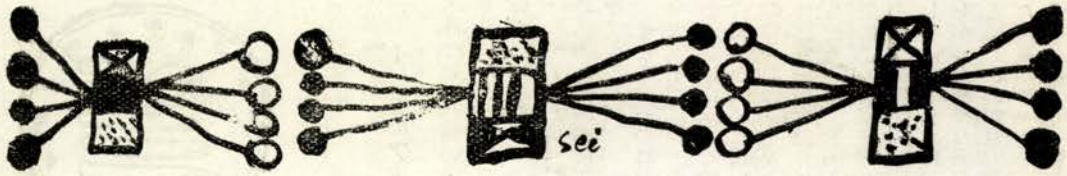
流木を拾って焚けば冬の色
家計簿をつけてる横で本を読み
伸びをして電車を降りる暇があり

岡山市　江国幽谷

当然のように墮した話をし
親子ほど違うて尻に敷かれとり

岡山市　光好陽子

恋愛も知らず手芸にばかり凝り
娘が娘がと四十の私をつかまえて



久米雄先生御栄転

栄転をむかえる支部のゆるぎなし
西宮市　河相すゝむ

手をつけぬ本が並んだ応接間
お隣りは講談倶楽部読む特二
西宮市　野呂鵜汀

蝦蟇口は小銭ばかりで草臥れた
情慾に負けて無力な人と居る
会計へ縁者を入れて見張らせる
西宮市　樋口舟遊

現金でなければくれぬ顔になり
新潟県　高野むじな

暮しの手帳庶民に嫌な知恵をつけ
子を連れて行けと亭主を信じない
高砂市　吉原紅月

汚れてる方が給料安い方
愛情と別映画にはついて行き
気が付けば友達みんな嫁いでた
大阪市　岸川漣

慾張りが無慾な話嘘に聞き
助手席へ乗つけて欲しい子供の瞳
大阪市　欄蘭

成人式祝辞いささか訓示めき
大阪市　石倉旅風

塵ひとつ止どめぬ家の寒さかな

大人さえ拗ねてもみたい世に出会い
大阪市　魚住満潮

子のないさびしさを夫婦口にせず
堺市　田中狂二

アルサロで誰かに孫の事云われ
新社長向うから頭下げはった
大阪府　林昌男

この頃の歌は男を捨てたがり
唇を許し後をも見ずに駈け
愛媛県　村上旭童

だまってりゃこんな寒さに酒も出ず
念仏を何時覚えたのか父も
倉吉市　大前鳴恍

血圧を計られてから気が滅入り
マッチ摺るのにもチップという手つき
鳥取市　北村三歩

選挙

意外にも妻信念の票を持ち
折角の挨拶一票だけは入れ
神戸市　傍島静馬

雑沓に妻子をかばう位置をとり
パトロンも老いてマダムにみつがせる
大津市　杉原吟女

おみくじは自分の十円出して引き
湖に書割の様な月が出て
笠岡市　木山遠二

自炊した経験がありコセコセし
今でこそと誇って馬鹿にされるなり
光陰矢の如くフラフープすぐ廃り
大阪市　中谷ハナ子

試験地獄自殺の記事が今日ものり
大阪市　平沢保美

矢面に妻を立たせた金詰り
重役が去なねば去ねぬ袖カバー
布施市　森下愛論

ステップが踏めむ女は茶をくばり
カナリヤも蛍光灯に慣れて寝る
姫路市　植村客遊子

家族湯の窓から雪をわけてたべ
只で乗る人ばっかりへバス止まり
横着な物乞い頭さげたきり
岡山市　宗高矢寸志

停年へ油の切れたペタル踏み
毒舌へ保険屋負けぬ口を持ち
現行犯でも一芝居打つ女
大阪市　河井庸佑

研究会児童モルモットに使われる
金使こた程に売名出来ていず
五十円値切って財布ぐち掏られ
大阪市　小島さぎす

ベルトくるくる仲仕の肩はもう要らず

ロマン風の隨想

高鷲亞鈍

1、夢のアド・バルーン

昨今われわれの話題のうちで、無邪気な児童にかえって純真に喜びあったことは南極圏昭和基地に一昨年棄て去ったままになっていた樺太犬十二頭のうち、タロとジロの二頭が奇蹟的に生き残っていたという朗報であった。

そして今一つは旧臘中旬突如発表された皇太子妃が民間人のお嬢さんである正田美智子嬢に決定。その決定たるや人間皇太子の意思が大いに働いたということは一年前の軽井沢のラケット以来、世間の青年が持つ恋愛感情を純粋に押し進め、ためらいがちであった美智子さんも、最後の殿下の電話によって、一国の皇太子としてでなく、生涯身を託すに足る自分に与えられた夫としての頼もしさに、皇太子としての尊敬とちがった純粋な恋慕に自ら屈したということで、この四月、華やかな、しかも大それた恋愛結婚マーチが奏でられようとしていることだ。昨年暮から今春にかけたこの二つのビッグ・ニューズは、戦後の日本人に世界各国から拍手喝采を受けた。

これらは政界の与党、野党を問わぬ汚職贈賄。議会の泥試合。勤評問題。道徳教育。警職法改正。改悪論争。に鍋底景気とは誰が言ったか知らないが、貿易不振による産業低下。金融引締めによる中小企業の倒産から失業者の激増。青少年の性的堕落と強窃盗、殺人犯罪事件は親が子を、子が親を殺す肉身相食むいやらしくも濁り腐りきった世情を縫って、世界を掩う蒼空へ大きな二つのアド・バルーンをぽっかりふんわり夢のように打揚げたことは何としても楽しいことに違いはない。

2、人工衛星と南極の犬

或は世間にこのような問題が社会とか人類に貢献するに何程のことがある。と空嘯ぶき、その感情の非科学性を詰る輩があるとすれば彼らと人生を共に語る筋合いはない。彼らは夢とか詩を持たず、人生には科学や算盤で計量し割切れない奇蹟とか偶然も亦存在することを認めないからである。

されば彼らは昨年から今春にかけての最大関心事といえば、ソ聯が人工衛星第一号をぶっ放して成功し、アメリカが失敗した。先を越されて躍起となったアメリカでは今春ロケットを発射して月世界の旅行を近い将来約束づけた、とはわれわれの知る範囲でのジャーナリズムの僅かな詩的空想を交えた報道によって二大戦勝国の科学戦を知らしめたことだろう。しかしこれらは世界的ニュースとして、彼らでなくてもわれわれだって考えようによれば南極の樺太犬の生存奇蹟や、一小島国のプリンスのラバーフェアと比較にならぬ大問題ではある。しかし私はそこに現実として知る人間性の見にくい原始人類の弱肉強食の闘争本能を、その人類社会の発展による科学の美名に隠れた原子核実験が、実は来る可き世界戦争への科学兵器として人類を終焉せしめる怖る可き生命否定を予見づけている如く、人工衛星も、ロケットも凡ては戦争兵器として裏づけているであろうことを惟う時、私は悚然たらざるを得ないのである。

ソ聯はスプウトニック第一号に可憐な仔犬を投乗せしめた。科学実験にことよせやがて人間が投乗し得る可能を動物の生命に代えてともども実験したのである。世界の愛犬家達は、当然の死を到らしめるムゴいソ聯の仕打に抗議した。が私は莫迦らしく余りに阿呆くさかったのである。医者が、何十匹、何百匹とモルモットを飼育しては殺し解剖して研究する生物科学も、宇宙、天体、機械などにメスを入れるそれら科学陣にあって、犬ころの一匹や二匹を実験して死に到らしめたからといい条何を空騒ぐことがあるかと言いたい。広島、長崎へ落した原子爆弾が口に尽せぬ無コの人命を死傷せしめ、その後十六年を経過する現在に到るも、その原爆罹災者がポクポクと憤死していく状態は果して戦争故か、科学の故か。実に呪う可きは、人類根原にある闘争本能でなくて何であろう。

私はしかし科学を否定するものではない。現代文化はエジソン以来の電気科学によって、家庭の台所にまで、凡ては電化し実に近代文化を支えるものは電気の平和利用にある。ただ私の性格は物理方程式が解けて知識としては判っていても、ラジオのダイヤルで周波数を合わせば、聴きたい声でも音楽でも自由自在に入り、ブラウン管を通してテレビが画面に撮るなど時たま不思議に思う。夜ともなれば、パッと電燈が灯るのが妙なもののようにさえ思うことがある。これは種も仕掛もある奇術師として私は科学者を考えるのだった。

それ故に一面ソ聯が人工衛星に犬を乗せて宇宙へ放ち、それが地球の周囲を天体のように何廻転さしたということは全く素晴しいソ聯の科学陣として人なみ以上に驚嘆もするが、所詮これとて種や仕掛があっての手品であれば興も醒める。若し人工衛星に犬が生きていたとしても、もともとそこには科学的な種や仕掛を織り込んであると信じたら、南極の無人地帯へ、人間と共存する習性を持った家畜が、何の食料も与えられず一年余りも生きて居ったという事実。しかも南極踏査隊が基地に入るや尾を振って人懐つこく鼻を寄せてきた、に到っては私は想像するだけでも泪が出るのである。内地では何を喰っていたか。ということが各識者間の臆測を新聞紙上に読むが、たとえペンギンを捕獲したか仲間の共食い

をしたとしても、兎に角犬でも生きていた限りは何かを食っていたということは事実として判るが、しかし何を食っていたかということ。これは想像も予想もしない奇蹟を可愛いやタロ君とジロ君がわれわれに顯現してくれたのであった。

3、昭和の童話

ラブ・イズ・ベストほど恒久的な言葉はない。いつの世でも愛は絶対であるからである。今更バイブルの「ヨハネ伝」を持出すまでもなく、愛情の真意は神であり、愛の言葉は詩だ。〃肇めに言葉あり、言葉は神と共にあり言葉は神なりき。〃である。

われわれが愛の言葉を私語やく時は必然的に詩人になる。この場合、天皇もなく皇太子もなく一個のヒュマンでしかない。正田美智子はそれ故、王子の告白に精神の琴線を激しく顫律せしめその真実に泣きくずれたことであろう。この瞬間にあって、第三者の知恵才覚など遠く及ぶべくもない。真空の純白の透明無色の形なき花芯と化してしまう純粋審美！　われわれが此世紀の婚約発表を晴天の霹靂の如くに知り、その詳細を知って尚且つ身近かな感動にこころよい昂奮をいまも漂わしている所以は、皇室という特権の発動が些さかも出されたのでなく、その取巻く政治屋乃至は政界の具に利用されず、むしろ皇太子本人の意思を周囲が善意をもって温かく見戍り、小泉信三博士など大いに媒介の労を蔭になって尽したということ。一方正田家では、徹頭徹尾、瑞の玉の輿にのせるような出世を希むことなく、さりとて権威に屈して人身供養に捧げる如き卑屈な態度はなくキ然としていたことは、却って皇室という特殊部落へ嫁さしめる娘の不幸をさえ歎いていたように見受けられた。

卑近な一例ではあるが美空ひばりが唄や映画のスターになり、ひばり御殿の豪華にあやかる母親が十本の指全部にダイヤを煌したりするその時折の人気スターと、金に糸目のない興業資本に苦々しく思っている時、これはもともと比較にならぬ世評であったとしても娘をもつ親に対する一服の清涼剤ではなかったか。

又あのマンボ族とかロカビリ族とかいったハイテーンの青年男女が、男子は女子のように、女子は男子のように粧い、グロテスクなシスターボーイ丸山明宏などの中性人種の出現で私などはゾッとするのであるが、彼ら子女が月に五千や一万のお小遣いを費消するぐらいはへっちゃらで愛情も恋愛も貞操まで、一切は割切り金銭で解決されているドライ一辺倒に正田美智子嬢が月千円のお小遣いで身つくろいをしても、楚々として美しく清潔で、漆黒の天然パーマは、茶や紫色に髪を染めることなく心臓に爪立て掻き毟るようなマニキュアに何千円の美容料を必要とはしないのである。

4、詩と科学

現代人にとって凡ゆる部門に於ける科学性は否定さる可きものでなく、その真理への追求は貪欲でなければならない。しかし真理はついに無限であり、それは科学者にして、画家レオナルド・ダヴインチの画くモナ・リザの朱唇に表わす微笑の神秘を解くことは出来ない。人類の起原を説くダマウインの進化論も反駁する学説が絶たないし、社会科学からみて、マルクスの資本論が修正されていることは故新戸部博士が生存中力説されたことを私は聴いた。生理学に於て、人間の生命アミーバを試験管に宿らすことの可能は立証されていないことを知るわれわれは、男女の結合によって胎む新生命リビドーを化学実験がなされないのも当然である。

但しここでわれわれの考えることは、凡ての文学、芸術が詩と真実を追求してもそれは科学的方法によらねばならないということだ。しかも人間の思考が窮極に於て偶然のキラメキによって真理を発見するということ。たまたま林檎が落ちて発見したニュートン引力説や物理学者湯川秀樹が、散策の途次樹枝の隙間から流れてくる陽の光りにヒントを得、数理学から物理学へと方針を切変えたことなど、「ある物理学者の手記」に書き綴られたことは最近のこと故、既に読者も御存知のことと思う。私は朝日に暫らく連載された博士の手記「旅人」を読んで彼も亦詩人であるとの印象を濃くすることが出来た。そういえばわれわれの師である詩人麻生路郎の句集「旅人」と同じ題名であったことも奇しき偶然であったか……。

われわれは詩を愛し情緒にあそぶことは必ずしも科学に拠らないというのではない。われわれは寧ろ科学する精神によって詩を発見することであった。しかもそれは神々の祝福を受ける可きエゴー（自我）の生贄をもってしなければならないということ。それは人間に与えられた智能と肉体を燃焼する極限の果に克得た栄光である。

南極の果て雪原の大曠野に建てられた十頭の犬碑に冥福を祈るものも、二頭が鼻先を濡して元気に生きていたことも、辛苦に堪えて再三、南極行を断行した宗谷の科学探検者達によって発見した詩現実であれば、皇太子がわれわれの娘の中から、高価な真珠を採集したという昭和の童話も、天女とは天から舞い下り天来の奏楽によってハレルヤコーラスが聴かれたのではなく、われわれ地上に、生きとし生くる血みどろの生活圏の中から地熱を帯びた阪東武士の系図をもつ正田美智子嬢が天女ならぬ粉屋の乙女として、黒と白のアブストラクトな衣裳が、正しくリアルなメルヘンの羽衣であったというこの現実を直視するときわれわれは何と考える可きだろうか。

私がこの二つのモメントを更めて提起し溷濁の世相を活写する千、万の現代川柳からロマンを抽出せしめ得ることが出来たならばこの貧しいエッセエは一応読者の素朴な童心に訴える詩の効果をいささかでも期待してよいようだ。

（了）

新兒童音楽サークル

募　集

バイオリン科・アコーデイオン科・チエロ科・ギター科・ピアノ科・楽典科・声楽科・音感教育科

講　師

大阪放送管弦楽団奏者　麻生アー　ト
大阪放送管弦楽団専属　徳永　貞
大阪音楽大学出身　辺田徳子
大阪放送管弦楽団専属　坂田行
毎日放送専属　市田弘

成人科（夜間）も設けています。詳細は当教室で規則書をお求め下さい。

奈良県生駒町本町２丁目103番地（若月）

申込所　**新児童音楽サークル**

電話生駒２７番

批評に温たかさを

森下冬青

森繁ものが好きで、彼の出る映画はかなり多く見ている。ところがある新聞に、ある映画の批評家がこんな文を書いていた。

『森繁久弥もマンネリ性をおびてきた、もっと彼は現在のもつ彼の臭みを脱皮せねば駄目だ』と言う、

それに答えて森繁は

『俺の芸がマンネリ性をおびてきたとは心外である、俺はまだマンネリになる程映画に出ておらん』

とわたり合っていた。

私は、最近見た、森繁が前半出ている『花のれん』に淡島千景の夫となっての極道者の役は、夫婦善哉、桂春団治、的臭みがあったのに、ここらがある批評家の言う『森繁の臭み』とも言えよう。

然しながら、雨情や、暖簾、野良猫は好きずきだろうが、私としては新鮮さを感じた。

ある批評家の言葉もまんざら解らんでもないが、森繁の

『俺はマンネリになる程まだ映画に出ておらん』と言う戦後派の彼の立場も一応わかる。

俳優でない者、俳優の経験のない者が、俳優の演技を批評する批評家であれば、これは盲蛇におそれずで、かなり冒険的で下手すると俳優に失礼にもなる。森繁のような海山千年の世馴れした男なら空うそぶいておれるが、ひょっと出の新人俳優になると、批評家の痛烈な批評によって、映画界、又は演劇界をさようならをせねばならぬ破目になる可能性もあるだろう。ともあれ俳優に経験有る無しにかかわらず、批評家はこころすべきであろう。

×

こと短文芸の川柳に関するならば、実作をせない作品の批評家なんてまだ聞いたことはない。とは実作家で飯が喰えないから、作品を批評しての批評家が出てくる道理もない。

では実作しながら批評家的存在の人が、今日の日本柳界にどれ丈居られるか、と言うなればそうざらに居る訳でもなかろう。

『ではお前知っている限りの誰と誰を発表して見よ』

かくの如く仰せられる方があるとしても

『お前そりゃ的はずれじゃ』

と言われるより発表をせぬ方が無難なところであろう。

それは、それとして、考えるべきは作品の批評の問題で、昨年だったか、大阪市の『天馬』誌の『天馬賞』に付き、松本市の『しなの』誌に、河野春三、石原青竜刀、両氏が、入賞された方の作品に就いて、どうのこうのと、丁々発止と作品批評を兼ねて論戦をしておられた、ともすると感情のみが走った点もあった様であるが、読まれた方は私だけの気持であったであろうか。

河野春三、石原青竜刀、両氏の作品の批評は、思想の見解の相違であって、間違っていると言うのではなく、仮に天馬賞の作品を私が批評するなれば、両氏とやや似た批評の内容もあるだろうけれど、両氏とまた違った作品の批評が出てくる筈である。

およそ作品の批評とは、一個人のみの批評で全体の作品の批評はできない。ただし一元平面作ならともかく、多元性をもった作品において、いかに一人の批評が巾広い見解をもっているにしても、作品全体を間違いない完全な批評は至難であると言いたいのである。

仮に一作品を五人の方で批評すれば、一人の批評は全体では無いが、五人の批評が全体的であるとも言えよう。

私は、天馬賞を得られた作者は、どんな気持であの河野、石原氏の文を読み終られたかは知らぬが、私は嫌な気もちがしてならなかった。

大体『天馬』には、天馬調的、天馬賞作品であるところへ

『お前あっちへ行け、わしゃこっちへ行く』の、詩性派、非詩派の作品を通じての論戦だから結果においてああなるのも当然であらうけれど、作者の心をくむものが足らぬ批評でもあったようだ。

×

いま、アメリカに住んで居られる、石川県金沢市の出身である仏教学の大家、鈴木大拙氏の書かれたある本に

『科学はすべてを割切れるものにしようという。それは分別性を基礎としているからである。科学には秘密は禁物である、宗教には秘密がある。

これは隠しておくという意味ではなくして、もともと分別織上に出されないということなのである』

なぜ私は、ここに宗教に関する大拙氏の文を引用するかと言うに、川柳の作品を批評する場合において、作品の批評はともすると分別織上にて一切合切割り切ろうとする時がある。五七五の定型律はもとより、自由律と言えども、十七音字を中心とする短文芸において暗示、ふくみ、らは分別の世界ではない、故に割り切れないものであって、言うならば大拙氏の『秘

密」を利用して、川柳にも秘密がある。

批評はあく迄も自由である、と言う人達の言葉も解るが、割り切れない川柳のもつ無分別の秘密までも、割り切ろうとする批評になるとするなら、むしろそれはナンセンスである、言うならば割り切れない秘密とは、味合う世界であって科学する世界ではない。

×

すこしでも良い句、すこしでも前進してゆこうと願い作句に精進努力していきたいのが実作者である。批評というものは、すこしでも良い句すこしでも前進してゆこうとする実作者への助けであり導びきでもある、つまり車の両輪の存在である。故に実作、批評とは一如で、ここにあってこそ進歩がある筈でもある。

なのに無分別（秘密）を分別で叩いたり、あるいは、論戦は感情的になったりしてゆくならば、実作者の本当の車の両輪の存在になるだろうか。これは人ごとではない、初心者を育てる場合においても痛感は常である。

「天馬」の天馬賞に入選された方は、ながい柳歴のある方か、又は新人の方かは私は知らないが、松本市の「しなの」に河野春三、石原青竜刀両氏の、論戦を読んだ時、入賞作品の批評で何かもみくちゃにされている感じで酷評とも思えた。で、もっと温い批評が欲しいものだ、とこの様な私の心が、しどろもどろのこの一文を書く気にもなった。もし参考になる点があるならこれは幸いである』

（筆者・蟹の目川柳社主宰）

おらが国

浜田久米雄

昨秋のリクリエーションで職員四人と大阪へ行き市内遊覧バスで美人座と北野劇場を回った。美人座では無台のまん中で歌手が歌いまくり、北野劇場では越路吹雪扮する松井須磨子の女優物語をちょっと見せてもらった。どちらもマイクの前に立たないのに歌やせりふが場内いっぱいにひびいているのに首をかしげたものである。マイクがないのに拡声装置がどこかにあるらしい。ふしぎに思ったのが歌手のお尻の方から細いひもをたらしていて、ライトが出演者をどこまでも追いかけていることだった。どうもこの紐とライトとが曲者らしいと考えたが同行の者もわからない。山峡に帰ってから誰彼に聞いて見たが要領を得ない。そこでぼくは水客さんにこの疑問を解いてもらうよう手紙を書いたのである。

水客さんからの返事が来て久米雄もINAKAMONOになったものだと一寸ほほえましくなったとまずぼくをけなしてから図解まで入れてそれは「ワイヤレスマイク」というものだと親切に教えてくれた。年に一回位しか都会の空気を知らないのだから無理もない笑い草である。それ程田舎者になったぼくのお国、岡山県にもすこしは自慢になるものがある。

瀬戸内海の魚、瀬戸の急流に育った魚の味は他国へ旅行して見ないとほんとうの味がわからない。太平洋や日本海の潮流に育った魚にくらべて大体味がちがう。ひきしまった魚肉は正に天下一品である。ぼくはいま中国山脈の頂上に近い山峡に住んでいるので山陰方面から売りに来る魚の味にあきたらず岡山へ帰る時には必ず瀬戸内海の魚の刺身をたんのうするだけ食べることにしている。

岡山県の米の味。これも自慢の一つであるが県下鉄道沿線のところどころに日本一岡山県の米の酒と書いた妙な文句の看板やネオンが見受けられるが、岡山県で作った雄町米（おまちまい）で作られた酒の味は又格別のようである。事実酒造場で作った酒を酒運搬用のトラックに積み込んで東へ東へと運ぶのをよく見受けられる。これが灘の生一本にレッテルとともに生れ変るのである。ぼくの知った酒屋では製造輸出専門で県下には全然売り出さないところがある。めしの味酒の味、これも他国へ旅してわかる岡山県のお国自慢であろう。

果物王国。果物も亦自慢の一つ桃、ぶどう、梨、マスカット、柿などそれらの出荷時季には専用貨車が駅の構内にならぶし、夜をてっしてトラック輸送のひびきがつづくのである。もっとも最近では他県が岡山に負けてなるものかと改良に改良を加え、ところによってはこの辺のものよりも品質ともに向上されたものが生産されはじめたので、業者も今までのようにのほほんと構えておれなくなったようである。

まだある。

池田産業動物園。云わずと知れた厚子夫人のおられる動物園で、厚子夫人がお出でになったのが昭和十七年十一月であったと思う。あの時の駅前から沿道の雑沓は県はじまっていらいの混雑で駅の出口から乗られた乗用車が五十米進むのに一時間位かかった。台風、地震、水害のない国、米と魚と果物のうまい国岡山県へ厚子さんはおこし入れされたのである。

方言でおもしろいのは、ずどぼっこうおえん（大阪弁で云えばさっぱりわやや）。ちいたあこられえ（少しはお出でなさい）。はよいかれえ（早く行って下さい）。見いいきんさい（見に行きなさい）。おかやまといわずにおきゃやまで通じるし、西大寺さいだいじはせいでえじと要するになまるのが特長であろう。

十二月ぼっこうおえんおえんが来

久米雄

姉妹品 ワダカル・ビタM ビタミンB1・B2・A・D・燐・鉄 配合
ビタミンB1入小粒 五〇〇錠 二〇〇円
二〇〇錠 三〇〇円

太貫さ勧進帳

前田伍健

新居浜市には二つのたぬき関係のおやしろがある。その一つは天然記念物指定の一千年を経た樟の群生林の中にある。小女郎大明神社で鳥居には、文政年間の彫があり、江戸中期頃、この地方のある孝女を助けて、身代りとして広島へ女郎となって売られ、ドロンと消えたたぬきで、いろいろの伝説があり、神主に叱られて大阪へ逃げ、タイの目玉ぬき騒動なども起し、今に赤のぼりにお供え物も沢山発展しておる。もう一つは同市宗像神社内にまつられておる申八たぬきで、戦災後迷い込み神主に可愛がられて座敷で普通の飼い猫のように生活し、二三年前に鼠を捕らえて過食し、それが原因で神主の膝を枕に往生した。たぬきの塚である、さて話は松山市に移るが松山市道後には狸の器具を一千余点集めて居る富田狸通氏が、(明大卒元伊予鉄道庶務課長)主催で愛申会なるものを作った、昭和十四年頃である。当時の市長もたぬきには縁深く(医博で松山の市庁前おそでたぬきのお産を助けた、数年前亡くなった安井氏)知事も旧藩主久松氏の系統で、松山八百八たぬき騒動の本城であるなど(この騒動の主人の墓は例の子規埋髪塔のある正宗寺の境内にあり光冷院寒林道英居士寛延二年十月十三日と記せられておる)市長も知事もたぬき縁は充分であり、たぬきの円転ユーモア味を好む人々は、忽ち文化人の人気を得て毎年盛大に大会が行われ、戦時中は遠慮して又復活本年は大いにやると準備中のありさま、この愛申会の申の字は田を上下にぬいた田ぬきで愛申会と名付けたものである。さてこの愛申会の主旨に賛成した新居浜市の小野市長、商工会議所会頭など知名人八十余名が、小女郎社のある一宮神社の矢野氏を会長に、その他を狸事長、狸事、或は鼓間として、狸眷(ケン)法を作り愛申会新居浜支部を作り上げ、発会式を挙げることになり、私は大鼓間の名で乗りこんで行った。祭典は形の如くおごそかに行われ、スカタンの、のりとも、ものものしく四国の各有名たぬき像へ入魂(これは庭へ陶かまを作り即席に焼き上げた素やきのたぬき像である)式もすみ、祝辞祝電本納おどりもよろしく終って、大鼓間のペンケイ勧進帳と順が回って来た。ペンケイ鼓間のいでたちは茶かっ色の法被で脊なに〇八の大染め抜き、襟は愛申会、帯紐は輪ちがいのつなき柄、咳一咳突っ立った。(この時、西日本テレビNHK松山AF民放南海各放送局、何処か忘れたが、ニュース映画班も来て居て大仕掛け至極、ちと仰山過ぎるありさま)いざ勧進帳を読み奉らんと、胸をそらせた。

「それつらつらおもん見るに、天は何んのために汝達を生したるや苦しめんがためかノウ楽させんがためかノウノウ即ち苦楽は汝自身の心の持ち方一つにて、中空の月に一兆億の大金をかけてロケットを飛ばす快さも快なれば、無一文の懐ろ手にて月に対し想をめぐらすも亦快なり。ましてたぬきを通して狸心円満天下泰平の腹つつみを打つなど、是れ程愉快なることあらざるべし、総て人間生長の行程には苦楽のあること当然にて、苦にへこたれ難に腰ぬけ、事毎に不平をならべていては何んのための人生かと考えらるべし。されば苦難の中にこそ生甲斐を見付け、生活を楽しむ心こそ、正に狸眷(ケン)法の根本ぼんのぼん源なり。一つ腹の立つ時太貫きとなれ、一つ悲しき時たぬきになれ、一つうれしい時はたぬきになりて大いに腹つつみを打つべし。金の問題の時は大きん玉の伸縮自在を思うべし。ああたぬき、たぬき時に大悟せる如く、時に童の如くたぬきわれを化かし、我れたぬきを化かす両両一如この道をたのしむこれこそ、生活をたのしむコツと申すべし、出でて万物に対し、入りて万事に接す円転滑脱正を持し義を期す。ぼたもち元棚になし、入れてこそ始めて有り、そのぼたもちこそユーモア味なり、肝心かなめのおへそなり、当新居浜市には名狸高上蔔(ロク)(小女郎)あり、申(シン)八あり、愛申会の妙をつくせる狸眷法あり、面白き哉人生、愉快なるかな生活の楽しみ、ここに勧進帳を開きたぬきと共に我等は進む、他抜き太貫きたぬき、真似たぬきの豆も、松山八百八狸の外に、さぬき屋島のはげ浄願寺の白はげ、仏生山のくりまん、阿波の金長おむつ、たか千住太郎、土佐のおもん荒倉権九郎、淡路の芝右ェ門、大阪のだんじり徳助、佐渡のだん左ェ門、館林の分福、京の宗たん等々一同引きつれ、まかり通る勧進帳あらあらかしこ、以上の通り—ポン(太鼓を鳴らす)…てなぐあいであり、ついこの間の事であった。

雅号由来記

若本多久志(タクシ)

私に川柳入門の御縁を作ってくれたのは、金沢の安川久雅美氏で、よく私の会社へ遊びに来て柳談に花を咲かせた頃、偶々、雅号の話が出て、久雅美の「久」をいれて命名してくれたのが「登良久」—それは当時、トラック会社を経営していたので商売名との掛調と言った処で生れた訳。

その後、大阪に来てタクシー会社を経営するに及び改名したのが現在の「多々志」で、やはりオマンマの種と、指導を受けた久雅美氏を忘れない様にと心懸けた私の雅号の由来記、如件。

三要素の再認識

——古句にかえれと云うのではない

清水白柳

本社の二月句会の席上で句評をした際に、私が話したことの内容について少し誤解を受けるような点があるように思われるので、そのことにふれて置きたいと思います。句評に先立って言ったことは、川柳の三要素「うがち」「軽み」「おかしみ」を再認識したいということを言ったつもりなのです。三要素をうのみにするというのではなくて、三要素を骨組として句を生かしてゆきたいということなのです。今時川柳の三要素などを持ち出すと、古句に返れというように、とられやすく誤解されるおそれがあるので、特に気を使っているのです。古い考え方だと一笑にふされる人もあろうと思うし、私自身も古めかしい話だと叱られるのも承知の上で、何故そんなことを言い出したのかと言うと、現在の川柳に一番欠けて居るものは何かと考えて見ると矢張り、「うがち」であり「軽み」でありまた「おかしみ」だと思われるのである。

川柳にその三要素が欠けているために「うがち」のない句は生活報告的な薄っぺらな句になったり、ぬるま湯につかっているようなたよりない句になったりするのではないかと思われるのである。生活を詠うにしても、世相をよむにしても、しっかりとした批判的な眼で見つめて居れば必ずいい句が生れる筈だと思う。自然を詠んでも、ロマンな句を作るにしてもその底に「世間で言う、ごまめのはぎしり、といった世相への抵抗」「小野十三郎氏の言葉」その抵抗性を持つということは取りも直さず川柳に「うがち」風刺を取り入れることであると思う。川柳が世間の人から忘れられないためにも、また川柳をもっともっと社会へ進出さすためにも、この抵抗性を生かして行かなければならない。寸鉄人を刺すという「うがち」を再認識したいと思うのである。

次に要素の一つである「軽味」のことであるが、「軽味」ということは軽薄なことでは勿論ない。それはどことなく枯淡な味わいを持っていることである。すらりと仕立られた句であるとか、禅僧をほうふつさせるような句のことである。年季を入れた作家にして初めて作り得るとでもいうか垢抜けのした作品に多い味わいである。

最近の詩的な川柳には得てして重い表現の句が多いように見られるが、良い言葉で言えば重量感があるということなのだが、内容が軽い事柄なのに殊更表現に、こけおどし的な重さを持たせてあることなどは余り感心しないと思う。むつかしい漢字を並べ立ててあるのを見たりすると可笑しくなることもある。軽い内容の句には、内容にふさわしい表現法をとらなければならないことなどは誰でも心得て居る筈である。私はお茶漬の味のような、サラッとした軽味の句にあこがれを感じているのである。詩情ゆたかな軽味の句こそ「軽味」を再認識して初めて出来るのではないかと思われる。

それから「おかしみ」のことであるが川柳が世間の人から面白いものだと思われているのは、可笑しみの句が数多く人の口にかいしゃされているからで当然であるが、ただ「おかしみ」と言っても、呵々大笑して腹を抱える笑いから、微笑、苦笑、泣き笑いまで色々あるわけで、もてはやされている句の中には、無理に笑わせようとする、くすぐりの句もあってこんなのは、もっての外であるが、腹の底からこみあげる「おかしみの句は捨てがたい味わいを持っているし、「うがち」のするどさに思わず苦笑される句には川柳の本質があるように思えるのである。そうした「おかしみや」面白さを現実的な句の中に見つけることが出来るとしたら、言い知れない喜びに浸ることが出来るのではないだろうか。

○

以上のような意味での「三要素」の再認識を言ったつもりで居ったのですが、時間の都合や、しゃべり下手のためにはっきり判ってもらえなかったのではないかと思うので、くどいと思ったがまた書いたわけです。こうした意味での三要素というバックボーンが無ければ川柳というものは、やがて消えてゆくかも知れないと思う、新らしい川柳はこのバックボーンの上に築かれてこそ進歩もし、発展してゆくものだと私は信じている。表現の新しさも型の上での新らしさも勿論必要であることは言をまたないが、それに加えて「うがち」「軽み」「おかしみ」の新らしいかみくだき方を考えてゆきたいものである。それはまた世間の人に川柳を再認識させる一つの手段でもあると思う。

平将門（下）

冨士野鞍馬

――七変化とコメカミ

俗説を書いた「江戸雀」には、

「将門通力自在の身と変じ、その身一人を七騎の形となして、天をかけり地をくぐり中々討つべきたよりなし。ここに貞盛、秀郷智略を以て、かの将門をたばかり、大のかり股うちつがい、将門の首を射きりぬ。されば将門は其身を七人に変じければ、さして本人を見別がたく、ただこめかみの動くを見あてに射ければとて、何者かよみけん。その頃の落首に「将門は米かみよりぞ射られけり、俵藤太がはかりごとにて」とよみける。」

とあるので、川柳もそれに従い、

天慶の頃に公家悪の七変化　（タル一四八）
七変化真田将門はた小町　（〃一四六）
七巻と七変化とを藤太射る　（〃四二）

等、真田幸村の七変化、七小町、三上山を七巻した大ムカデ退治の秀郷などを並べて、興味的に作っている。また、

将門は百十六文蕎麦を買ひ　（タル九一）
将門の塔婆は四十九本たて　（〃一〇六）
将門が人をのろうと穴十四　（〃一二六）
四十九辮に将門の臣こまり　（〃一六三）

などと、十六文のそば七杯で、百十六文（九十六文が百）人をのろえば穴二つや、なくて七辮の俗諺を七倍した、算数的に戯作している。なおコメカミを秀郷が射たというので、

将門が急所へのこる今年酒　（タル一一九）
こめかみ以来評判の俵なり　（〃十八）
下総の内裏俵でぶっつぶし　（万安八）
馬はねを秀郷が来てぶっこわし　（タル二一）
秀郷はみかどのやうなものを射る　（〃十四）
生き馬の目を秀郷は抜いた人　（〃十三）
将門をしめたを竜王へはなし　（〃二十）

と、ここでも将門は馬に見立てられている。秀郷は竜宮へ招待されて行ったと、お伽ばなしのような伝説があり、

藤太様お出でと海月門を開け　（タル三九）
藤太どの浦島はまだ達者かの　（〃一四一）

など、この外に多く川柳になっている。

こうして将門は亡びたが、これを天慶（てんぎょう）の乱という。

――神田明神と祀られる

ところで「江戸雀」にまた、

「されば通力自在の将門なれば、その首、藤太をおっかけ、今この神田にて勢力つきて落とどまりぬ。さる程に将門の首、一七日を経ても終に死せず、眼れきくと開き、その色終に変ぜず、所の者おそろしき事に思ひて、此由都へ訴へければ、彼が怨を報ぜんために、則其前にうづみて、神田大明神と祝ひて、社をたて、それより此かた、悪勢をひるがへし、今に弓矢の守護神とあらはれ給ふ。」

とあり、それで神田明神は将門を祭るということになっていて、

首があったら江戸中が皆氏子　（タル五九）
将門の影はあづまに百残し　（〃三二）

神田の外、津久戸、鳥越、日本橋等各所に祀られて、江戸っ子に人気があり、

将門の旗ひるがへすいい神事　（タル四七）

と、神田祭は、江戸の三大祭の一つになって、今に伝わっている。

将門へ尻を見やれと孔子出し

（タル三四）

は、明和九年の大火に、湯島聖堂の孔子の像と、神田明神の神体（将門）とを、桜馬場に移して一夜あかしたことがあったので、それを詠んだものである。

――藤原純友――

将門の乱と時を同じうして、「南海乱行」によって、中央――京都――の貴族を脅かしたのは、藤原純友であった。純友は、藤原冬嗣の玄孫で、伊予守であったが、国司の任期が満ちても京都に帰らず、将門と同年に、多くの海賊を率いて叛乱を起し、間諜を京都に送って、所々に放火させた。

朝廷では、小野好古、源経基をして、純友征伐に下向させ、純友は間もなく誅せられ、天慶四年（九四一）七月には、その首級が京都へ到着して、南海の騒乱は鎮定した。

もとより純友と将門との間に連絡はなかったが、朝廷では、その共謀を疑ったのであった。

ところが「大鏡」には、

「此純友は将門同心にかたらひて、おそろしき事くはだてたるもの也」

とあり、また「日本外史」には、

「初め将門は、藤原純友という者と友とし善し、嘗て同じく比叡山に登り、皇城を俯瞰して曰く、「壮なるかな。大丈夫まさにここにおるべからざるや」と。遂に反を謀り、純友に謂って曰く「他日志を得ば、吾は王族なれば、まさに天子となるべし。公は藤原氏なれば、よく我が関白とならんか」と。ここに至りて純友は伊予掾となり任満つれども還らずして、海島に拠りて盗をなし、以て遙かに将門に応じぬ。ひそかに人を遣わして、京都に入らしめ、火を坊市に行わしむ。京師戒厳す。時に天慶二年なり。」

と、将門と純友とは比叡山で会談して、謀反を計画したことになっている。それを川柳は次のように詠んでいる。

叡山で見下ろす時分塚が鳴り　（タル十五）

叡山のあてで前日一つ鳴り　（タル六、拾四）

京都東山の将軍塚は、坂上田村麿を祀ってあり、国家に大事の起るときには、その塚が鳴ると伝えられているから、二人の謀反計画を感じて鳴っただろうというのである。

あの屋根が紫宸殿だと伊予掾　（タル十七）

叡山で大きな山を談じ合い　（〃五四）

不成日知らず叡山にて出合い　（〃六）

将門の友は遠方より来る　（タル四一）

じゃじゃ馬に友が出来たで馬になり　（〃二一）

人喰ひ馬に純友口が合い　（タル十三、拾五）

うましうましと純友は八瀬へ下り　（タル十七）

下を見ておごりの出たは比叡山　（〃三一）

等いずれも比叡山の会合を句にしているが、実際はそうでなかったようである。

詠近舟同

松山市　前田伍健

岸さんに似た顔汽車で向いあい
とぼけ上手忘れ上手と肩すかし
こだわりを風に飛ばそか水にしよか

須坂市　高峰柳児

マネービルかなわぬ数字並べられ
床の間へ膳をまたいで導かれ
酔どれへ閑なマダムが行届き

今治市　長野文庫

雲無心人が勝手なこと思い
地蔵さんバァと云いそに草がのび
ろくすっぽ帯もむすべぬ女子大出

和歌山市　秋月宏方

内閣改造岸さん僕をまた忘れ
牛も雞ももう聞きなれているピアノ
ゴルフの疲れ別荘であんまする
僕の部屋二人の部屋にまだならず

大阪市　石田沐天

インテリは非情の鞭を眼で浴せ

大洲市　米沢暁明

チャンバラへあっさり呉れる鯨尺
表彰をするから調書出せと言う
代議士の勤評実施何故言わぬ
いくらでも利子は払うという危険
一応は取調べますそれっきり

今治市　月原宵明

中ひとりおいて恋人いる写真
父さんの枕で母さん昼寝する
坊さんも株の手引を読み初め
子はテレビ妻は冷蔵庫で責める
上役に珍名だけは認められ

上田市　金子呑風

言い切れば縁がなくなる語が淀み
包装紙デパートなみの味を出し

麻生路郎選
北川春巣選

白菜は頬冠り冬の田園詩　宇部市　上林　粗影　同
冬山の遭難ポスターに書いてなし　同　田口　麦彦
困を袂に入れて僧の徳利提げ　同　同
盆栽を抱いて冬陽を追うくらし　同　同
大阪の失敗を夜市の灯に並べ　同　同
老いらくの恋淡々と茶を淹れる　同　同
愛称で呼ばれる社長運転手　同　同
分譲地買手が付かぬのにあがり　小松市　関戸宗太郎　同
フランスで遊んで居たら箔が付き　同　槇　水泡
税務署で泣いておいでと励まされ　同　同
団体のリボン教養忘れさせ　同　同
サロンパスたっぷり貼って使い　同　同
楽に食えるのが嘱託として残り　同　同
もうこりた男の夢に悩まされ　同　同
傘貸したまんまでつぎの雨になり　西宮市　山本　一傘　同
蝶々の牛の股ぐら通りぬけ　同　同
夫婦して老眼鏡を一つ買い　同　同
屋上の恋へリコプターにおどかされ　同　同
福祉委員ひとの貧乏覗きに来　同　同
口癖に云う借金はたかがしれ　同　同
シネスコを見た勢いでAランチ　熊本市　田口　麦彦　同
ピアノ鳴る家集金の日をえらび　同　同
勲章をやはりくださる民主主義　同　同
麻雀をするメンバーを目で探し　同　同
よその人の見送りを見て旅に出る　同　同
あの人の地盤と庶民見くびられ　同　同
独身で通し仙人じみた髭　愛媛県　槇　水泡　同
吊橋を渡るバンドを締めなおし　同　同
マージャンのことを転勤もう聞かれ　同　同
千羽鶴見舞いの母をまた泣かせ　同　同
音楽を聞いたぐらいで酔うそうな　同　同
スマートになれたら服がみな合わず　同　同
予備校の方も決めとく仲がよし　兵庫県　永尾　氷断　同
挨拶がすむと時間がない候補　同　同
定年がページを繰ったように来る　同　同
へそくりの工合を母にだけ話し　同　同
逆立ちをして合格の眼が笑い　同　同

栄典法再提出

勲章をつけたい胸が又うずき　同　同
生活改善と云う下駄箱の花　岡山県　太田　蓑流　同
雨読する時間と思う藁細工　同　同
苗字から気にくわないと娘がむくれ　同　同
歴史上の人物だけがわかる齢　同　同
褒め方もあろうにあんた正直や　同　同
広告代とられた記事へ苦笑する　同　同
ホルモンを飲んで本妻負けて居ず　玉野市　伊原　明林　同
テレビある家へ町内会決まり　同　同

雑筆春秋

痴人の柳信（三）

木山　遠二

雅兄よ、お便りうれしく拝見しました。私も兄と同じことなのです。明治生まれの者は大抵そうなのではないでしょうか。兵隊の時に使っただろうとおっしゃいますが、それは一向役に立ってはいないのです。

「速歩行進の歩幅は七十センチだ。そら長すぎた。そら短かいぞ」オイチニ。「三百メートル各個にうてっ、コラッ三百で照尺を立てる奴があるかっ」ポカリ。

「握拳一つの幅が約十センチだ。よく覚えとけっこの野郎」覚えとけと云ったって、それは分列行進の時揃ってうまく歩いて、射撃演習に鉄砲玉を的の真ン中へぶちこみさえすれば文句はないので、メートル法なんかどうでもよかったんです。本当に必要になったのは今が初めてなんです。でもまあ近頃の常識として、この電柱からあの電柱までが五十メートルあって、四キロと云えばざっと一里あまりだ、ぐらいのこととは何時の

恋の味知らぬかパパの鈍感な　同
代表で出る子へ服が短か過ぎ　同
大根も包んでくれる百貨店　同
人妻になり事務的に話しかけ　同　石橋万古人
ふところと別に春めく二月空　平田市
観光地写真に気がねして歩き　同
低気圧秘書もやっぱりつんつんし　同
終電を降り小便の長いこと　同
篤農の慣れた説明ガイドめき　同
オーイと呼べばオーイと春が返事する　岸和田市　内藤きさ子
土の下せわしい春の楽屋裏　同
盛装で画廊の名画解せぬまま　同
市場籠母校の夕陽へ立ちどまり　同
治ったらつけるリボンが枕元　同
かみそりの下で寝られるのも床屋　美祢市　安平次弘道
葬儀屋の車に乗っても子ははしゃぎ　同
ゴルフしてマメが出来た見せ歩き　同
春雨に元赤線を行く蛇の目　同
眠むそうにマダムが見てる昼の月　同
喰うだけの犬を飼ってて家賃ため　松江市　舟木与根一
悪友は酒にありつく智恵を持ち　同
下駄ばきで出て湯の街の素晴らしき　同
割勘で飲み肩をかすあほらしさ　同
行李一つ納采の儀も何もなし　清森市　工藤甲吉
トランジスターラジオ相撲を肩に来る　同
十二時に寝た母いつか起きている　同
子の肩のあたりで親は嬉しがり　同
貸しとったかいなと給料日の余裕　大洲市　横田放人

実印を息子に渡す手がふるえ　同
大世帯大変ですよと楽しそう　同
年賀状くれたのがすぐ飲みに来る　同
牛の角俺にすり寄る邪魔になり　鳥取県　鈴木村諷子
陽だまりでつづくり物のいい余生　同
ハイヒールけものに似たる砂の跡　同
匿名の義捐の裏のからくりよ　同
農夫いま汗するときに詩が生れ　兵庫県　辻文平
課長ともなれば老眼はばからず　同
居眠りを女房は春のせいにする　同
チト酒も飲めて婦人会幹事　同
勉強の子へ抜き足でおやつ来る　滋賀県　土守蜻蛉
添乳したままで女房起きて来ず　同
八段と同じ手口で相槍　同
神棚の燈明にまで電化来る　同
羽根つきをみてたら屋根へのぼらされ　西宮市　筆坂町人
輸血する反対の手に蚊がとまり　同
パトロンに甘えるだけで食ってゆけ　同
なに不自由なしで堕した子を想い　同
マスコミの料理は目でも味わせ　堺市　沢田美喜
室内アンテナで一年無事に過ぎ　同
予備校の門くぐる春の悲しさよ　同
煙天にあふれ生産無計画　大阪市　広瀬挽郎

警職法改正　一句

国民にかみつくイヌとして飼おう　同
選挙権贈られ孤児院を追われ　同
メートルになろが飲めさえすればよし　鳥取市　近藤昭夫
母親の口の軽さを娘も叱り　同

程からか私にもわかっていますが「本年のミスニッポンは身長××、××メートル、体重は××、××キログラムで理想的八頭身です」等と新聞を読んでも、一休このミスニッポンは隣の花子嬢よりも背が高いのやら低いのやら、太ってるのか痩せぎすなのかとんと見当がつかないのです。

「年寄がそんな事もうどうだっていいでしょ」と家内がおかしがっていましたが、そう云う家内もまた「メートル法になったら野菜一つ買うにも難儀することだろ、困る困る」と頻りに気にかけていたのです。ところがいよいよメートル法になっても一向困った様子が無く平気な顔で、酒でも肉でも布類でもサッサと買って帰るので、

婿殿の達筆家中廻して見　同

南紀に旅して

団体の客に真赤な絹ぶとん　岡山県　楢原　万女

プロペラ船みんな聾にしてしまい　同　同

絶景に住んでる人を羨やまず　同　同

月一万とは殺生なマネービル　高知市　須藤　俊江

貧乏性テレビもじっと見ておれず　同　同

北風をまともに恋の手をつなぎ　同　同

かしわ屋の胸に十字架ぶら下り　出雲市　山本　朱紅

奥さんもほめて抜目のない男　同　同

カナリヤの恋はのどかに唄い合い　同　同

ナンバーワン金のある方へ行ったり　京都市　当野　哲悟

気の毒をしたとチップを貰い過ぎ　同　同

酔っぱらほどにマダムの齢が見えてくる　同　同

念仏と愚痴調法な口をもち　若松市　三上　春雄

スクラムを解けばやさしい顔になり　同　同

頭ですとは道ならぬ儲け口　同　同

まごついてデシリットルの豆を買い　大阪市　宮原　敏子

紀元節家では誰も議論せず　同　同

東大は頭の事情で受けられず　同　同

おとなりの愚痴うちへまで押して来る　大阪市　堀　風船堂

いつ来てもミナミぎようさん食べてはる　同　同

もう一と押で落とすと恋のこさらしい　同　同

柱もう壁で支える家に住み　竹原市　山内　俊見

隣りからリボンをつけて児がもどり　同　同

大吉と出て丁寧に拝んどき　同　同

成功をしたから苦心談も出来　京都市　都倉　求女

何時からかもう標準語捨てた仲　同　同

柳の芽ぐらいで新聞大見出し　同　木下　一休

宿題に疲れた父の肩をもみ　和歌山県　同　同

洋装で勤め和服で逢いにゆき　同　同

早よう良さんなんで一万円札見せて去に　同　千葉　八郎

金要らぬことがわかって坐りかえ　西宮市　同　同

陽だまりにいて日傭いのよくしやべり　同　同

馬券買う女の強気あなどれず　同　同

下駄ばきで村医なかなか儲けて居　岸和田市　赤塚　楽天

電化電化模範女中もくびになり　同　同

盆栽の売場目に付く四十過ぎ　同　同

食欲の秋は自分で飯を盛り　石川県　同村　虹要

お見合の写真よ眼鏡はずしとき　同　同

まねき猫元居た位置へテレビジョン　同　同

福の神隣りまで来て家を建て　愛媛県　河本南牛史

札束のやりとり真物かと舞台　同　同

お荷物の嵩で良縁とも云われ　同　同

人生の墓場へ延着なしに来る　宇部市　岩原　箔川

急停車入歯しっかりかみしめる　同　同

手土産の一升飲んでまだ足りず　同　出原　真奇

腹の立つ水まで喉に引っかかり　笠岡市　同　同

コスモスの行儀のような娘の寝さま　同　同

餅ばらは何処へ行ったか出たまんま　同　護川　梢月

キャバレーのマッチを始かぬ程に病み　貝塚市　同　同

もの云えば損する孫に目を細め　同　同

喧嘩の回数かぞえて新婚楽しそう　同　石川ひさみ

白粉も忘れたように便りせず　豊中市　同

真剣に燃えた昔の写真帖　同

板東千代美さん婚礼

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、往復ハガキでお問合せ下さい。

川柳雑誌社

「一升は何リットルになるのかな」と聞いてやりますと、それには答えずオホホッと笑ってるんです。どんな具合にして買っているのやらわかりませんが、俗に云う「知らぬ強さ」を発揮しているんだろうと思っています。

メートル法知らず何でも買って来る

知らなくても済むとは云えるとしても、知らぬ方がよいとは云えないのだから、これからは家内にも勉強させ、私も出来るだけ勉強するつもりです。

換算表貼っては居れど見て居らず

メートル法の他に、も一つ私には苦手なものがあるんです。例の漢字制限です。

「父ちゃん、ゴトナニって何のこと？」

「ゴトナニじゃない、イカガだよ、ごきげんいかがですかだよ」

「如を、イカと父ちゃんは読むの」

はがきをポストへ頼むたびに末っ子から必ず何か揚足をとられるのです。

としよりの手慣れた文字が

舞い扇化粧箪笥で派手に燃え　同
デパートを溜息だけで見てまわり　西宮市　末沢　友子
ライバルの紅がまぶしいものになり　同

療友の死を悼む

露草のような生命を語り合い　同
スクーターの音へ事伝て思い出し　大阪市　竹内花代子
縁談へ首をふらない恋をもち　同
子が出来てからはお里が遠くなり　同
香典のベースを決める控えの間　枚方市　宮川　珠笑
警笛の代りに罵倒浴せられ　同
まじめさが取得と人を馬鹿にする　同
大阪のガム篠山でやっと捨て　兵庫県　遠山　一雨
負けそうになれば人情論で来る　同
看板を裏からみれば腐りかけ　同
しとやかに賑やかにとるカルタ会　大阪市　国府　玉枝
ストーブの燃えるお部屋で春を縫い　同
よりによって満員車のスキー　同
老眼鏡取りに行かずに読んでやり　西宮市　恒成　青児
回復の早い若さを羨やまれ　同
誰にでも親切なのが気に入らず　同
卒業が母の衣裳へ気をつかい　兵庫県　河原みのる
迷信の悪いことだけよう当り　同
どちらだいそりゃよかったと女の児　同
種ないに手品やれやれに困っとり　笠岡市　高木　渋柿
琴三日習うて嫁ぐ荷に加え　同
友の云う通り我家も父がんこ　奈良県　辻中　一駒
電化して息子田舎に落着く気　同
百まではまだほどとおしと父元気　西宮市　大石　甘美
年金のついた位牌をうばいあう　同
予備校へ顔顔顔の青い顔　小松市　筒井　吉枝
サイレンが棄権の自由を脅かし　同
参観日メートル法を子と習い　愛媛県　大垣たもつ
句評にも病気治せと御親切　同
学校のサイレンうちも昼にする　五条市　尾来　絵見
お見合いの写真修正すぎた顔　同
夫婦喧嘩仙人掌に霜頻り　出雲市　佐藤　泰之
君の声若き世代にこだまして　同
人間と云う条件もなく独り　東京都　竹本瓢太郎
職を得てからの次男が酒を飲み　同
用事をたのめば只今勉強中　岡山県　横山　一声
退院へ生命保険をすすめられ　同
看護婦の和服マダムと見違える　下関市　宮藤　慈雨
見舞いの娘ミス看護婦と瞳が出合い　同
男皆敵にまわした離婚手記　西宮市　小西　寿美
大寒の雨はこたつで絵本を見　同
社訓は和労働争議たえまなし　堺市　吉本　菁風
生産課程のない宗教の荒かせぎ　同
落すだけ落してポプラ冬になり　広島市　山田スミ子
バドミントン内のお庭が狭くなり　同
火吹き竹電化の夢を持ち続け　宇部市　平田　実男
金歯入れたとは云わずに良く笑い　同
三流館遠慮会釈もなく笑い　大阪市　本村摂氏梵
通勤の群れ白い息皆吐いて　同
讃美歌の告別式に合掌し　西宮市　酒井　丹謡
指抜きの儘老妻は酌いでくれ　同
風呂敷の蓑で帰えった牡丹雪　岡山県　杉本たつよ

役立たず

折角命ある句を作っても、字の使い方が悪い為に台無しとなっては実に惜しいではないか、いっそ仮名ばかりにしてみたらどんなもんだろうと先日の句会の際に話が出まして、その席でA君の句はアベックでててみるふゆののののどか

「ホウ、こりゃまるきり吃りのようだわい」と大笑いになってしまいましたが、まだ研究の余地は有るでしょう。然しこの仮名だってうっかり気をゆるしては居られないですよ。新仮名づかいと云うのがチャンと出来ていますからね。

としよりが頭をひねる仮名となり

「折角慣れ親しんだものを、手軽に変更ばかりされたんでは年寄は

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL ㉗ 6684
御集会には階上御利用下さい

風雪に外見もなく頬かむり　同
叱ってもすかしてみても反抗期　竹原市　杉原　愛鳩
食欲のない子へ親が無理を云い　同
うたかたのように新人消えてゆき　西宮市　御園生すみ江
御見舞の服装又も変わる型　同
ご令嬢多趣味多芸であらせられ　宮崎市　野口卯之助
負けたから云うのでないと敵をほめ　同
頬っぺたが真っ赤ねえやの国訛り　大阪市　小畑　東二
妊娠をあきらめ猫を可愛いがり　同
分け前は兄貴の分が気にかかり　西宮市　横川不二子
尻もちをついてあたりをすばやく見　同
質問の暇無くキッチンカーは去に　倉敷市　小倉美音子
好物の鮭へうつりをはずんどき　同
嘘も方便安心しきって母帰える　貝塚市　杉本　一鶴
8ミリへモデル気取りがけつまずき　同
子のお古着て円満な家庭なり　宇部市　神田　豊年

国弘半休師栄転の報せに

栄転を悲しむ程に慕わしく　同
新生活嫁の座もない共稼ぎ　山形県　菊地　白葩
真実を聞き手にまわる友もなし　同
賀状とは別にすぐ出すラブレター　大阪市　中西兼治郎
かずら今日何人目かへ又嫁ぎ　同
肉鍋にずらりと箸の子が並び　玉野市　小谷　仙山
酒飲まぬ人はと飲まぬ人を誉め　同
酒の呼吸課長の前は鼻でする　伊丹市　小川静観堂
封じ手をつかって税務ひきあげた　同
失業の待つ退院も見送られ　西宮市　富永　夢路
愛情をためすか女遅れて来　同
デラックスすぎてみんなに侮られ　大阪市　丹波　太路
叩き売りカモを見つけた囲み様　同
還暦も古稀もコドモにして達者　田辺市　室井八九寸
屋台ごとシニセ譲って帰国とす　同
厳格な父アルバムの中に生き　児島市　伊丹柳瓢子
飲めぬ顔子供を連れて祭に来　同
催促の出来ぬ金だが当てにする　西脇市　大江　秋月
良妻にして賢母なり薄化粧　同
風邪引いて梅干の壺思い出し　西宮市　山岡　半歩
アパートに住んで庭ある家を恋い　同
逢われない朝の寒さがよく応え　河内長野市　森本黒天子
俎板の上での意見を聞き流し　同
暖房がきき過ぎだった風邪を引き　小松市　村井　城南
口惜しさがはっきり顔に出る若さ　同
目のしわを気にしてうかうか笑われず　大阪市　西本　保夫
初恋の頃ああ俺はませていた　同
何時もくる顔で受付素通りし　西宮市　樋口　寿栄
メモをとる会議に大物だけがくる　同
豊年にまわり合わした春衣裳　八代市　永松　道雄
七癖の中の天狗が邪魔をする　同
春来れば春の月賦が又かさみ　須崎市　高橋　蟠蛇
春と云うゆるみ心が掏られて来　同
現金で買えばと思いつつ手形　大阪市　松谷　政俊
素うどんをたべる社長の処世訓　同
再婚へもう家柄は口にせず　西宮市　村上　球絵
新妻に着飾らせて見せに行き　同
父母を招ぶ新居神棚飾っとき　大阪市　藤冨　淀月
退院の近い寝巻はよく歩き　同

堪らんよ、これから習い直しなんてほんとに有難くないからね」
「そうだとも、だが見ていたまえ漢字制限だの何のって大抵が一時のもんだよ、いずれ元の通りに戻るさ」
「そうありたいもんだね、手紙文なんかもいっそ候文まで後戻りするといいんだが、あいつが消えて無くなっては実際惜しいよ」
いつやら二人で、こんなに共鳴し合ったことがありましたが、其後の風向から見てどうもわれわれの思う壺には嵌って来ぬらしいではないですか、果してそうと見通しがついたら、じっとしても居れないでしょう。たとえ列から後れようとも、ついて行くより他に仕方が無いでしょうね。
ほっとかれては困るので歩くなり

家中を一まわりして風邪が去に　兵庫県　藤本ゆたか
クラス会来たのは飲める顔ばかり　同　林　参無子
逆かさまにきせるくわえた死去の報　豊中市

一月十五日成人となって

成人になってもハイネ手ばなさず　同
生命をかけた選挙で金がいり　鳥取県　谷　無閑
手伝いに来たのが先に酔いつぶれ　同　堤　勝三
青年のあり方示す皇太子　大阪市　同
庖丁も持参の料理講習会　同

妹嫁ぐ

荷飾りはカメラに写すだけで済み　大阪市　半田　夏生

天満宮で挙式

花嫁も負けず固めの杯を干し　同
職業をあやまってはる隠し芸　兵庫県　北山　越山
有るようでないのは金とことわられ　同
出馬する噂やっぱり山も売り　七尾市　松高　秀三
半額で売ってチャッカリ儲けてる　同
一人娘が商家に嫁ぎ他人めき　西宮市　森　泰祐
香水のにおいも消える待ちぼうけ　同
移民地に居て頭角もあらわさず　ハワイ　宮政　周防
止まなくていいと二人の雨宿り　大阪市　黒田　容子
あわれさは定年である誕生日　奈良県　木村よしを
結婚をしてからカメラは暇になり　西宮市　白石　由美

胡瓜子

船あしのあれがビールであったなら　越智　一水
頂上と云う字を入れてシャッター切り　今治市　萬代句念坊
あみだくじ芋屋が一つまけて呉れ　大阪市　青山　町子
堀炬燵末っ子の場所もきまってい　西宮市　井上　旭峰
パラソルの後姿の腰の巾　玉島市　柳原三多楼
親子仲小包紙を裏返えし　愛媛県　今西　生薑
鍋底の余波は二号をよろめかせ　大阪市　高木　黙渓
あったかいあったかいって風邪をひき　仙台市　鵜飼　鮎子
流行のベルトにお守りぶらさがり　西宮市　木山　二路
ざあますに寒中の汗うらやまれ　笠岡市　鎮浪　翠月
自転車を押すには無理な千鳥足　宇部市　冨永　健朗
お世辞にもほめてくれないのにおわせて　大洲市　石田　新石
入試地獄もう我家までせまって居　大阪府　三上　芙路
初風呂がガス風呂になり物足らず　西宮市　内海　敬太
たこ焼屋まで資本主義で敵つぶし　奈良市　西沢　堅持
テレビ買うてやっぱり三本立てに行き　伊丹市　豊島砂壮天
仙人掌を育て天候気にし出し　西宮市　谷沢　好祐
頼母子を落して出来た一年生　大阪府　角　上利
がら空きの座席を先着順でもめ　広島市　保西　岳詩
リボンまで四散している事故悲し　西脇市　越智　義夫
意地張って惚れ切った人取逃がし　今治市　谷本鈍愚坊
棄権せず無能承知の票をいれ　笠岡市　今井　浪六
職場より背広の方が早く出来　西宮市　米浪進之助
交渉にこんな手もありつるし上げ　大阪市　柿本　古竹
生計とは別か長屋のテレビジョン　宇治市　吉内　青魚
高級車止ってる時だけ乗せてくれ　八尾市　藤田一本歯
春が来た髪の型も変えるとす　西宮市　井上美恵子
地下足袋の底にくいつく今朝の霜　大阪府　高田穂波子
テレビ買うお金孫等に打診され　鳥取市　武田軍治郎
受験子へ箸を置くにも気を使い　堺市　高木繁太郎
明日迫るの餌で欲望又釣られ　茨木市　中田　春風
ちょろちょろと流れる水に見る若さ　西宮市　斎藤たけお
兄弟の見分けがつかぬように禿げ　兵庫県　北　七星
病む妻の寝息へ僕は起きている　大阪市　竹田　きえ
遺物石姑の重さに似る重さ　愛媛県

老先短いわれわれでも、世間へ背を向けていては矢張不便ですからね。

だが、達筆を以って鳴る兄の身になって考えると、今まで愛して来た文字が大量に消えると云うことは嘸淋しいことでしょう。お察しします。ついては兄から私に下さる手紙は漢字無制限で結構です。候文も有難いです。なるべく沢山いただきたいものです。

江戸川へ候文で書きたがり近頃の若い人には巻紙と云っても、ちょっとわかりにくいでしょうね、どこの店でも滅多には売っていないようですからね。

余生たのし候文の手紙
も来
いやどうも失礼いたしました。

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

ある老俳人の川柳觀

東野大八

岐阜の辺地に〝そだ火〟という柳誌が出ている。主宰者は、そこの中学の先生をしている小林法泉君である。よく社に顔を出し、そこはかとなき柳論もひれきしては、はにかんだ微笑とともに、消えていくというお人柄の三十代の先生である。

そだ火を囲んで、雪深い冬夜は徹宵句会もしょっちゅうで、集る人々も炭焼きの若者や4Hクラブの青年といった人たちで、NHKのローカル放送にもそのまどいの楽しさが電波に乗った。川柳をこよなく愛する彼は教え子の中学生たちにも川柳を指導していったが、その作品集は私が新聞社の文化部にいる関係から私の手許へよく送られてくる。それを選んでは新聞に載せて、木の香、土の香で芽ぶく辺地の趣味性の窓を開いてあげることに私は努めた。

ところが、過日〝中学生と川柳〟と題してわき題に—やめていただきたいことの一つ—とつけた木下青嶂氏の一文がさる新聞に載った。この木下という人は、岐阜生えぬきの著名な俳人で、過日〝翠黛〟という豪華な作品集を出し、盛大な発刊記念会を地元知名士百余名をあつめて催されたという人である。ともあれなぜ中学生に川柳を与えてはならないかを、その木下氏の一文をここに抜書してみる。

中学生に川柳を作らせることは不適当であるばかりか、大変よくないことだと信じます。つまり川柳はおとなの文学なのです。川柳には高度な批判精神、世を見なれた奇智と皮肉、半畳的な滑稽味が必要な条件となっているのです。それが日本的な俳諧精神に裏付けされて川柳という特殊な表現がおこるのです。そしてもっと大切なことは、その思想的基盤をなすのはニヒルなのです。川柳アイ(眼)は極めて峻厳酷薄理知オンリーなのです。どんなに悲しいことでも笑いとばす、どんなに深刻な事態でも野次りとばす用意が必要なのです。(ニヒルということは必ずしも思想的ニヒリズムとか無政府主義者でなければ川柳作家たり得ないということではありません、ニヒル精神が作句の底をつらぬいているというのです)

もちろん私は「居候三杯目には—」とか「隠居の屁」の如きものをもって現代の川柳をみようというものではありません。時代とともに川柳もまた新しい息吹きをもって来るとは存じますが、川柳の俳諧的基盤というものは決して変化するものではありません。もし批評精神、アイロニー・ウィットなどの要素を否定することになれば、川柳は別のジャンルに変貌するにちがいありません。このことは近来の新しい川柳についての「反省」の命題にもなると思いますが、そのことにはここでは触れません。

以上の理由で中学生に川柳を課すのは不適当であるばかりか、もしほんとうに川柳作家にでもなったら、世の中を白眼視し、皮肉と野次馬精神のおういつした、いやな子になるのではないかと思います。もっとも純情をとうとぶローティーンの時代に、川柳的俳諧思想をうえつけるのはよくないと考えるのです。そのかわり俳句を教えるがよい、と私は我田へ水を引くつもりでは断じてありません。むしろ私はほんとうの綴り方、又は自由な形の童詩などを教えることがいいと思うのです。

以上が木下氏書くところの、中学生に川柳を教えることを止めて頂きたいという要旨であるが、前半は、その対象ともなった中学生の作品が十一句あげられている。そのうち六句は説明句で木下氏も句ではないといっている。私も同感である。「雪の朝登校する子の赤い鼻」式ものである。

—初雪にカウント等を心配し

—雪合戦思い切りぶつ憎らしさ

—おとといのニュース読んでる雪の国

以上三句を「川柳らしい句」と思われるが、つぎの二句は「俳句性のある句だ」と思うと木下氏は書いている。

—病人の担荷へ雪のふり止まず

—かまくらを作る元気な笑い声

私は、遍歴すぎの老俳人の処生観をあげつらって、木下氏に反ばつしようという気は毛頭ない。一地方における俳人の川柳観がかくの如きものであるという、一つの興味深い〝あるケース〟をご参考までにお眼にかけただけである。皆様がいかがお考えになるかを承りたいところである。

これについて、とりあえず私という一柳人の意見としては次の如きものである。

知識階級の川柳観は、常に木下氏流の解釈から常に一歩も出ていない、ということと、俳人の川柳観が絶えず居候や下女ご隠居のへなぶり意識を潜在させているということ。老俳人のほとんどが、理智、風雅、道徳観の季感風詠にあけくれ、そのみやびすぎる固い頭にふさわしい十徳頭巾を死ぬまで戴せつづけているということであ

酒清
金露
灘・魚崎
大塚合名会社醸

る。

梅は咲いたか、南風に香る梅一輪。この風雅な感興句に、どこに人間の体臭があるというのだろうか。梅はなぜ咲く、どうしてここに、そして一つだけ。それは孤独な生理であるか、それとも虚無の放逸さからであるか、このように人間のこころをもってこそそこに生命がこもるのである。

人間ものごころがつくと、こどもはまずおとなに対して追求やむところのないものは〃なぜ？なぜ？なぜ？〃である。それが終ったローティーンは、あれはいけないこれはいいことだ、の自己判断から生じる批判精神である。

一木下氏のいう〃川柳とはおとなの文学〃という解釈には、お読みの様に〃高度な批判精神〃〃世をはなれた奇智と皮肉、半畳的滑稽味が必須条件となっている〃が、当節の現実では、ローティーンだって〃哀しみよ今日は〃や〃にあんちゃん〃を書くおとな以上の文学力を持っている、その点を参酌するなら、木下氏は川柳観以上に意識下のこどもと解釈しているように考えられてならないのである。この俳諧がおとなのものであるという意識は、言いかえれば木下説によると極端にいえば非芸術性を裏付ける意味にもとれる。つまり童画や童詩は、芸術のジャンルに入り得ないということにも受けとれる。

とにかくローティーンが川柳を手がければ〃世の中を白眼視し、皮肉な野次精神のおういつした、いやな子になるのではないかと思います〃という字句に至っては、戦前よく田舎の小学校でみた、ひげ白き詰襟の老校長の面目を思い出した。この様な校長さんの子は、無口で腺病質で友達の少い子であったことまでことのついでに思い出す。

活字ジャーナリズムと電波ジャーナリズム

不二田一三夫

三月の本社句会の柳話で春巣医博が耳で聞いてもわかる川柳を作れとさけばれた。実はこの穴埋め用の書き出し二枚半は、読んでも聞いてもわかる川柳こそ、現代が要求しているということを強調したものであった。そこでこの駄文よりはるかに春巣医博の柳話のほうが有意義であるからそれを五月号へ活字にしていただくようお願いした。

電波攻勢で活字ジャーナリズムが押され気味のようだが、週刊誌ブームによって、やや立ち直ったというむきもあるが、さあどうであろうか。

民放が出現したころ、目で訴えていた標語を、耳に切りかえるため相当苦しんだ期間があった、拙作から例をあげると

楽を追うなら汗を負え

というのがある。これは耳からではわからない句である。

トモサンで飲みすぎ食べすぎ無事に過ぎ

これならわかるが、読んで見るほど「過ぎ」と合わせた字が強く生きてこない。これからのキャッチ・フレーズは目にも（活字）耳にも（電波）わかるものが要求される。現代のマスコミが、活字ジャーナリズムと電波ジャーナリズムに二分されているからである。

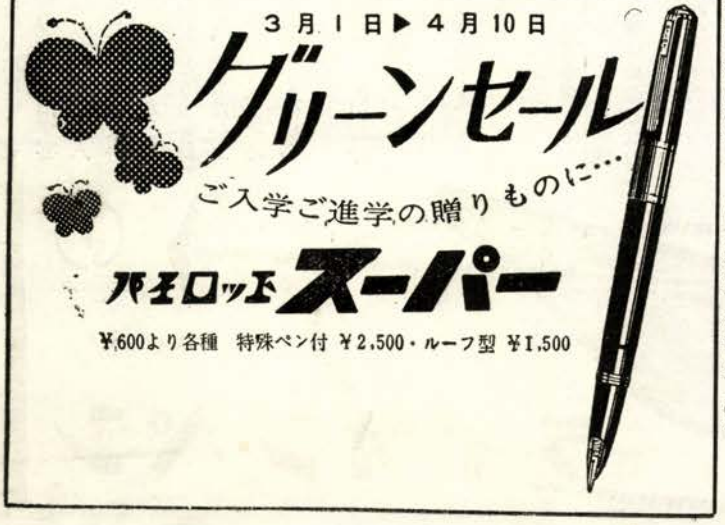
句会で選者が目で読んで選をする。その披講を聞くのは耳である。あたりまえのことではあるが、ここにも活字（目）と電波（耳）の結びつきがあるように思う。

読んで〃いのちある句〃が聞いても〃いのちある句〃でないと後世にのこらぬのではないか。今だにのこる古川柳がそれを立証しているように思う。寄席（よせ）の高座がマスコミの一端をになっていたころ、口から耳へ伝わったものが、今日なお生きているのは、やはりわかりよい句であることが〃いのちある句〃の条件なのであろうと思う。

尋卒とか、尋一というのがある。イヤあってもかまわないが、それは小学校を尋常小学校といったころを詠んだ場合だけ生きているということである。小卒とか小一では感じが出ないから、尋卒、尋一と書いたというのでは、作者だけがわかって、今の若い人にはわからないのではないかと思う。いまは尋常小学校なんてものは、日本にないからである。

作家小山いと子が産経に次のようなことを書いたことがあった。ある大学の教授が、学生から「あの教授はエライ」と感心さすには英語、フランス語、ドイツ語、日本語なら反語調でちんぷんかんぷんのむずかしい話し方をするのだと言っていた。講義をうけるほうは、なんだかわけはわからないが、スゴクその教授がエライ人に見えるのだそうである。川柳の場合、これでは困る。

日本は言葉と文字の国であることに、誇りに似たものを感じている人もあるようであるが、私はその逆で、もっともっと言葉と文字をへらしてほしいと思う一人である。活字ジャーナリズムと電波ジャーナリズムのナワ張り争いは、こんごもはげしく宿命的に続けられていくであろうが、その勝敗は、わかりよいほうが勝つのではないかと思う。なぜならその審判は大衆がするからである。



川柳に惚れる

後藤梅志

高橋かほるさんの句に

たばこぼんつんぼの前に一つあり　かほる

というのがある。

つんぼと、煙草盆とはどんな関係になるか、よく分からない。多分耳が遠くなっては、好きなたばこをくゆらすしか楽しみがない一人のご隠居さんか何かが、ぽつねんと座っているところであろうが、そのたばこ盆一つを前にしてる姿が、この句を読む人の前に、ありありと迫ってくる。そして何んともしれぬ可笑しみと、川柳味がとりこにする。

かほるさんはいつも和服を着て、白足袋をはいていたそうである。川雑の名作家の一人であるが、恐らく、川柳の醍醐味にひたり切っていた人であろうと想像する。

前掲の句にしても、さまで名作とも思われぬが、さりとて、たやすく出来る作品でないことは確かである。実は川柳というものをすっかり、身につけた人でないと作れない、作品であると云いえよう。

川柳が好きだという人は、たくさんある。しかし、川柳に惚れ切っている人は尠いであろう。私はつくづく思うのだが、川柳は単に好きだとか、これを趣味の一つにしようというような、生やさしいことでは、本当の川柳は作れない、と思っている。

私は、惚れるという言葉を使ったが、惚れるとは、いのちを投げ出すことも意味している。つまり、男でも、女でも、惚れ込んでしまえば、もう理屈もなにもない。あばたも笑くぼに見えようし。こっそり女の半襟を拾って、首に巻きつけたりする。ずっと以前に上司小剣の小説で、惚れた女、それは娘義太夫（たれぎた）だが、女の座っていた、あとの畳をなめた、男の恋を読んだ記憶がある。実にその心理は微妙なのだ。恐らくみなさんも経験があると思うが、ひとつ味わって見ていただきたい。川柳もつまり男が女に惚れる。または女が男に惚れ込んでしまって、無理心中でもしかねない、というところまでいくと素晴らしいことになりそうである。それからが、ほんとうの作品になるのではないだろうか。

私の柳友に、柳歴二十五年程のLという人がいる。この人は、大の酒好きで、川柳の外は全く趣味のない人である。余り風采の揚らない、地味で無口な人だが、たまたま会えば、コップでまず酒を出す。話は、帰るまで川柳の話であることはもちろん、川柳を作らない奥さんまで引っ張り込んで、川柳の話をする。奥さんの膝にはもう孫がいる。無邪気ともなんとも云いようがないが、作品は馬鹿にならない佳句をひねり出す。まことに好々爺なのである。奥さんも、「この人は川柳のために生れて来たような人ですわ」と笑っている。

やはり、川柳は一本でなければいけない。

L君と同じような傾向の人は、私の柳友の中に何人も居るが、その人達は、全く川柳に惚れ切った状態である。

惚れるということは、実に純真であり純情である。そして、老人は若返らなければ、なれない状態であることは勿論である。

子供は、テレビを見ていて、五つか六つになると、もう歌謡曲なぞは、すぐ覚えてしまう。子供は雑念がなくて、それに純真であり、余り批判などはもたない。そのせいか、テレビのかもし出す雰囲気にすぐ解けこんでゆく。大人は覚えようとしても覚えられないが、子供は、覚えようとしないでも覚えてゆく。これはどうも年齢の差だけではなくて、微妙な差があるように思う。恐らく子供のは、情感がもり上って行くのであろう。

手近かにある路郎著。新川柳評釈（昭和一三・一〇・一五日刊行）をひらいて見ると、残念ながら、どうもその当時の人の句は、みなうまい。

二、三句拾ってみると

素晴らしい儲けを芸者聞くばかり　星文洞

養うてあげると言はぬ妻となり　雅幽

水門はぢっと耐へて冬の底　鬼仏

初恋の顔に似て来る人形師　耕朗

こんな作品は、川柳に惚れ切った人でないと出来ないと、つくづく思ったことである。

課題吟には選者の短評を

亀崎漫歩

課題「印鑑」について多大の興味と名句を期待して其の発表を待

兼ねていました、然るに発表された入選句に「印章」を詠んだものが意外に多いのに驚きました。句に課題の文字が入れてあれば可なりとするならば別ですがどうも印鑑の焦点を外れているように思います。

金沢庄三郎博士の広辞林に依れば印鑑とは予め官庁に届け出でて提出したる実印の印影、印の真偽を判ずる基となるもの、いんかがみ

となっていて印形或は印章（所謂はんこ）と区別されて居り、証書や手形等に捺した印影とも異る筈です。また銀行、郵便局等の金融機関で其の取引に使用する印を所定の印鑑紙に捺印提出せしめ、取引の不正を防止することになっています。尤も世上で印章を印鑑と云って通用していますが、日本的な川柳雑誌に発表されるものですから、飽くまでも正当な解釈を採りたいものです。

就いては一般の誤解を招かぬために、選者は世上の習慣に随い印鑑を印章と同一に視て採ったと附言される必要があるのではないかと考えます。没になった作者は着想が古いのか、言い廻しが足らぬのか、焦点を外れているのか、その原因が知りたいので、課題吟を作句の修練場としている者のために、今後は一路集の選者の天地人の区別と短評をお願い致します。この意味で三月号に「入選の条件」として発表されている選者の言葉は洵に有益であり勉強する者には良き参考になります。

○

お答え。天地人ということが短評にも通じることなのですが、貴意をよく研究してみます。

—編集局

本社句会

道頓堀へ進出

河井庸佑

文楽座別館四階という近代的な新会場を得て、なにもかもが明るさにあふれるものを感じる。あのやわらかい螢光灯の天井は魅力的でさえあるし、その青畳にいたっては、特に日本的会場として最上のものであろうと思う。作家とは気分のものである。美的にして快的なこの新会場で、ますます柳道にはげみたいと思っている。

これから夏にかけての道頓堀の夜景は正に天下の美観である。

金泥集

麻生葭乃選

課題「覚　悟」

死が近いことを病人知っていた　梨里
覚悟していたか辞世の墨静か　同
離婚する覚悟の恋ははばからず　同
恋はもう夫の許を離れる気　同
青春をみな焼き捨てて嫁く覚悟　春栄
父ちゃんの覚悟へ家中皆呼ばれ　同
年頃の覚悟は母の耳へ来る　同
覚悟やっとついた煙草はにじり消し　同
たかられる腹をくくって来た財布　阿茶
物言わぬ方が覚悟を先きにきめ　同
女もう覚悟の出来た顔をあげ　同
永住の覚悟を乗せた移民船　奈良子
闘病の覚悟あらたに日記買う　同
死んだ気の再出発を励まされ　同
鹹になる覚悟で反抗する若さ　清子
納棺へ別れの覚悟強いられる　同
それだけの覚悟があればと親が折れ　陽子
逃げられぬこの世と知って覚悟きめ　同
失いし視力とならん妻として　若菜
隠し芸もうおとなりへ順が来る　きさ子
もう逢わぬ覚悟へ便り来てにぶり　花代子
世話ずきがやめの覚悟くずしに来　万女
覚悟するいとまもくれず昇天し　一栄
袖口をかんで覚悟がまだつかず　知恵美
家出する覚悟に親の方が折れ　カネ女
覚悟して出て来たらしい顔になり　吟女
ないものは無いと覚悟を決めて寝る　悦子
覚悟した傍の正札妻は見せ　俊江
覚悟して湖水のように澄む心　明美
靴磨き僕も錦を着る覚悟　若芽
家出する覚悟もみせて打ち明ける　友子
覚悟して住めば浮世も又楽し　玉枝
落第と覚悟を決めた遊び振り　風の子
笑われる覚悟で音痴唄いだし　美音子
手術する覚悟盲腸診てもらい　登志子
アルバイトする覚悟なり予習の灯　周甫
日航機保険もつけて覚悟させ　知恵
たよられず養老院へでもと愚痴　初穂
家計簿へ覚悟をきめて禁煙家　小菊
気短かの拳覚悟で聞く丁稚　〆女
手術台もし万一を覚悟する　都詩子
よろめきの夫はあてにせぬ覚悟　たつよ
背負う子に泣かれて覚悟又にぶり　とよ
なおらぬを覚悟のうえで手術させ　白美

ウルトラニッサン
萬年筆専用
専売特許
ニッサンインキ工業株式会社
大阪市天王寺区勝山通四丁目二六
電話天王寺㊼7977

遊山にはヒヨウタン印の酒
銘酒
お父さんの牛乳
白牡丹の銚子瓶
摂津酒造株式會社

大萬川柳八周年記念大会

日時　昭和34年3月22日
会場　割烹　大万

今や柳界の年中行事の一つとなった大万川柳も、ここに八周年を迎えるまでに伸びたことは、路郎先生の名選を慕う各社柳人の熱と力の結集の成果であろう。

この日、そぼ降る春雨をついて出席の四十三柳士が一年の健闘をねぎらい合っている美しい場面も見受けられた。

司会の川村好郎氏はご存知梅里氏の令兄である。昨年の東横綱をことしは梅里氏にゆずりはしたものの、川柳兄弟の貫録は堂々たるものである。開会の辞は不朽洞会理事長土井文蝶氏で、氏の軽妙洒脱の弁は定評があり、川柳道場の決戦場である緊迫感をかるくほぐすあたり氏の独壇場だ。祝辞をおくられる中島生々庵副主幹またユーモアたっぷり。挨拶の松江梅里氏はご自分が東の横綱だけに、そのテーマもご苦心されたようである。なににしても、昨年こそ第四位には落ちたが、第一回からずっと東西の横綱を張ってこられた正に歴史上の人物である。

路郎先生の柳話はさすがに大川柳人であるだけに、川柳への愛情が一言一句ににじみ出て、新人は熱と闘志で古豪を追えと、古豪にも新人にもハッシと打たれる愛のムチは警鐘にも似たひびきがこもっていた。

馥乃先生も毎年ご出席されているのに女流作家のお顔がことしはあまり見かけなかったが、ベスト・テン第一号の女流作家出でよとは、記者のねがいだけではないようだ。

ベスト10と三賞の授与式もめでたくすんで、兼・席題の披講にうつる。

岡山の永松東岸氏が、名門岡山のため万丈の気を吐かれ、兼題選者として出席された。新人ながらその句風を高く買われている橘高薫風子氏が、初出場によく第八位をかち得た健吟ぶりはさすがであった。老練番傘の金泉万楽氏が、昨年第二位の貫祿を見せて、終回まぎわにトントンと群雄を抜いての第九位はその柳歴がものを言ったものである。大万川柳の

昭和33年度ベスト・テン

一、松江梅里　二三・〇　大阪
二、須崎豆秋　二二・〇　大阪
三、北川春巣　二一・〇　大阪
四、不二田一三夫　一九・五　大阪
五、永松東岸　一九・〇　岡山
六、正本水客　一九・〇　大阪
七、川村好郎　一八・〇　泉北
八、橘高薫風子　一七・五　大阪
九、金泉万楽　一三・五　大阪
十、田垣方大　一三・五　倉敷

（努力・技能・敢闘の三賞は橘高薫風子、武部香林、中島生々庵）

川柳不朽洞會（四月現在）

指導
麻生路郎

賛助
長谷川一徹
中田守雄
白川朋吉
中村祐吉
田中辰二
岩崎愛二
中村直勝
麻生磯次
井上吉次郎
島浦精二
魚澄惣五郎
恒藤恭

洞友
田村孝之介
山本雨迷
山路閑古
前田伍健
柴谷宰二郎
麻生葭乃
橋本緑雨
高鷲亜鈍
沢田四郎作
東野大八
速水真珠洞
戸田古方
西尾栞
市場没食子
土井文蝶
若本多久志
川村好郎
三鴨美笑
松江梅里
正本水客
黒川紫香
福田丁路
小西無鬼
西いわを
八木摩天郎
寺井鋭々
高沢一浪
古川魔花麗
前山北海
三輪晩翠
大坂形水
井上湧三
西垣錦風
築山快夢起
市岡暁舟
白砂旋風
藤本満年
須崎豆秋
羽佐間柳葉
福田妄夢
尾崎方正
吉田圭井堂
浜田久米雄
桜川不水
菊沢小松園
逸見灯竿
清水白柳
小川恒明
直原七面山
西森花村
河村日満
足立春雄
榎南夏六
石川侃流洞
牟田一哲
河村瑞川
牛田珊枝郎
木村千容
田垣方大
野村味平
木村水堂
小沢史葉
野ト占
増田耕民
杉谷湖山
弘津柳慶
水谷竹荘
尼綠之助
新川博也
木下幽玉
武部香林
山口秋花
野本呑水
小林文月
亀山晴峯
山根白星
冨岡淡舟
飯降白香
西辻竹青
林野甦光
阿万万的
間島青丹子
岩崎一伸
金井文秋
伊藤茶仏郎
谷光郎
福島鉄児
黄瀬美秋
青木遊星
服部十九平
大森娯句楽
長谷川三司
若林草右
有働茱春
大西迷窓
浜畑胡蝶
阿形一杉
益永貞女
山田季賛
山田鳥荘
山本葉光
木村孤浪
太田良子
小川恒明

不朽洞会員
―特別会員―
中島生々庵
奥村丹路
戸倉普天
上田翠光
―正会員―
吉田水車
大西八歩
石曾根民郎
北川春巣
石井白面人
布施筑川
三輪不水
吉田圭井堂
菊沢小松園
逸見灯竿
清水白柳
山田鳥荘
山本葉光

ベテラン田垣方大氏（倉敷市）が欠席されたので、中島生々庵氏がその代選をされた。

34年度第一回の「盛り場」は路郎先生の一句一句に悲喜こもごも。戦いはもう始まっているのだ。

閉会の辞は若本多久志氏である。そのことばがふるっていた。兼・席題の題名を折り込んでの名文章を披露されたのである。朗笑わくうちに千秋楽とされたあたりお見事なものであった。

ペスト・テン招待懇親宴も盛会で路郎先生の渋い槍さびも出るという、世は正に春や春である。

（F記者）

兼題「栄　冠」　松江梅里選

（天地人と軸吟だけ発表）

栄冠の疲労へマイク容赦せず　一三夫
栄冠へ風呂敷もかり傘も借り　梅志
栄冠のその夜笑いが止まらない　薫風子
栄冠へ内助の功は忘れまい　梅里

兼題「仲　裁」　須崎豆秋選

仲裁があるので声が高うなり　春巣
いい月を褒めて仲裁帰ってき　水客
仲裁が水に流せと唄い出し　香林
仲裁の方も酔ってる転けている　梅志

兼題「雰囲気」　北川春巣選

雰囲気がじわっとシャッ（汗をかき）へ　梅志
勘定を聞いて雰囲気もう褒めず　好郎
寄付になる雰囲気ソット座をはずし　好郎
雰囲気にどもり益々どもるなり　梅志

兼題「人　情」　不二田一三夫選

日雇いの順番かわってやる人情　阿茶
持つものを持つと人情忘れられ　梅里
石に腰かけて人情ふり返えり　水客
金持ちはうかつに人情口にせす

兼題「発　展」　永松東岸選

発展の花輪の蔭の火の車　麦太楼
御近所へ気兼しいしい発展し　多久志
発展を祈りますとて顔出さず　梅里
発展へ常連も来て喜ばれ

席題「底」　正本水客選

腹の底から悪いとも思われず　十悟
二三冊積んだ雑誌は底が売れ　文秋
あの人の底も見えたと思いきり　阿茶
あげ底の貫禄年を笑い合い

席題「嫉　妬」　川村好郎選

ちと妬かしたろと名刺もろうとき（もろうとき）　文秋
嫉妬した音で襖をしめてゆき　進之助
静かなる嫉妬坐ったままで待ち　薫風子
キャバレーをようやめさせぬくせに妬き

席題「提　灯」　橘高薫風子選

おそくなりそう提灯のいる田舎　梅志
信心の大提灯は揺れもせず　水客
提灯を焼く暮切れの山形屋　梅里
提灯を提げて年寄じみてくる

席題「千秋楽」　金泉万楽選

ラク近くなってこなせた役どころ　阿茶
千秋楽お茶子の運ぶ茶のぬるし　文蝶
千秋楽待って不幸を打ち明ける　水客
一敗が三人今日は千秋楽

席題「陽　気」　中島生々庵選

生れつき陽気な児でして不合格　十悟
馬鹿陽気蛙も首をかしげとり　十悟
金のない同士が陽気褒めちぎり　永断
お座持ちが御陽気に二の糸上げて来る

水谷谷水
椙原一善
田村藤波
岡田夜潮
臼井三林坊
稲葉鳩花
下山清潮
本田恵二朗
松川杜的
馬場夢生
村上ゆづる
森本法泉子
小池しげお
竹内圭三
松村万古
藤井春日
津田麦太楼
浜野奇童
橘本幸男
高崎雄声
高橋操子
藤井明朗
永松東岸
野田素身郎
永藤弥平
神谷凡九郎
清水望峰
川端鬼酔
木村十悟
伊達堰子
坂田東洋男
志水礼司
不二田一三夫
酒井ひか平
長尾越鳥
深見雅堂
松下京一楼
津秋六花
野村初甫
戸田喜楽

笹野旭泉子
新岡回天子
池田古心
石居高志
土井雷山
三村柳風子
勝谷山川児
小倉へとち
早川清生
武部若菜
西出一栄
酒田清子
和田登志子
平井井平
阿部柳太
西田柳宏子
辻圭水
松岡委滄浪
中松恒雄
杉本辰一
安部立美
野口迷羊
樋口舟遊
児島与呂志
中島小石
野々口美舟
飯田乃文夫
加納山茶花
水野水茶
小浜牧人
菱田満秋
前川左文字
池上知恵美
岡部三十郎
西尾青一路
橘高薫風子
中村九呂平
多田ほなみ
山田伊三男
岡沢凡志
宮口笛生

桝本蕗児
池戸桃村
石坂新雪
城内吾柳
岡野風の子
西川晃
梅木宗一
田中蛙眠子
野田一念
山本立児
葵丘
林宗高矢寸志
仲井庸佑
どんたく
久家代仕男
本多柳志
原独仙
大谷月都
江国幽谷
光好陽子
徳永鬼美
河相すゝむ
野呂鵜汀
高野むじな
辻白溪子
吉原紅月
竹内千里
岸川蘭蓮
欄
岸川
津田千舟
林田昌男
田中狂二
村上旭童
大前鳴恍
福田多可志
森田茗人
岡嶋芳道
北村三歩
米虫一乃字

榜島静馬
杉原吟女
木山遠二
中谷ハナ子
村山光輪
野村岬月
平沢保美
森下愛論
加藤繁雄
植村客遊子
宗高矢寸志
河井庸佑
小島さぎす
同村虹要
藤村メ女

五十万円のうぐいす

松江梅里

先日友人Kの家を訪問すると、Kは鳥籠を後生大事に風呂敷に包んで、今から出かけるところであった。どうだい君も一緒に行かないかと言われ、何しに行くんだいと問えば、歩きながら話そうと言うので、兎も角ついて行くことにした。行先は大阪の近郊布施市の三の瀬と言うところに名鶯園中野某と言う家である、この家に五十万円もする鶯が居る、先刻の風呂敷に包んだ籠の中にあるKの鶯に、この家の五十万円の鶯の声を聞かすのだと言う、木曜と日曜の週二回通うとのことである。午後一時頃既に先客の愛鳥家達が十数人、各自御持参の鶯籠を前に置いて待っている。午後二時になるといよいよ問題の五十万円の鶯籠をうやうやしく捧げて、この家の主人が奥の間の八畳にある豪華な机の上に置く。十数籠の各自持参の鶯はその机の下に並べられる。宛ら鶯の教祖みたい。今からその鳴く声を聞かすのである。鶯はホーホケキョと鳴くに極っている。どれもこれもおんなじ鳴き声のように思うが、実はそれぞれ違う音律を発するらしい。聞く人の耳に依ってそれが解ると言うから不思議である。奇異の眼を瞠って私はこの雰囲気の中に黙然と耳を傾けていた。しばらくすると問題の鶯が一声千両のホーホケキョーを鳴く。実に素晴しい文字通り玉を転ばすようないい声だ。成る程と感心させられた。鶯に仁丹を呑ませた声とでも言うのでしょう。続いて何回も繰返して鳴く。その間生徒の鶯達はその鳴き声を黙々と聞いているのがまた不思議である。人間の子供以上である。全く感嘆の外はない。約三十分間位聞かせ、摺餌を与えるともう鳴かなくなる。これで一日の講習が終ったことになる。週二回で月謝が二千円と言う今時なかなかいい商売があるものだと思った。

持帰った生徒の鶯はその日一日中は鳴かないそうである。翌朝早くホーホケキョーと一声を上げるまで、その発声法を研究しているらしい。三カ月も通えばどんな音痴な籔うぐいすでも少しずつ上達する。これがやがて一万円乃至五万円で身売りされると言う。

私はつくずく感じさせられた、川柳を学ぶものも大いにこの鶯に教えられるところが多々あると思う。出来るだけ先生、諸先輩の名句を読むこと、常に頭に刻み込む練習をすること、出来る限り句会に出席してよくその雰囲気に陶酔して努めていい声を聞かせて貰うことだと思う。五十万円の鶯には到底なれなくとも努力と勉強次第ではせめて一万円の鶯に上達することは敢えて不可能ではないと思う。

（三四・三・八・記）

無鬼氏の定年

酒井ひか平

定年、こればっかりは仕方がない。ついに無鬼先生に定年が来てしまった。先きに家沢蕣花さん。田代尋四さんと言ったベテランをお送りはしたが、何と言っても篠山支部の大御所無鬼先生の定年退職には、木枯らしが吹く様な淋しさを味わない訳には行かない。

慶弔会長目出度くグラス納めらる

送別会の折、これは私が無鬼先生へ送らせて頂いた一句であるが、課長の椅子に掛けて居られなかったにしても、われわれにとっては先生が心のよりどころであった。

慶びにつけ悲しみにつけ、皆んなは先生のまわりへ寄って行った。敵も味方もない先生は、われわれの心のよりどころであった。

慶弔会長、これが先生の社でのニックネームであった。

あたたかいまな差し、ユーモラスなチョビ髭、しぶい声、実家の半分を町発展の為国鉄バスに提供されたとは言え名門の小西本家の当主である氏の人となりが、そうさせるのである。先生の信仰川柳を抜きにしては先生を考えられない温情は、川柳に無縁なものでさえ認めざるを得なかった。

蕣花さん（もう古い人となられた）尋四さん達は先生に川柳を一から手ほどきして貰われた人達であったが、これらの人達を始め幾十人の人人が川柳を教えられた事であろうか。

勿論仕事本位の職場ではそれらの人人は実らなかったとしても、無鬼イズムのシントウした人人の交りは春風たいとうとして和やかの一語に尽きた。

惜しい、だがいたし方がない。会社員として定年の銀杯を頂かれる日こそ、最良の目出度い日でなくてはならないのである。

やめられた後でも川柳に尽して頂くには変りない。いやそれ以上に頑張って頂く余暇を得られたのである。

篠山支部の発展も無鬼先生の定年後の大事業と言ってさしつかえないと思うのであるが、今後共御健康を祈る。その健康があればこそ、我々は少しも不安を感じないのである。

年を知らない無鬼先生、何時までも在社当時のあのハツラツとした御健康をお祈り致したいのである。

それにしても、四月の篠山川柳大会は盛大にして上げたいものである。

川雑西宮支部
結成記念句会

日時 四月十九日（日）午后一時
会場 西宮市労働会館
（阪神西宮駅北側出口スグ）
祝辞 **麻生路郎先生**外
兼題「人気」 三句 土井文蝶選
「新酒」 三句 川村好郎選
「登る」 三句 西いわを選
「水」 三句 西尾 栞選
「やんちゃ」三句 西尾青一路選
（投句のみの方は十五日必着のこと）
席題 当日発表 三題
会費 三〇円
何卒御出席の程お待ちしています。
投句先 西宮市津門西口町五〇
若本方 **川雑西宮支部**

川柳雑誌社篠山支部
満十周年記念
篠山川柳大会
▽**日時** 四月十日（祝日）午前十一時より午後四時半
▽**会場** 乳雀会館（兵庫県多紀郡篠山町上立町省線バス王地山粕荷前下車東二分）
▽▽**講演**
兼題 題跡未定（趾）麻生葭乃先生選
城
にら先生 北川春巣氏選
む 西尾 栞氏選
おお 土井文蝶氏選
篠山 小西無鬼選
祝 酒井ひか平選
▽▽**席題**
▽**会費** 懇談会（会費三百円見当、旅館割引交渉ずみ）午後五時より
その他 三句以内のこと。〆切日
当日発表
お互い選者
百円共発表
▼各題 昭和34年4月7日
用紙は縦六寸、横一寸の白紙に一句宛清記、裏面に住所と姓名及雅号
投句料 三〇円又は八円切手一円枚同封
投句先 兵庫県多紀郡篠山町小川町 川柳雑誌社篠山支部

本社川柳不朽洞会維持会員内藤草一郎氏の死を二月三日付布哇報知が次ぎのように発表した。なおハワイタイムズへ鬚山快意起氏が、布哇報知へは前山北海氏が故人をしのぶ稿を寄せられた。

草一郎氏の絶句となったのは、左の四句であった。

ふびんにも靴と頭の光るだけ

吸殻のような余生も人眼には

イサイフミ待てず長距離申込み

感無量抱いて寝た夜もある手紙

風邪おして出勤

＝内藤夫人の話

内藤氏の訃報を聞いて、ヤング街の宅を訪れると、悲嘆に暮れる夫人の内藤和子さんは、左の如く語った。

『最近マンデーは休みなのですが、仕事だと言うので風邪気味をおして、朝六時十分頃家を出て行きました。私が弟の二木製麺所へ行っていますと、九時半頃警察から迎えに来て夫を認識してくれとのことで、警察病院へ行きますと、朝とは変り果てた物言わぬ夫となっていました。ポケットにこんな紙片があった、と警官が渡してくれたのがこれです』

夫人が記者に示したのが、前掲の今は悲しくも草一郎氏の絶筆となった四句を認めたものであった。

○

柳人内藤草一郎氏 作句ポケットに轢死

ヤング街一二六八Aの内藤秀雄氏（六一）は、昨二日朝六時三十九分、ハワイ鳳梨会社表門近くのデリングハム大通りの横断路白線内を歩行中、疾走して来たカイムキ街二二七四のベンジャミン・カマカニ（五八）の自動車に二十呎も刎ね飛ばされて、致命傷を受け、警察病院へ救急車で運ばれる途上絶命し、オアフ島今年第四番目の交通事故犠牲者となった。

絶句となった出勤バス内の作句

内藤氏は、柳名を草一郎と号し、ハワイ柳壇で知られた柳人で、川柳ウイロー社同人、大阪川柳雑誌主宰の麻生路郎氏門下であった。警察病院で遺骸を調べた折着用のスウエターのポケットには一葉の紙片が発見されたが、それにはバスで出勤途上の作と思われる、四句が鉛筆で走り書してあり死の直前まで作句に徹した柳人の面目を躍如と偲ばせるものがあった。

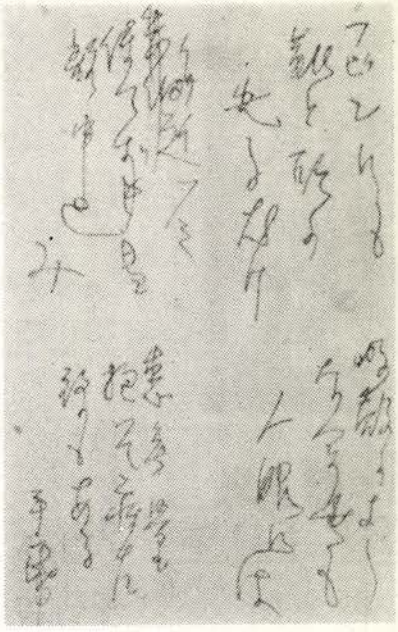
ありし日の内藤草一郎氏

草一郎句抄

悲しくも嬉しや形見の靴が合い
青春を忘れて貯めはしたものの
世はさまざま白髪を禿に羨まれ
けなげにも仲居になると一年忌
子の目にも二度目の父は金がありオートメーション凄かむ暇も無かりけり
暇なので見る丈けと云う分譲地
義理でするサインペン先引っかかり
タキシード着て寄るクラブ映画めき
不景気のお蔭女給等寄って酌ぎ
ホリウッド見て来たと云う化粧振り
子が皆んな巣立って広さ持て余し
無縁塚移民哀史の一員
湯豆腐で一つときUSA忘れ
むっとして出ればマットに躓つまずき
補聴器が儲け話へトーンを上げ
ワイシャツの汚れ別れたなと思い
ハンサムの人から女給先に酌ぎ
裸婦の像なでても見たくなるも春
失恋のそれから靴は磨かれず
女手に育ち文士になるつもり
引退後行く気フランス語を習い
握手する程度のキッスとはなりぬ
失礼な眼にも恐れずモデル老い
自分より旦那好みの柄を撰り
成功を見せに寄られた迷惑さ
魔がさした位の浮気じゃ御座んせん
ヒスの余波紅棒邪見に投げられる
美しい入日も恋は背を向けて
女房の方が金側時計出し
月賦とは見えぬ指輪の手を重ね
本名でかけりゃ奥様気がつかず
初産へ歩くまである貰いもの
一年忌まだ鏡台もそのまんま
左前胃腸が知らぬ間になおり
仕事より仕事のなさが疲れさせ
大学を出したに労組の幹事とは
欲しいなあボクサーの如き面の皮
もっと呑ませて上げたかったと近ってから
経験は尊とかろうが又振られ
雑婚の悲劇娘でない親でない
その時は骨を故郷へ頼んどき
親切にされたも親の光るうち
対等で妻が口きく程に老い
スカートの赤さが鋪道を暑くする
揚底の様な議員が視察とか
作戦をネクタイ結びながら練り
鼻につきゃ紅の濃ゆさも暑苦し
別宅は敷かれる憂さの捨てどころ

ハワイの重鎮

内藤草一郎をしのぶ



交通事故で横死された内藤草一郎氏の着用のスウエターのポケットから発見された一束の紙片。それは出勤途上の作と思われる四句の鉛筆の走り書きがこのカットの写真である。

川柳雑誌社ハワイ支部、川柳ウイロー社の同人諸氏が哀切こもごもつづる追悼のペン。

草一郎を思う

古川魔花麗

草一郎と酒

草一郎は死んでしもうた。全く淋しいことだ。

彼は酒がすきであった。強い方ではなかったが、僕のとてもよい飲み相手であった。一浪がこちらに居た頃は句会が済むと、必ず一浪を先頭に、草一郎と僕の三人でどこかえ繰込んだものだ。

どちらかと言うと洋酒より日本酒を好んだ「姐さんゥンと熱くして呉れ」と黄色がかった声で草一郎が注文した。菊はどうだの桜はどうだの沢の鶴はどうだとよく、文句を聞かされた。

ハイボールでは味のない思ひ差し
二上りも都々逸も出ぬハイボール
スコッチがどうのと口程飲めもせず

と洋酒にはあまり好意を持って居なかったが

梯子酒ネオンに赤く濡れながら
貸し浴着仝じ酒とは思はれず
帰化しても唄は二上り三下り
湯豆腐で一つときUSA忘れ

等々日本的雰囲気の酒には非常に好意的であった。

そうした彼がもうこの世に居ないとなると、一層淋しさが増して来る。

草一郎と女

草一郎は死んでしもうた。全く淋しいことだ。

彼はとても女が好きであった。彼の体軀相貌からして、生きた女より文字の上の女が好きであった。一杯きこし召すと「川柳は女偏を持って来なくちゃあねー、魔花麗どうだ」とよくやられたものだ。

二世の仲居さんを捕えてシャレを飛ばして見るが、一向に効き目がないので、自分が豆鉄砲を食った様な顔をしていることも度々あった。

インテリの女給又身の上を訊かれて居
悪縁の方が楽しく面白く
ほつれ毛の美がないパーマもの足らず
娘の様な年と笑はれたりとても
未亡人その心境をみな言はず
看板が近くどの娘も紅が剝げ
けなげにも仲居になると一年忌

など彼の句を読んでいると彼と遊んだころのことが、走馬燈の様に僕の脳裡をかけめぐる。

そうした彼がもうこの世に居ないとなると一層淋しさが増して来る。

草一郎は死んでしもうた全く淋しいことだ。

こうした原稿を書かねばならぬ僕は悲しい。

（引用句はすべて草一郎作）

草一郎君を悼む

市岡暁舟

僕が草一郎君を知ったのは恐らく三十六年も昔だったと記憶しています。当時貿易商武村商会から派遣されその後卸商小山商店の簿記係として相当活躍されていました。性来洒落の上手な人でよく駄洒落を飛ばしては周囲の友人達を笑わして居ました。あの忌わしい太平洋戦争当時は独立商店を経営、可成好調の波に乗っていた様でしたが、ふとした大事から健康を害して、両耳の聴覚を失い、一時は失望のどん底に叩き落され、悲嘆の極に達していましたが、究極に於いて彼は川柳を作句する事によって、明朗と希望を取戻す事を発見したのでありました。

事実草一郎君の句は断然他を圧しており、また川雑誌上でも度々麻生先生のお眼に止まっていました。あの悲しい事故突発の朝、彼のセータのポケットから発見された紙片にあった——。

吸殻の様な余生も人眼にはイサイフミ待てず長距離申込み
感無量抱いて寝た夜もある手紙
フビンにも靴と頭の光るだけ

四句、嗚呼これが彼の絶句に成ろうとは。

わがウィロー社の至宝、草一郎君の此度の長逝はただ簡単に寿命

とか定命とかで割切ってしまう事が出来ない感がするのは、吾々川柳する者のみが持つ一種の欲心からでしょうか。

草一郎君が布哇柳壇へ残した足跡は実に偉大であります。後に残った吾々は彼の冥福を祈る為にも今後の布哇柳壇の向上発展のために益々精進して進みたいと念願しています。

ああ草一郎

羽佐間柳葉

去る二月二日の朝九時過ぎ二日前に着いた川柳雑誌を読んでおった時、電話のベルが鳴り響いた。受話器を耳に当つれば築山さんの声が流れてきた。処が如何したと言うのか築山さんの声は暗く沈んでおった。今朝六時半すぎ内藤氏は仕事に行く途上鳳梨会社の門前近くで道を横切る時、折から疾走して来た自動車に跳ねられて、同行者の一人は重傷、残念にも草一郎は即死との知らせ、僕は夢でないかと思った。余りその驚きが激しかったので、咄嗟には返答も出来ぬ始末だった。人生朝露の如しと云う言を人はよく言う。仏教徒の僕の耳には余りにも聞き馴らされた言葉である。だが、然し何と適切にそうして真理に当嵌った言葉であろうか、僅か十日許り前の新年句会で会った時、お互の健康とウィロー社の向上を祝って固い握手を交わし語り合った時のあの温顔、誰からでも愛せられ、また親しまれた彼の性格、あの人なつこい風手、されど今はこの世の人ではなくなった。

一瞬にして幽明境を異にしたウイロー社のホープ草一郎の悲しい知らせ、真宗の祖親鸞聖人の詠まれたる歌に、明日ありと思う心の仇桜夜半に嵐の吹かぬものかわ。と言う歌がある。柳友草一郎は憐れ一朝の嵐に前途ある柳才を惜しまれつつ無惨にも散ってしまった。葬儀場に安置されし棺側を飾る数十の花輪は彼が生前の徳を讃え、会葬者も亦さしもに広い式場に溢れた。葬儀は一切ウィロー社同人に依って行われ、真の意味に於ける川柳葬であった。会葬者を代表した築山快夢起氏の弔辞は故人草一郎の遺句を引用して真に声涙共に下るものであった。

川柳即生活川柳と共に生きた彼が今生の別れに最も相応しい式であった。川柳と共に歩んだ草一郎が三十年の歳月彼は定めし蓮の座でも川柳の句作をする事であろう。

梅の精

築山快夢起

草一郎の思出を書こうと思って過去の様々な事を考えていると、彼の面影がすぐに頭脳に浮んでくる、あの小造りな瘠形の如何にも通人らしい風貌、少し御酒がまわると口を衝いて出るユーモアと警句、そして一度想を練ればあの風格のある句をひねり出す草一郎はどこから見ても生え抜きの川柳人であった。

戦前彼がまだ市内パラマに内藤商社を経営し、日本から雑貨や売薬類を輸入していた時分、「梅の精」と言う避妊薬を売って大いに儲けた話がある。今でこそ産制は米国は勿論内地でも、ブランドプランニング計画家庭とかに変名して、誰憚からずに奨励実行されているけれど、あの頃は此国でも産制には相当官憲の眼が光っていた御時世で、そこは抜目ない彼のことであるから税関の方は、胃腸薬か何かの名目で通していたに違いない、今でも記憶に残っているのは、邦字新聞にのせた風変りな広告で、梅花のカットの下に「梅の精」とありその側に

梅の精それから春となりにけり

の自作の一句がのせてあっただけで、世間でもそれが何の広告か不審に思っていたに違いないが、それでも蛇の道は蛇とやらで、その方面には相当知れわたり、可成のビジネスになったらしい、日本からも可成の数量が輸入された。

ところが在外同胞間によくある他人の成功を羨む卑劣漢が現われ、税関に密告して薬の正体を曝露したから堪らない。最終に輸入された積荷は全部没収されて仕舞い、「梅の精」はそれぎり市場から姿を消してしまった。

「あの時はホントに弱ったよ」と当時を述懐して語る草一郎の横顔が今も見える様である。

あの顔あの声

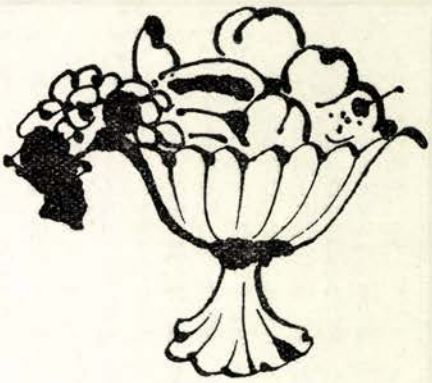
本田平八郎

第一世界大戦の戦時景気に乗った頃だから、今から考えて見ると大分古い。キング街より海手のマウナケヤ街にハワイ投資会社という卸商があって、その店を中心にして集る人達で、ニコニコ倶楽部という飲会が組織されていた。そのクラブの主だった人物は斉藤宗一、川崎勢太郎、石田久寿郎の三氏だったが、三人とも亡くなってしまっている。草一郎、内藤秀雄さんも、そのクラブの会員だったが、内藤さんも私もまだ二十代で、会員の中では若い方の組であった。

それほど古い飲み友達でありながら、接触が中絶して時偶しか会う機会がなかった。第二世界大戦乱でいよいよ遠ざかり、日米戦が平和になった直後に、意外にも満員バスの混み合うなかで内藤さんに会った。なつかしかったと見えて、双方から人を掻きわけて近よって、久しぶりに手を握り合って話を交わしたが、内藤さんがひどく耳が遠くなっているのにびっくりしたのであった。

その時に、僕も廃人になってしまったよ、と淋しそうな表情を見せた内藤さんを、亡くなった今でもまざまざと思い出す。ホノルル柳界の先輩の話では、内藤さんは耳が遠くなってから、句作に対する真剣味が、一層つよくなって来たということである。

私がウイロー社に入れて貰ったのは、一昨年の十一月句会からであるが、内藤さんが喜んで迎えてくれたことを忘れない。それから月に一回会える様になって、時には筆談もした人が、この二月の句会から、永久に姿を見せない様になってしまった。これからの句会の度ごとに、年よりも遙かに若若しく見えたあの顔、あの声でひょっくり席に連なりそうな気もちが私には当分つづきそうに思えてならない。



一路集

愛情

若本多久志選

真実の愛を女給で疑がわれきえ　真
愛情は菊のカーテン取ってのけたもつ　愛
愛情が露骨になって疑ぐられ宗太郎　愛
愛情とやはりお金もあって欲し夢路　愛
愛情を胸毛の中で信じきり雄々　愛
薄れ行く愛を見抜いた花名刺一休　薄
愛情の嵐に耐えて遺児と生き隆文　愛
痛い程つねって見るも愛情か初甫　痛
だしぬけに妻愛情のことにふれ俊見　だ
手招きをする母の手に飴一つ俊見　手
愛情の深さを女中見てしまい与根一　愛
胸毛ふさふさ男の愛は無口なり葉光　胸
愛情に負けそうになり茶を入れる岳詩　愛

愛情の限界且那は左前牧人　愛
愛情はもう疑わぬ老夫婦鵜汀　愛
愛情を支える皺を塗りかくし保美　愛
愛情の答笑っただけで足り南牛史　愛
愛情を又こまやかにするけんか保夫　愛
愛情を五等分して子が育ち恵二朗　愛
愛情で結ばれたのよとためらわず晃康　愛
愛情に応えて家路真っ直ぐに蜻蛉　愛
愛情をあの手この手でさぐりに来幽谷　愛
惜しみなく与えた頃に秋の風葉春　惜
愛情も売り切れた顔終電車どんたく　愛
愛情をこきざみにして女生き友子　愛
愛情をためされためしして二人豊年　愛
妬くとこを見れば愛情あるらしい庸佑　妬
愛情を言う程で無し総入歯句念坊　愛
愛情に飢えてネオンの灯に迷い東岸　愛
愛情も湧かぬ女と手をつなぎ十九平　愛

愛情は金で買えない事を知り旭峯　愛
愛情は休止符金でけりを付け頼光　愛
父親の愛情かんかんになって叱り蘭　父
愛情と別に男にある浮気圭水　愛
愛情を信じ合ってる共稼ぎ越山　愛
ほんのりとやいてくれるも愛情か越山　ほ
愛情の真否を星に問うて見る泰之　愛

佳

老妻の愛情清水のように湧き恵二朗　老
つねられて愛情痛いものと知り一恒　つ
愛情が湯気で剝がした娘の秘密七星　愛
助けようもない夜更かしへ共に起きみのる　助
奪われてあら愛情のわく不思議実男　奪

人

「勝手にせい」と言ってた父も髪つかれず忠三　「勝

地

行商の不運へ贈る子の古着八九寸　行

天

愛情を信じ静かに産着縫う雄々　愛

軸

出来ぬ子に机の位置を変えてやり　出

自炊

冨岡淡舟選

月末の自炊同じものを食べ柳瓢子　月
日曜の自炊は昼まで寝るつもりたもつ　日
自炊する友が一番貯めて居り和三郎　自
朝飯もぬいて自炊になれてくる文平　朝
電気釜自炊の朝寝させてくれ吉枝　電

好きなものばかり自炊はっくなり圭水　好
栄養の本もたまには読む自炊蘭　栄
寒い日は自炊うどんで済ましとき句念坊　寒
病院の隅で小さく自炊する鳴恍　病
自炊また女房貰えとひやかされ恒雄　自
級友が自炊の味をほめて食べ隆文　級
不便だっしゃろと自炊に菜をくれ保夫　不
自炊して詩を愛し歌をよみ同　自
自炊する米は故郷から送って来古心　自
お不自由でしょねと自炊に謎をかけ春雄　お
自炊して故郷の夕餉をなつかしみたけお　自
自炊を覚悟で別居申し出る一鶴　自
自炊して成程不便な台所同　自
栄転へ今更自炊と言うとれず俊見　栄
自炊三日里へ女房を呼びに行き狂二　自
君とこも葱かと八百屋で会う自炊光郎　君
赤飯を貰って自炊の手がはぶけ同　赤
缶詰の空で自炊の米測り宗太郎　缶
自炊した頃の腕前留守に見せ黒天子　自
お隣り自炊ヒューズをまたとばし敏子　お
自炊してわかった母のありがたし新石　自
上京の母に自炊の腕を見せ参無子　上
小包が来てから自炊もちばかり愛鳩　小

――編集局から

選者の方に。このページでは選評を活字にせぬことになっていますので、ご寸感を寄せられるときには、別紙で二―三枚程度の原稿でお願いします。

自炊してもと進学 親を説き 同
親の目をのがれるための自炊する 実男
自炊又パンをかじっている朝寝 同
親友が来れば自炊を手伝わせ 無閑
自炊でっかと炊事場のぞかれる 庸佑
缶詰で今日も暮れゆく自炊なり 菜春
目ざましを佗しく巻いて自炊なり 同
自炊していますとパンを噛っとり 保美
鍋一つ自炊上手に使いわけ 同
自炊今朝昨夜のままの膳に付き 鵜汀
面倒で一食抜いておく自炊 同
いざこざがあって自炊の日が続き 進之助
特価品許りあさっている自炊 同
俺の腕見とけと自炊喰わせる気 堅持
謝まらす積りの自炊やって来ず 圭井堂
鼻唄の自炊うれしいことがあり 豊年
結局は豆腐の汁にした自炊 同
廊下まで焦げた匂いのする自炊 牧人
自炊にも馴れて産後の妻を待ち 同
自炊する覚悟単身赴任する 岳詩
自炊から辛抱して来た廻り椅子 夢路
自炊生活チャルメラと仲が良し 恵二朗
家計簿へ葱一本も書く自炊 陽子
自炊にも馴れてたまにはスキもやり 蜻蛉
自炊する夫へ済まぬ箸をとり 七星
富士さんが見える二階で自炊する 越山
自炊する部屋に万年床があり 夜潮
ままごとのように自炊の道具だて 美音子

当分は自炊ですよと左遷発ち 不二
奥様に逃げられましたという自炊 同
文化的自炊へ小遣い不足がち 雄々
自炊して誰に遠慮のない手盛 藤波
つらあてもあって自炊がやめられず 上利
自炊しいしい浪人組がん張る気 白葩
上京の自炊を訪えば女下駄 井蛙
自炊する窓もやっぱり春の色 初甫
三人になって自炊の好ききらい 与根一
めざしにも飽きた自炊は町に出る どんたく
転勤へ自炊身軽に赴任する 旭峯
見合でもせえと自炊はおちょくられ 東岸

佳

失業に自炊の水の冷たすぎ 楽天
自炊して軒の雀と仲がよし 葉光
自炊多年まだ表彰の沙汰もなし 夜潮
自炊する俺のナイフは葱くさい 越山
罐切がいつも光っている自炊 十九平

人

老猫に自炊の窓をのぞかれる 慈雨

地

自炊してからAが欠けBが足り 九呂平

天

てんぷらに飽きてんぷらを食う自炊 暁明

見栄

直原七面山選

鰯を買う見栄を魚屋見抜いとり 美音子
大口の寄附も旧家としての見栄 十九平
見栄を張る心汚職に名を列らね 圭水
ネクタイを毎日変える淡い見栄 東二
奥様の見栄商人につけ込まれ 愛鳩
見栄ばかり張ってもおれぬ台所 初甫
女房の見栄に月賦と手が切れず 井蛙
掃除夫と言わずデパート勤務です 光郎
見栄坊が今日も変った靴をはき たけお
家柄と言う見栄があり寄附の高 狂二
長屋にもある見栄うなぎ焼く匂い 参無子
父兄会綺麗な着物着て来てね 菜春
ファッションショウに女の見栄のありったけ きえ
御先祖がどうのとっらい夢を持ち 不二
見栄だけを張って取柄のない女 旭峯
出来もせぬ子の尻たたく親の見栄 実男
惚れた娘へせい一杯の見栄を張り 藤波
すき焼を毎日食ってるように言い 恵二朗
捨て切れぬ見栄へ苦しい日が続き すみ江
見栄張って見ても教養ついて来ず 陽子
年寄りの見栄玄関に金をかけ 保夫
見栄のある母浪人を続けさせ 三舟
借衣裳してまで母は見栄を張り 隆文
嫁がせる見栄が一車に積み切れず 鵜汀
ライバルに負けまい見栄を張りつづけ 真奇
見栄捨ててから真実の愛にふれ 敏子
見栄坊の妻へ借金またかさみ 友子
近所への見栄アンテナを高く張り 牧人

佳

見栄張って君アメリカはアメリカは 葉光
流行に遅れぬ見栄を持ち合せ 越山
見栄なんかもう捨てました作業服 春雄
見栄だけは芦屋マダムに負けていず 友子
父ちゃんの見栄はネクタイ替えただけ 保美
見栄張った二等で訛に気を使い 美音子
見栄みんな捨てて場末の小商人 白葩
百貨店の車を横づけさせる見栄 雄声
東大を受けさせますと親の見栄 恒雄
見栄捨てた破れ衣へ春の風 どんたく

人

見栄張って見たとてたかが長屋の子 吉枝

地

金の無いのが払います払います どんたく

天

琴三日習うて嫁ぐ荷に加え 渋柿

軸

墓を直ぐ建てて呉れよと死んで行き

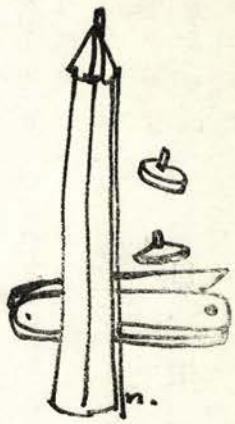
投句される方に。 文字は楷書で、出来得るかぎり本社の柳箋をお使いになるか、整理上本社柳箋と同寸法の用紙を御使用ください。

川柳雑誌社特製

投句用 柳箋

一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）八円

柳界展望



句会

▼本社四月句会は皇太子殿下御成婚を祝して十六日（木）午後六時から道頓堀文楽座別館四階で開催される。柳友誘い合わされ一人でも多く出席をお願いする。▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）句会は三月十七日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は三月二十六日午後六時から難波の親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は三月二十七日午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪亜信病院川柳会は三月二十八日午後二時から五階会議室で開催。以上路郎主幹出席。▼故後藤蝶五郎氏追悼川柳大会は三月二十一日（土）午前十時より青森市合浦公園内八百善で、故人を偲ぶ多数の柳人により盛大なうちにもしめやかに開催。▼川柳たましま社（玉島市）は三月一日（日）一周年記念岡山県大会を玉島木谷会館で開催。盛会であった。▼川雑倉敷支部（倉敷市）句会は三月八日（日）一時から椙原一善居で開催。▼川雑岡山支部（岡山市）句会は三月十五日（日）日赤岡山支部で開催。▼岡山電報局ゆめ句会は三月二日江国幽谷居で開催。▼川雑備前支部句会は三月十四日に久米雄居で開催された。▼堺川柳グループでは岡田鹿の子氏が今回医博になられたので、その祝賀句会を三月廿九日（日）午後一時から堺市市立図書館階上で開催。▼川雑西宮支部発足記念川柳大会は四月十九日（日）午後一時から西宮市労働会館（阪神西宮北出口すぐ）で開催。兼題其他詳細は三二頁下段広告参照。▼皇太子殿下御成婚祝賀豊中川柳大会は四月十二日（日）午後一時から豊中市岡町豊中中央公民館で開催。兼題スタイル・故郷・日本晴れ・出発席題二題当日発表、投句は葉書に各題三句を明記の上四月五日までに豊中中央公民館内豊中川柳会宛。▼たんぽぽ川柳会創立一周年記念大会は四月五日（日）午前十時半より熊本市交通局職員寮大広間で開催。兼題山芋・石蕗・親子・森の都・閑人・花席題五題当日発表、投句は五十円封入の上三月三十一日までに熊本市大江町九品寺六〇四熊本交通局幡野五梅宛。▼篠山川柳大会は四月十日（金）午前十一時から篠山町立町孔雀会館で開催。兼題其他詳細は三二頁下段広告参照。▼吉永町（岡山県）短詩文芸（俳句・川柳）合同大会は四月十二日（日）正午より吉永小学校で開催。川柳の部兼題春霞・苗代・麦・雨席題三題当日発表。各題五句以内。▼第十回愛媛県春の川柳大会は四月十二日（日）午前十時から道後公会堂大広間で開催。兼題能面・眉・悪筆・飛びきり・逆戻り・実力・思いだし笑い、投句は五十円封入の上四月五日までに松山市鮒屋町川柳まつやま吟社宛。▼番傘折鶴七周年金泉万楽還暦和田碧郎古稀丹波太路古稀記念川柳大会は四月十九日（日）正午から日の本ホテル大会議室で開催。兼題浪曲・洗濯・愛称・理想・路・夫婦投句は各題三句を別紙に明記切手五十円同封の上大阪市東住吉区田辺東之町五ノ一八丹波太路方番傘折鶴川柳会宛。▼井上信子師一周忌句会は五月五日（火）午後一時から鎌倉市建長寺山内で開催。宿題雑詠五句一組（追加可能）選者　麻生路郎・川上三太郎・石原青竜刀・村田周魚・椙元紋太氏等、投句は一組百円（追加分は五十円）封入の上四月十日までに東京都町田局区内上鶴間四八四八川柳人編集所句会係宛。

柳誌・句集

▲喜多春秋子川柳「磊々集」が二月二十日かつ子未亡人の手によって刊行された。B列6号、八十余頁の美本、非売品、氏は生前川雑神戸支部時代に支部同人として活躍されていた名作家である。▼月刊川柳「ねぶた」（黒石市）は三月号を後藤蝶五郎追悼号として発刊された。故人の句「目を閉じて灰色もよき色のうち」

句碑

▼長崎川柳協会の池田可宵氏句碑建設委員会では三月十日から四月三十日まで句碑建設基金を募集されている。一口百円（何口でも可）建設場所は国立公園雲仙で除幕式はつつじ咲く頃の五月十七日とのこと。申込所は長崎市岩川町一ノ三五赤瀬紅短冊方。

消息

▼路郎主幹は故食満南北の南北亭落成式、句碑除幕式、三回忌法要等の打合せ会に三月一日正午、堺市南宗寺境内の南北亭に出席された。上述の式典は五月十七日（日）に執行されることとなった。▼丸尾潮花氏（大阪市）は二月三日奥津温泉に遊ばれ、栃の花と渓流の音に日頃の疲れを癒された。「もう誰もいない瀬音へひとり立ち」。▼橋本緑雨氏（大阪市）は二月二十五日南紀白浜温泉に遊ば

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社 大坂商店
大阪市東区淡路町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

れ「白浜で二月の寒さ忘れて居」の句信を寄せられた。▼小西無鬼氏（兵庫県）は三月三日来社、四月十日の築山川柳大会について路郎主幹と種々懇談された。▼西尾栞氏（大阪市）は八十二才の母堂へ最後の孝行と細君孝行のため三月十七日から九州路の旅に出られた、由布院温泉から「豊後路や半月早い花にあい」の句信を寄せられた。▼句会部打合せは三月三日午後六時本社で開催。出席者は文蝶・紫香・潮花・水堂・淡舟・与呂志・狂二の諸氏。▼八木摩天郎氏（堺市）は三月三日出版打合せの為来社。▼小池鯉生氏（浦和市）は二月十七日浦和駅前でまるい鶏卵店を開店され、三太郎・周魚両氏からの祝吟卵の句を書いた短冊型の立看板を立てかけていられる由。▼福田丁路氏（高槻市）は三月二十一日二十二日の連休を利用して南紀潮岬から湯川温泉に遊ばれ「今を盛りの桜の花がゆをのぞき」の句信を寄せられた。▼河本南牛史氏（松山市外）は三月のNHK川柳腕くらべの録音が、自分の村の石井村公民館で催されることになったのでこれを機会に柳友が殖えるだろうと喜びの頼信があった。▼木谷竹荘氏（大阪市）は三月十五日鳥羽のあわび伊勢の真珠桑名の蛤しじみ貝など貝の産地を歴遊、「川柳歳時記」の取材紀行をされ、伊勢湯の山温泉に一泊された。▼直原七面山氏（岡山県）は三月三日より五日まで山陰皆生温泉に遊ばれ「その昔君と睦みし皆生の湯」の句信を寄せられた。▼中村九呂平氏（下関市）は三月十五日令息四呂平氏を同伴来社、路郎主幹葭乃女史と歓談された。▼直原七面山氏（岡山県）は三月二日午後三時から約二時間岡山市旭川療育園で職員に川柳の講話をされた。▼田垣方大氏（倉敷市）椙原一善氏（倉敷市）は三月七日夜一泊の日程で川柳並木会（笠岡市）四周年記念会に出席、歓談された。▼月原宵明氏（今治市）は胃病のため入院加療、退院後も約一ヵ月間自宅で療養されると。▼菱田満秋氏（大阪市）は発病以来満九年療養生活を続けられていたが、三月四日全快めでたく退院され、本当に春らしい春を迎えられた心からお祝い申し上げる。▼山田季賛氏（広島県）は三月七日忙しい年度末の仕事の余暇に広島市福屋百貨店で山下清作品展を鑑賞された由。

弔

▼宮田不二氏（東京都）は三月十六日に脳出血のため仆られ、直ちに入院加養された。三月十九日午後十時五十分に薬石効なく永眠された。謹んで悼む。なお同氏の追悼記事は次号に発表することになったので同氏と格別にじっこんにされた方々は追悼句又は思い出の記を御恵投ありたい。▼久家代仕男氏（平田市）の厳父は二月十九日死去。謹悼。▼品川陣居氏（東京都）は永らく入院加養中であったが、三月七日午後〇時半、肺臓ガンのため亡くなられた。本誌寄稿家として異彩を放っていられただけに、その訃は惜まれてならない。謹んでお悼み申上げる。

改　号

▼同村虹要（石川県）は島パラオの改号を取消し元の虹要の号を用いられることとなった。▼村山静修氏（大阪市）は今回光輪と改号された。

正　誤

▼三月号四一頁上段一行目、有岡とあるは柳宏子の誤りに付訂正。▼三月号の二九頁四段一九行目、べったりだんべったりだんとあるはべったりべったりだんだんの誤りに付訂正。▼三月号二七頁三段四行目朱雲洞とあるは朱雪洞の誤りにつき訂正。（薫）

不朽洞会から

今年七月十二日（日）の川雑川柳まつりは、少し趣きを変えてやってはどうかという意見があったので、本会では、そのための企画委員、生々庵・文蝶・好郎・いわを・栞・多久志・梅里の諸氏が決り、盛んに案を練って居り、何れ実行委員もきめてガン張ることになっているのでよろしく御協力をお願いしたい。今年度からは「特別課題」を次号に発表し、六月末に締切り、その成績発表を「川雑川柳まつり」当日にするに決定した。次号課題を見落されぬようお願いする。投句規定は課題と同時に発表する。

★新会員紹介

三　月

同村虹要（石川県）正会員
——豆秋氏推薦

四　月

藤村〆女（大阪市）正会員
——葭乃女史推薦

（い）

麻生路郎著

新川柳鑑賞

六月中旬刊行

川柳の味い方・四百数十句

★昭和三十四年度の「川雑川柳まつり」の記念出版として、「新川柳鑑賞」を刊行することにした。「新川柳鑑賞」は新川柳のよさを広く世間に味ってもらいたいためと、川柳は作っているが、も一つ巧い句が作れないという人たちに読んでもらいたいために、「川柳雑誌」の昭和廿八年十月号から連載したもので、いまなお執筆を続けているものである。曽て東京の至文堂から拙著「川柳とは何か」を刊行した際、巻末に「川柳の味い方」として二百拾八句を鑑賞したのであるが、本書ではそれ等の名句を省いて、それ以外の名句を鑑賞したものである。従って或る意味に於ては「川柳とは何か」の姉妹篇だと言えよう。初心の方はむしろ本書を玩味読了されてから、「川柳とは何か」をお読み願えれば作句上大いに役立つのではないかと思っている。何れにしても「川柳とは何か」と併せて味読していただきたい。

★本書では現代作家の四百数十句の名吟佳什が鑑賞されて居り、単なる読物としても好適のものである。即刻申込まれたい。

（路郎生）

価二五〇円
送料三二円
B六版
二五〇余頁

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
電話　大阪㊲六〇八一
振替口座　大阪　七五〇五〇

いのちある句を創れ

花地柳堤

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 三月句会（大阪市）

3月7日　午後6時

会　場——文楽座別館四階

ネオンの花咲く道頓堀の文楽座別館四階の大広間を新会場にした、本社句会のこけら落しのきょう、陽春をおもわす暖かさに、風よぶ窓を開けると眼下のそこは不夜城のまぶしさである。天井両側にずっと奥まで螢光灯の適当な光線に畳は青く雰囲気は満点で、正に料亭といった感じである。しかも向い側の部屋からは三味の音がもれてくるという心ウキウキものである。何よりも特筆ものは、チンジャラの雑音も道行く人の高声も聞えないので、作句にはその静かさにおいて光明寺と変らないことだ。

生々庵医博が学会のため欠席されるので柳話は春巣医博にお願いしておいた。文字と言葉の有意義なものなので、五月号の本誌を飾っていただくため本欄ではスペースの関係上、割愛するのやむなきにいたったことをことわっておく。

諸選者のハリキリ方も活気にあふれ、女流作家もいつもより多く、十分ご満足をされたことと思う。土井文蝶氏がこの記念すべき日の不朽洞杯をにぎられた。

（F）

—出席者—路郎・木堂・古方・圭井堂・いさむ・一三夫・淡舟・与呂志・摩天郎・悟郎・葉乙女・潮花・悦子・すゝむ・保美・十悟・堰子・登志子・一栄・清子・多久志・水客・旅風・泰祐・以兆・豆秋・薫風子・博也・満秋・狂二・柳志・晃・梅志・文蝶・凡九郎・弦月・舟遊・庸佑・静馬・文秋・没食子・白柳・千代子・一傘・進之助・いわを・栞・利武・新石・梅里・菁風・貴山・南宗・柳宏子・直人・好郎・牧人・月都・繁雄・柴香・〆女・春巣・山舟・半歩・句念坊・寿栄・阿茶・静修・宏子・葭乃

兼題「商　才」　麻生路郎選

先代の商才ばかりほめられる　栞
商才を買われ私立の学長に　菁風
商才に議員引き回されて　墜ち　文秋
生まれつきという商才も位置をえず　凡九郎
商才があって肩書邪魔になり　進之助
六法全書ひもどき商才裏をゆき　貴山
商才の余りで妓落籍される　失名
鵜の真似をする商才は持合せ　水客
かみそりと言われ船場で叩き上げ　梅里
酒にする時期を商才心得える　薫風子
商才のない長男の提げ鞄　水堂
商才のこんどはロシヤ語習い出し　一三夫
商才のひらめき見せる八百屋の子　奈良子
ひとの金だけで商才店を出し　幽谷
算数はゼロ釣銭は間違えず　どんたく
銀行は商才過剰を警戒し　八九寸
商才は会長という椅子を〆め　以兆
商才を生かしてくれる金がなく　阿茶
商才は女房の方が役者上　一鶴
商才があって商家へ嫁きたがり　香林
商才のない二代目で親しまれ　柳宏子
商才を嫌い愛情に生きたがり　圭井堂
商才は一坪ほどの仮事務所　いさむ
商才を見抜いた方も船場の娘　堰子
商才はとぼけてすかすてもっかい　十悟
商才の陰に勝気な母がいる　清子
商才に噛んでふくめて値切られた　舟遊
商才に長けて妻子を省り見ず　淡舟
商才がまた看板を塗りかえる　直人

花のれんより

商才が寄席のお茶子で終らせず　堰子
持ち剛が揃たと商才にんまりし　雅芳
商才はあぶない橋も渡るなり　同
商才へ娘貰えの家つげの　摩天郎
商才があるとも見えぬのが稼ぎ　すゝむ
商才の頭つるりと禿げている　以兆
商才にたけ女傑でのれん守り抜き　〆女
商才の妻に危機を頼りきり　葉乙女
商才に惜気なく出すスポンサー　登志子
商才はあるが度胸がともなわず　月都
商才が過ぎて小さな人に見え　同
商才が学習院出を疑わせ　圭井堂
商才は紅提灯へもう走り　文蝶
おッさんと言われ商才ありあまり　路郎
下足でもやりかねまじき商才よ　同

兼題「ファン」　土井文蝶選

若乃花ばかり切り抜く男の子　夢路
有難いファンは三階からの声　貴山
営業の笑顔へファンわめき立ち　狂二
下積みをファンと共に生きた芸　奈良子
美智也好きおばあちゃんが聞くラジオ　凡九郎
弟子入りをねばるファンに悩まされ　宏子
貸本で切抜き蓄めて置くファン　文秋
サングラス掛けてもファン見逃さず　寿栄
かぶりつきファンはどこを見てるやら　悦子
憧れのスター見たさに社を休み　南宗
若秩父のサインが欲しい豆ファン　以兆
ファンなる故に婚約大反対　舟遊
結婚はしても裕ちゃんなどと言い　梅志
長嶋の嫁はんになる気のファン　豆秋
もの好きが三木の平に肩を入れ　柳志
名をなしてもとのファンをなつかしみ　舟遊
ファンレター歯の浮くようなものばかり　淡舟
ミーハー族をファンに持った底力　圭井堂
人妻を忘れてドサを追い回し　同
サイン帳強迫めいたのが混り　水客
稽古場の土俵見つめるファンの瞳　半歩
ファンレター返事に困る字も混じり　利武
その裏を知らぬファンに叱られる　十悟
ファンレター全部読んでることにする　静馬
投げテープ持って頑張るかぶりつき　同
印刷の返事もファンしまっとき　満秋
錦之助で無ければならぬように言い　庸佑
サイン攻めスッポかした楽屋口　梅里
戎橋狭しファンにとりまかれ　豆秋
ファンレター返信料も入れて来た　没食子
ほっといて呉れぬファンに逆えず　十悟
裕ちゃんが好きと言う娘の低い鼻　水堂
ファンレターきついきつい国訛り　栞
熱叫のファンへセリフ忘れかけ　舟遊
欠番になってファンの胸に生き　一傘
ローテイーン誤字へいちゃらのファンレター　旅風
野球ファンコーチへ一言言いたい気　阿茶
楽屋口ファン同志で少しもめ　紫香
代筆までさせてファンのレター来る　一鶴
おっさんも巨人ファンか意気が合い　蘭
引退をファンの方が淋しがり　弦月
阿呆な銭費うファンも居て呉れて　十悟
費い込みファンになってからのこと　白柳

兼題「おもわく」　市場沒食子選

おもわくへ一役頼む銚子 つけ 八九寸
おもわくを話して知恵も借りてくる 岳詩
おもわくに仲人はんも苦 労人 堰子
おもわくがあって親切ゆきとどき 水堂
抵当がおもわく通りころげこみ 宗太郎
おもわくが外れてへそくり減っていき 静馬
おもわくに一山買うてからさびれ 幽谷
おもわくが外れおでこを叩いて来 梅志
おもわくへつくすく欲しいと思う金 一栄
おもわくは逆目逆目と出てくさり 十悟
おもわくがあってダイヤを買うてやり 静馬
おもわくの筋書次号が物足らず 葉乙女
おもわくがはずれ借金だけ残り 水堂
おもわくを知って女ついてゆき 博也
おもわくの土地へペンペン草が生え 豆秋
且那の急死でおもわくはずれて来 一鶴
おもわくがあって正座をくずさない 一傘
おもわくの買い〆汽車ですり取られ 登志子
子のあたま親のおもわくほど出来ず 静馬
おもわくが子にあり風呂の水も入れ 舟遊
おもわくがあって手土産等をさげ 紫香
つまらないおもわくで意地を張り いさむ
おもわくの通りに雨も上りかけ いわを
おもわくは孫の代なり苗を植え 貴山
おもわくがはずれた株を持て余し 雅堂
おもわくと取られ親切腰が折れ 文秋
おもわくは見事罫線はね 上り 進之助
おもわくも外れ終電にも 外れ 柳志
おもわくがあってプランをたて直し 陽子
慰斗紙の中味おもわくとは違い 牧人
おもわくを見抜き商法はかどらず 奈良子
おもわくが皆んな外れたコップ酒 利武
小っぽけなおもわく易者に手をゆだね 与呂志
ここまではおもわく通り運んで来 庸佑
おもわくがあってこん夜は酔うたふり 多久志
おもわくがあり甘えてみたりすねてもみ〆 女

おもわくが思案にあまる置炬達 狂二
あと寄付と知らず上座はいい機嫌 好郎
呼び出しておもわくのある茶をおごり 白柳
おもわくのあるへそくりがまどろしい 牧人
おもわくの土地が区画に引っかかり 圭井堂
ストックの山おもわくの春を待ち 牧人

兼題「職探し」　戸田古方選

長ぐつをはけば職が有ると言う 夢路
雨の日は履歴書書いて職探し 月都
人減らす話も聞いた職探し 凡九郎
職安で待つま二人のうまが合い 宏子
職探しとも知らず野良犬ついて来る 直人
赤線へ墜ちそうになる職探し 豆秋
職探し近所の方がうるさくて 幽谷
甘言についのせられた職探し 淡舟
菓子折も何べん目かの職探し 梅志
機械化は好いけど職を探す身の 凡九郎
職安の安定の文字お可笑うて 清子
妻の眼を背に感じる職探し 柳宏子
学歴が邪魔をしている職探し すゝむ
うぬぼれがまだ続いてる職探し 幽谷
サイレンが肚にこたえた職探し 栞
職探し違うた新聞買うてみる 博也
無条件降伏に似た職探し 十悟
職探し道見て歩くくせがつき 堰子
職探す弱気がバスも乗りおくれ 旅風
夕刊を切抜いている職探し 満秋
職探し日曜忘れる程にボケ 堰子
一先ず妻の探して呉れた職につき 一栄
内職をやっと職探しが見つけ 幽谷
職探す道で職安たずねられ 堰子
職探し頼めば名刺呉れただけ 直人
回復の春をせっせと職探し 奈良子
職安の列へもビル建つ音響く 水客
公園の猿と馴染んだ職探し 参無子

職探しラッシュアワーを慌てない 牧人
職探しみんなストなどしない顔 一三夫
と言うてプラカードなどよう持たず 一栄
職探し茶柱立った朝を出る 葉乙女
日曜はやっぱり休む職探し 静馬
職探し又寺町へ突き当り 堰子
職探し妻あせるなと言うてくれ 博也
私如きが職探したのまれる 古方

席題「先頭」　須崎豆秋選

先頭を走る息子へ黄な声 登志子
目印に禿を一番先にたて 十悟
先頭の旗へついてくだけの旅 博也
先頭に立たされているお人好し 阿茶
うしろ見る余裕もあってトップ切る 晃
先頭の何やら起ったさわぎよう 弦月
先頭へシャッターを切る写真班 文蝶
先頭で赤旗を振る不肖の子 梅里
先頭のおっちょこちょいが穴に落ち 一傘
ストの時だけ先頭に立つ男 晃
鉢巻をして先頭を行く若さ 文蝶
あわて者だから先頭へ行きたがり 狂二
白バイを先頭にして御堂筋 いさむ
先頭の赤旗どうやらもめており 庸佑
先頭に美人を乗せて宣伝カー 南宗
先頭に立って駈いで馘首になり 圭井堂
背が高いだけの先頭でもうれし 一三夫
先頭のオールは桜の下で待ち 潮花
リーダーに任かし春雪踏んでゆき 水客
先頭に立つ鉢巻を締めなおし 与呂志
先頭の園児うしろを見て走り 静馬
先頭は吾が子瞼が熱くなり 清子
ハイキング先頭だけが見当らず 旅風
先頭は何んだか踏んだ声を出し 梅志
先頭におっちょこちょいが旗を持ち 豆秋

席題「楽観」　正本水客選

楽観はいかんいかんと励まされ 文蝶
楽観論説き解散という手配 進之助
楽観的になれなれ父を不憫がり 弦月
楽観をさす戦術もある選挙 豆秋
新聞に楽観されている争議 満秋
楽観がすぎたと落選候補なり 栞
楽観をさせて一気に押し切る気 庸佑
何事も楽観主義とは羨し 清子
死んでから楽観くやしがり 登志子
楽観をしてると外交釘打たれ 月都
お育ちが楽観論をすてさせず 古方
思い切り楽観をして寝てしまい 梅志
落選は楽観してたように言い 摩天郎
楽観は出来ぬと笑う自信あり 淡舟
家出した娘へ父だけが楽観し 保美
楽観主義ちと抜けてるかと見られ 一栄
楽観をしたかそれから寄りつかず 紫香
落第をしてから楽観主義になり 弦月
結局は楽観論に押し切られ すゝむ
楽観を粧う夫に茶を入れる 旅風
本人は楽観論を振りまわし 水客

席題「階段」　友淵貴山選

アパートの階段雨の児に狭く 直人
階段の昇り降りでした見合 摩天郎
階段をゆっくり下りるビルの恋 柳志
階段の数もアベック歌になり 同
階段の中途で次の汽車にする 一傘
階段のたった一つをふみはずし 悦子
階段を走る若さがほしいなり 舟遊
くじ当てたアパート四階の奥の隅 狂二
階段のとこで銚子止めさせる 好郎
やすもんの階段やなと二階借 博也
踏みしめて行く階段に老見えず 半歩
老いらくの恋階段が邪魔になり 柳志
階段の上から今日のサインする 水客

階段をおっちょこちょいは先になり　文蝶
上らずに死んだお茶屋の段梯子　阿茶
今きいたせりふで階段下りてゆき　栞
酔うている足階段をいたわられ　進之助
鉄板が鳴る裏階段をそっと抜け　梅志
階段も掃く条件で上を貸し　保美
地下室の階段美味い匂いする　白柳
階段を掃くひともあり百貨店　好郎
階段のゴミを専務がつまんで来　梅志
階段の裏仏壇が低ういる　貴山
（庸佑清記）

川雑　**ハワイ支部句会**（ハワイ）

古川魔花麗選

総会で亦も監査が一人殖え　風草
円満な万年幹事親まれ　笑流
会長を狙う工作抜け目なし　砂丘
役員も勇退ひまを釣に行き　周防
役員会家を抜け出す道具にし　舞座
役員に飴をねぶらす新会長　泉水
役員が二世に替り老を知る　拝山
役員の努力で築く新団体　イツヨ
役員の顔ぶれ揃うP・T・A・　エス子
役員の最后決議案燭がつき　旋風
役得もなし役員会に遠く居り　快夢起
名ばかりの役員さんが巾利かせ　気七有
役員になれば世間に見直され　紅茶
チョボ髭に役員席の札ひかり　粗倉哲
ああ無情妻役員でまた自炊　草一郎
役員の秘議旅行費が割出され　弦月
役員に人がなるからあらが見え　美潮
役得とすまし懐温める暁舟　
多士済々顧問の上に名誉つけ　純香
総会で口を利く程役がつき　平八郎
只酒の味役員になって知り　八丁堀
役員会お百度踏ませた顔がよる　スマ子
会長の椅子心地よくしがみつき　北海
役員を替えて与論の動きを見　純香
役員になって茶屋酒飲みならい　斧平
会計と書記こそこそと飲むプラン　浅太
役員と云ふ名へ追従笑いする　柳葉
役員会十対〇で飲む決議　魔花麗

川雑　**阿倍野支部句会**（大阪市）

金井文秋報

仕末書で済ませてやると恩に着せ　晃
処分品あとからなんぼでも仕入れ　文秋
処分品もっともらしい暮の市　すゝむ
芋焼酎薩摩男子の怪気焔　守信
焼芋をつかむ軍手を見はみつめ　亜鈍
芋がゆの白さ終戦時をおもい　薫風子
親いもへ子いもしっかり抱きついて　豆秋
みそっ歯を見せておませな事を言い　奈良子
みそすりも修行を積んで大和尚　喜仙
洋食に飽き味噌汁の味たたえ　繁雄
みそ汁がさめまんがなと起こされる　恒明
当にした日掛けに保証三つ要り　十悟
裸では嫁れぬ日掛けにくいしばり　堰子
荒れた手で日掛けの小銭読み直し　葉光
掛けて見てそれ程楽でない日掛け　生姜
小男となめて喧嘩でおくれ取り　庸佑
条件のよすぎた見合寸たらず　増美
小男でレデーメードが間に合わず　大路
小男のいつか背伸びの癖がつき　一三夫

川雑　**淀川支部句会**（大阪市）

武部香林選

年男日本髪へ豆を投げ　敬二
よいとこで頁飛んでる月おくれ　東洋男
月遅れ付録も値段ついて居り　礼司
月おくれ読んでせっせと金を貯め　三十郎
かんしゃくの手紙何度も破り捨て　句念坊
かんしゃくの当りどこなし眠る孤独　葉光
かんしゃくへもう定年だと云い聞かせ　多久志
かんしゃくを鎮める仏間灯がともり　水堂
かんしゃくを殺すに馴れた固い椅子　六竜子
かんしゃくをそっとしておく市場籠　若菜
エネルギーの見本に力道山撮られ　さぎす
定年へまだあり余るエネルギー　幽谷
麻雀へ仕事のエネルギーを貯め　清生
エネルギーつかい果してくびになり　香林

川雑　**にしなり支部句会**（大阪市）

後藤梅志選

冬の幕静かに閉じるお水取り　玲人
お水取り母が信じる寒さなり　漣
松明が男性的なお水取り　薫風子
おや分でもごはんくいにはまけちゃうわ　慎太郎
もう搾取利かず親分落目なり　すゝむ
親分のきっぷへ命まであずけ　舟遊
ヒスになる素質も持っているけず　文秋
春めいていけずも愉し妻若し　柳宏子
いけずしいしい婚期の迫る一人っ娘　葉平
スキーにも出かける嫁とは知らざりき　堰子
銀嶺へふと現実を忘れかけ　敏子
借りて来たスキーと見えぬ滑りよう　庸佑
スキーヤー転んだとこを写される　柳水
先生で通る策士の自家用車　三司
頭数を素早く読んでいる策士　牧人
冗談も策士うかつに聞いて居ず　十悟
寝業士と言われて期待されとらず　満秋
髭撫して策士孤独の酒に酔い　旅風
紀元節がないと歴史もびんと来ず　白柳
新しい歴史の中の皇太子　晃
木門へ村と村とにある歴史　太路
歴史読んで欠伸している日本人　淡海
大正の歴史も知らぬ昭和の子　悟朗
柱時計我が家の歴史刻んでる　蘭
内職になれていけずの子も座り　梅志

川雑　**玉造支部句会**（大阪市）

西出一栄報

警笛がきっかけに去る立ち話　白柳
立聞きの内緒内緒が知れわたり　登志子
予備校の疲れジャズ喫茶で癒し　直人
ロカビリーの興奮さめぬハイティーン　文秋
もやもやをほぐして呉れる児が帰り　真句朗
思い切り怒鳴りもやもや吹飛ばし　井平
もやもやを土産のように里帰り　一栄
もやもやを宋定無口にしてしまい　清子
もやもやが闇のぬるさで燃え上り　柳宏子

川雑　**京都支部句会**（京都市）

田中烏雀報

どん底の暮しへ溝のつまり勝ち　美佐緒

この辺の生活がわかる溝がある　司郎
どじょう一ピキ動物園のミゾに生き　幸男
よろこびを鞄の中の音がみな　紫蘭
ずくずくに喜んでいるよだれかけ　鳥雀
還暦と云われ父親喜こばず　句念坊
聰明に急所をはずす女である　礫
手相から急所は弱いとこばかり　晴芽
急所もつ人間となり職遠し　尚平
冨士遠く橋の高さに及ばざる　喜由
砂漠に月おちて三角の遠景　白扇
動くとも見えぬ帆影へ淡路島　親生
置去られた心整う尾灯消ゆ　つる子
置去りにされても二人苦にならず　古要
ページからさよならという紙が落ちた　たか子

川雑

篠山支部句会（兵庫県）

小西無鬼選

横車入れて老眼鏡はずし　越山
電報に老眼にぎりしめて起ち　一雨
偉らさんにちと見えだした老眼鏡　ふみ子
老眼鏡経済欄を諦めず　澄代
老眼ねェ母さん僕が読んだげる　万世
老眼になれば裁縫も助手が要り　静代
老眼をかけたまんまで高いびき　雅子
老眼の奥からジロリ睨らまれる　潔
ジロタロー他の仲間は何処へ行た　枝葉
二次会に仲間はずれてけがはなし　文峯
損をした事は仲間に伏せておき　文平
通勤の仲間座席に不自由せず　一朗
薬売る仲間か宿の国なまり　しげ子
泥棒も仲間割れしてしっぽ出し　黙翁
靴下へ下駄引っかけて待ち兼ねる　ひか平
待ちかねて迎いに行けば行き違い　はつゑ
嫁ぐ日を祖母はこたつで待ち兼ねる　岳詩
プリンスも蛙も春を待ち兼ねる　美千代
待ち兼ねた声へ一座が迎えに出　凡志
待ち兼ねて仲人さんへ問いに行き　秋月
日掛けまでして税務署に持ってかれ　氷断
お情けのようだが日掛けで強う取り　みのる
日掛して買うわと妻は涙ぐみ　まさ子

川雑

小松支部句会（小松市）

伊藤茶仏報

おかしくもないのにモデル笑わされ　吉枝
地位が出来十ほど上下してみられ　たつ路
簞笥の跡青く残して離縁する　みどり葉
会長して嘘のむずかしいことを知り　義風
陽焼けした顔ほどスキーうまくなし　キミ子
パーマから帰り甘えてみる若さ　松水
怒っている夫へ念の入る化粧　香径
御破算に願いましては赤字なり　千太郎
手始めの化粧は下をむきたがり　美乃留
始めから話せと汗へ出すタオル　一進
事始め今日は顔出すだけに着る　三思楼
始業ベル腰あげてから碁の助言　茶の香
口笛が夜の波止場を凄くする　宗太郎
写真帖明治は笑顔を忘れとり　茶仏
笑い声何やら茶の間たのしそう　光威習
スキ焼の音より高い笑い声　多恵子

川雑

備前支部句会（岡山県）

三村柳風子報

隣席を真似て乾盃高く揚げ　美音子
気にそまぬまま乾盃をしてしまい　知恵美
乾盃へ下戸も上戸もかしこまり　九坡
まだ酒が足らぬか乾盃してくれず　秋月
乾盃のあとで胃薬飲んでおき　東岸
乾盃へ目出度い歌を一つ出し　幸仙
不眠症妻の寝息へ腹を立て　正州
不眠症ねむりを昼にかえて寝る　竜泉
不眠症子供の漫画読みつくし　自娯句
不眠症夢めかけらを追い続け　伊久野
体臭を香水つけてまぎらわし　はるえ
体臭を追うて名犬腹がへり　三六
体臭になれて銀婚式となり　久米雄
体臭の残る遺品へ泣きくずれ　一声
夢中にもなれず四十をもてあまし　柳風子
子等の眼の重なり合った紙芝居　草二
一日のプラン長居が来て狂い　あやめ
計画を日に日に変えて月はたち　北星
計画を立てる間もなく松がとれ　三角
女も計画的に酔うて居り　清春
餅をつく音に夫の老を知り　万女
王手飛車かけて火鉢の炭をつぎ　浄美

川雑

出雲支部句会（出雲市）

原章峯報

ブレーキへ丈昇天をまぬがれる　李明
ブレーキをしかと確め児を乗せる　まき子
急停車ヒッで支えたバスガイド　独仙
張合って学生寮の灯があかい　章峯
女文学に似せ書いてあるなと思い　白菊
伝言板よっぽど待ったらしい文字　朱紅
駅員も読んでから消す伝言板　雲平
万事終り伝言板は無表情　緑之助
誤字のまま待ち呆けてる伝言板　章峯
百貨店小店は黙っていぬ時世　三又路
エレベーターどっと買う顔買わぬ顔　李明
押されて押して上って降りた百貨店　一平
功績を秘めて余生を植木鉢　代仕男
功績の牛を待たせて酒にする　やすを
功績の主はマイクにはにかんで　朱紅
回顧とは余りにわびしい勲功記　一平

川雑

倉敷支部句会（倉敷市）

椙原一善報

この世相狂ってる方が住みやすし　方大
適材を変えて業績狂い出し　万古
幸福と言うて下さる他人様　麗水
一番に来た情報が違っとり　風の子
本腰は父亡き後を立て直し　銀子
本腰を入れて怒ればふき出され　狂風
情報があって動悸がまだ止まず　飴ン坊
本腰がミシン違った音となり　真奇
本腰の養子へ財布まずまかせ　隆文
幸福は駅で待ち合う共稼ぎ　香春
本腰でどの子も百姓して呉れず　一舜
情報を食い物にする選挙プロ　三吉
お姑が死んで本腰入れた婿　創七
野心家の顔が揃った情報部　萌芽
口止めをした情報の方が洩れ　春也
モンタージュ通り魔善人らしい見え　美音子

川雑

大聖寺支部句会（加賀市）

野村味平選

休日は秘書特約があるらしい　一路
特約で儲けの目立つ店となり　白桐

色紙短冊
書画用品
大阪成びし筆
丹青堂
電話 七二・七三

特約の看板古び店古び　酔羊
特約店向いにも出来てまごつかせ　素百々
電話にて忘れた宿題きき合せ　美代
借り電話小声になって恋もつれ　光郎
気にいらぬ話か受話機ガチャとおき　恒雄
画報もついでにのぞく借電話　味平

川雑　**下関支部句会**（下関市）

石川侃流洞報

四畳半タドン一つで用が足せ　光堂
四畳半ここまで逃げて来た動悸　蘇人
四畳半もう殖やされぬ程つまり　伊三男
妻の眼をぬすむ音色の四畳半　千里
無事平穏時に脱線してみたい　詩酔痴
脱線の仲間へ下戸が一人いる　藤四郎
脱線はしても財布のかたい伯父　晃
親分の機嫌へ酒が追加され　雪峰
貫ろくは笑い声にもある親分　柳蛙
親分がはいって話丸くなり　司楼
親分のお帰り格子派手にあき　慈雨
皇太子あやかる猪年にブームあり　光夫
いのししの積りで人生直に生き　つよし
韓羽髪猪首で女にもろい性　竹涼
結論をズバリそれから道を説き　茂美
結論は新聞記者が先に出し　樵川
遅刻して来たのが結論くつがえし　九呂平
結論を先に言うから角が立ち　侃流洞

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）

直原七面山選

廻り道月にロマンス打ち明ける　銀子
お別れがまだ惜しまれて廻り道　寿子
田舎者と見てハイヤーの廻り道　一喜
無免許があわててそげた廻り道　水雲
廻り道別れとうない人を連れ　知恵美
紅梅が一枝欲しい廻り道　山茶花
どうしようか知らんと小石けるばかり　周甫
思案まだ浮かず夜明けの鶏を聞き　只世
思案した頬杖ビルの陽がかげる　賤女
思案ふと橋のふもとへ立ち止り　ちとせ
こおろぎの屍は蟻に葬うむられ　流風
こおろぎを鳴かせて秋にする凝音　竜児
こおろぎに夜寒むの夜なべ急がされ　美沙
新婚の甘さがガラス越しに見え　たつよ
流行のウインド曇らす程のぞき　南鉱
ガラス越しに通り眺めて店は暇　喜楽
イヤリングキラキラガラスでございます　七面山
硝子戸に鼻押しつけて子の無邪気　句念坊

川雑　**宇部支部句会**（宇部市）

津秋六花選

老人にゆずる小さな座席が空き　半休
延着の小包かびになって着き　秋花
姑の指図に働く歳の暮　笹舟
父となる日のエチケットに慌てだし　豊年
エチケットを気にする酒で酔が来ず　仏道
日暮まで待たせ茶漬で追い帰し　箔川
かけ持ちを若いですなと冷かされ　丸平
村芝居かつらが幕を引いて居り　緑豊
裏住いのままで人生暮れかかる　六花
かけ持ちの時間割バンクからくるい　天作
国鉄の誇がストに負けて着き　月明
いたずらに喰わえ煙草を子が真似る　佐吉
延着をお伴が詫びる程の地位　実男
ウエットな娘でエチケット良く守り　千里
延着と聞いて出迎え腹が空き　青山
母ちゃんの倖せ茶の間で日を送り　真子
嫁った娘が戻ると急ぐに茶の間へ来　酔雀
再起誓う茶の間へ初日流れこみ　夢生
夕食の茶の間寂しい流行風邪　蟠蛇
お茶の間の叔母の一言気にかかり　松風
母さんの一日茶の間の盤が消える　直喜
円満な夫婦子宝にめぐまれず　源吉
ちと足らぬ後妻で円満にゆき　一枝
ほろ酔の夫毛糸をもて遊び　柳翠
円満もやっぱりお金しだいです　幸陽
円満に別れましたとさびしそう　常香
無駄使いせぬ約束のお年玉　博
年玉と別に約束聞いてくれ　健一
お年玉にかみそりセット送られた　秀久
お年玉くれた祖母逝き父母はなし　春子
御近所が疑惑をいだく金廻り　守
今喰べた料理は河豚と後で聞き　真津子
てっちりの味を訊かれて口ごもり　一人
子の事を手紙に書いて泣かす人　節子
嫁ぐ娘の言葉やさしく家を出る　青果
おれに似た子の性格を淋しがり　迷窓

川雑　**明和病院支部句会**（西宮市）

西尾青一路報

手もふれぬ本が並んだ応接間　すゝむ
アクセサリーだけの器量で世帯下手　東雲
焦り気味服も飾も派手になり　山友
風呂帰り七味からしをたんと振り　牧人
風呂の中言葉の端に職が知れ　丹謡
湯ぼてりの匂いこぼれる若い妻　策平
こわごわと赤子を抱いて男風呂　さとし
ゆげの出た手ぬぐい凍る風呂帰り　深雲
柴はぜる音もなつかし里の風呂　すみ江
童心が取柄で能のない巨体　寿江
童心にも二度目の母は美しい　弦月
着飾って出て井戸端へ気兼ねする　夢路
政治にはかかわり持たず古本屋　三舟
選挙になって政治家弱くなり　寿栄
姉さんのオーバアクセサリー変えて借り　半歩
アクセサリー噂の中でよく光り　芙路
教養の程を見せたる胸飾り　球絵
部屋中を飾るドライのブロマイド　川太郎
つつましく部屋を飾った老夫婦　善坊
飾り飾りて自痴美のうつろ　栞

杏林川柳会（大阪市）

麻生路郎先生選

街の雨橋もネオンも恋も濡れ　薫風子
小糠雨しだれ柳に春を知る　舟遊
居続けにされる旅路の宿の雨　一杯
猪が出ますとバスに教えられ　青一路
猪が私の年でまだひとり　寿栄
福欲しい顔々々の神詣で　一伸
停年の前のかけもち見のがされ　一哲
かけもちはせぬと言ったが年の暮　太希志
かけもちは妻に内緒のアルバイト　同
かけもちの女優空からかけつける　瑞川
かけもちがふえて月賦のテレビ据え　同
背伸びして賽銭投げる神詣り　阿茶
かけもちは相生橋を往来する　同
賽銭の割りにこまごまお願いし　生々庵
ついで詣り神様は知ってはる　同
神詣で初発をはずす今朝の冷え　葭乃

大阪通信病院川柳会（大阪市）

橋本幸男報

シンマイが自己紹介でちとどもり　蕗児
新参としての遠慮はお茶も没み　没食子
叱られる役を新参背負わされ　方正
チャンネルが増えてアンテナの位置も変え　史葉
アンテナはサービスですと如才なし　竹荘
同郷と気をゆるしたが運のつき　容子

同郷の既にとどかぬ位置にあり　夏生
同郷がバンクをしたと子を見せに　風船堂
同郷の後輩ですとかしこまり　愛論
同郷が金借りにくる出世をし　春雄
一票を逃さぬ同郷の年賀状　桃村
同郷と知って押売買わされる草　右
同郷が呉れた名刺の肩に長鬼風
引抜いてくれた同郷転勤し　けい女
同郷の大臣の車遠くみて　十三夫
同郷を売りものにして寄付にくる　よしを
同郷にことずけ頼む汽車の窓　ハナ子
かび臭い夜具で同郷もてなされ　幸男

南海電鉄川柳会（加賀市）

辻圭水報

自殺した附近に有った走り書き　新石
右下りあなたと知れる走り書き　浪速子
伝言板よほど気がせく走り書き　一好
どう読んで見ても判らぬ走り書き　南宗
国旗だけ出して旗日を寝て暮し　圭水
寄せ書きの国旗を胸に征ったまま　宏子
元日だけ国旗を立てて寝るときめ　狂二
星条旗消えて浜寺松青く　好郎
俄か雨国旗のひもがまだ解けず　梅志
応召の頃を国旗で思い出し　圭水
金婚式国旗あげたい気にもなり　雄声
旗竿にすまぬおしめを干してあり　梅志
国旗さえ風呂敷に化ける変りよう　和男
町会長だけ祭日の旗を出し　摩天郎
敗戦も知らず国旗はひらめいて　圭水
下着かとまがう赤旗国旗にし　句念坊
外国で見れば国旗に涙出し　圭水
飛行場社旗に国旗は小さくいる　貴山
背の子も紙の日の丸振り続け　南宗
万国旗聖母は差別なく恵み　武助
万国旗出して手品は終りなり　貴山
小道具の一つに国旗扱われ　圭水
女房へ国旗も任かせきりになり　梅志
うちだけが国旗をしまい忘れて居　路郎

333川柳会

川村好郎報

初発から同じことして駅は無事　貴山
生臭い匂で初発混んでくる　浪速子
初発までねばって強盗飯を食い　雪山
ひざ小僧かかえて初発待つ寒さ　豊子
あくびまでうつす初発の運転士　摩天郎
住む家に困り婚約長うなり　句念坊
婚約を断り切れぬ仲になり　夕霧
婚約をしてから気になる事を聞き　庸佑
婚約をしてから急に気が変り　新石
婚約はしたが浮気はまだ続き　南宗
ライバルがあるから婚約せき立てる　狂二
松も過ぎ禁酒節分からと決め　好郎
松過ぎて一升瓶を整理する　武助
松過ぎて梅の便りを待つもよし　雄声

たけるべ川柳会（岡山県）

野々口美舟報

祝電を受けて祝杯攻めに合い　尚子
お使いの釣銭凧になってくる　井水
大会で一位をしめたやっこ凧　肥太
風呂のゆげにかすんで動く肉体美　香雪
風邪ひけば早や厄年が気にかかる　只世
あきらめて嫁ぐ気になる朝の風呂　一喜
人の子の凧を見上げてもくひろい　賤女
厄年へ拍車をかけた下り坂　ちとせ
相談を受けて苦労が一つふえ　青柳
湯上りの年増の顔が若くなり　秀波
凧上げへママも呼び出す松の内　美舟

昭和三十三年度

大万川柳

麻生路郎先生選

—天地人だけ発表—

「おっさん」——三月
コラ親爺コラおっさんとまだ飲む気　好郎
ええかおっさん待ったなしやで　豆秋
あのおっさん社長さんとは恐れ入り　春日

「蒲鉾」——四月
蒲鉾のあてで手伝いほっとかれ　舟遊
かまぼこのおかずナイフで切る世帯　梅志
独りもの蒲鉾板のままで食べ　陽子

「椅子」——五月
カメラマン素早く椅子の上に立ち　春巣
この椅子にともかく居れとそのまんま　好郎
食堂の椅子でおむつを替えて出る　周甫

「バンガロー」—六月
バンガロー隣はことりともさせず　薫風子
嘘言うて来てる娘もいるバンガロー　南宗
バンガローまた缶切りが見つからず　好郎

「脱線」——七月
コチコチを脱線させた露出過多　方大
伊勢がえり上六までは揃ろうていた　堀子
俺と寝たことにしとけと帰らせ　千里

「博士」——八月
手術室博士目だけでものを言い　春巣
貸ビルに医学博士が小そう住み　生々庵
仲人の言うた博士にまだなれず　藤波

「顔」——九月
顔かくす袖がなかったワンピース　十九平
パパに顔似てでよかった過去を持ち　知恵美
別人のような顔して執務中　芙路

「方角」——十月
方角をけなし建て売り値切って見　静馬
方角を聞いて炬燵へ寝に戻り　思案坊
方角を言うてるうちに人が借り　圭水

「よろめき」—十一月
金の苦がなくなりゃ夫によろめかれ　春日
パパ変よしっかりしいやとママに告げ　一三夫
よろめいてから家柄が邪魔になり　葵丘

「主任」—十二月
人事課へ主任履歴書つまんで来　竹荘
よう我慢したと主任の眼が応え　水客
気の弱い主任汚職で首を吊り　千舟

「青春」——一月
お説教されてばっかりいた青春　多久志
青春の無聊は風呂へ連れだって　清生
青春を不実な人に拾われる　潮花

「條件」——三月
条件のトップに親が邪魔にされ　方大
女四十その条件へたじろがず　きさ子
式すめば別居どころかこきつかい　好郎

鮨と料理と酒
アベノ橋地下映画食通街
千日前 ㊇〇一四七 大劇裏
梅里の店
大萬

★大万川柳（第九十八回）を募る
兼題「盃」　路郎先生選
締切・四月十五日　句数五句以内
発表・四月廿二日　（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

4月の句会

川柳雑誌社支部

淀川句会
時 3日(金) 六時
題 お茶漬け・先客・帰宅
所 十三西之町五丁目東淀川郵便局

明和研究句会
時 5日(日) 一時
題 芝生・内気・古本
所 西宮市鳴尾町 新明和興業KK

3 3 3 句会
時 13日(月)
題 合格・かんちがい・モーニング
所 堺市老松町二丁、島野工業KK

玉造句会
時 14日(火) 七時
題 出世・孤独・臨時
所 市電玉造南百米 大阪信用金庫

みおつくし句会
時 14日(火) 六時
題 工作・予想・満願
所 天王寺小学校

にしなり句会
時 17日(金) 六時 (毎月17日)
題 世間・温室・消ゴム
所 西皿池町一 自民党西成支部

堺句会
時 18日(土) 六時半
題 前借・入学・出馬
所 堺市九間町山ノ口八木摩天郎居

阿倍野句会
時 20日(月) 六時
題 若草・祝杯・しぶちん
所 旭町二丁目 金塚会館

南海電鉄句会
時 23日(木) 六時
題 ターミナル・とばっちり・方言
所 難波高架下 親和クラブ

鳥取句会
時 5日(日) 一時
題 手ぶら・邪魔・祝
所 鳥取城跡二の丸

倉敷句会
時 5日(日) 一時
題 デラックス・誓い・踏台・魅力
所 倉敷市水島弥生町四丁目 椙原一善居

宇部句会
時 12日(日) 一時
題 離婚・二割・胸
所 宇部市西区港町国鉄職員会館

米子句会
時 12日(日) 一時
題 留守・ねだる・冗談
所 米子市公会堂 日本間

京都句会
時 16日(木) 夕
題 逃避・流動・河豚
所 四条縄手 仲源寺

高知句会
時 25日〆切
題 欲・つぼみ・出前・倖せ
所 高知市追手筋湖月 川竹松風居

弓削句会
時 月末〆切
題 若草・日暮・どん底・許嫁
所 久米郡久米南町下弓削四五四 直原七面山居

・青ペン・赤ペン・

▼四月十日は皇太子さまご成婚のよき日である。国民の一人として、およろこび申し上げる。ことしの桜はひとしお美しいことであろう。春の光りはたのしい。

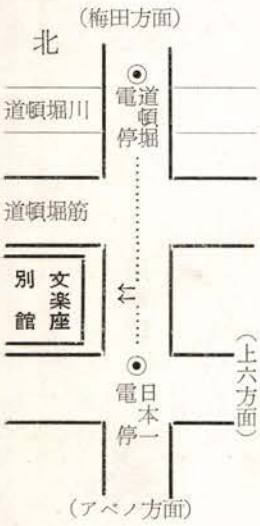
▼前号は好評だった。これは執筆陣の力作によるもので、特に「入選の条件」は、「好評の条件」にかなったものであった。▼前田伍健氏、森下冬青氏に久々でご登場ねがった。東野大八氏、冨士野鞍馬氏、高鷲亜鈍氏の健筆陣も快調で、まず目次をご覧になれば、本誌の力強さがおわかりねがえるとおもう。

▼六百五十回をすでに突破した「新川柳鑑賞」がいよいよ本になる。これは路郎主幹が新春句会で約束された三つの出版物のトップをきるものである。各界待望のものであることはいうまでもなかろう。▼主幹を招く桜の句会が、あっちこっちで企画されているようではあるが、まだ旅行はゴムリであろうし、その間の原稿や選句の山積を思うと側近の人もお止めするよりテがないであろう。

▼本号で私としては四回目の四月号である。ごべんたつとご支援を感謝する。▼某新聞に、私が他の柳社にも関係があるような記事がでていたそうであるが、何かのまちがいである。別に抗議も言いわけもしなかったが、私はそんな、しみったれた人間じゃない。

▼文楽座別館の新句会場は好評である。ゼヒご出席ください。四月は十六日に開かれるからお忘れないように。

(一三夫)



募集

課題吟募集

青葉 (十句以内) 西尾栞選
招待 (十句以内) 吾郷玲人選
雨漏り (十句以内) 中村九呂平選
衛生 (十句以内) 須崎豆秋選
サラリー (十句以内) 黒川柴香選
靴 (十句以内) 長野井蛙選
(四月十五日締切)
(五月十五日締切)

毎号募集

近作柳樽 (雑詠廿句以内) 麻生路郎選
川柳塔 (雑詠十句以内) 北川春巣選
文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締切)

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼▼『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼『川柳塔』の投句は不朽洞会員に限る。

printed in Japan

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 三十四年 第四号
定価 六〇円 (送料四円)
半カ年 三八四円
一カ年 七二〇円
(禁轉載)
昭和三十三年 三月廿五日印刷
昭和三十四年 四月一日発行
大阪市住吉島区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人 麻生幸二郎
大阪市住吉島区内万代西五丁目二五番地
発行所 川柳雑誌社
電話 大阪㊥六〇八一
振替口座 大阪七五〇五〇

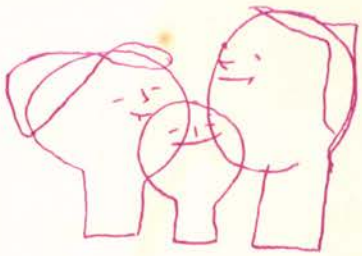
疲れをとり
抵抗力の強い
からだをつくる
高単位綜合ビタミン・ミネラル剤
ポポン-S
20日分 350円・60日分 950円・120日分 1600円

シオノギ
塩野義製薬株式会社

みんなが着て
みんなに
喜ばれている
倉敷
ビニロン
学生服
学生服用として特別につくられた丈夫で着心地のよいビニロンが使つてあります
文部省・通産省推奨の純国産合成繊維

倉敷レイヨン株式会社

一家そろつてホーライ党



廣東料理
蓬莱
大阪なんば・TEL ㊹551—2

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
昭和二十四年四月一日発行（毎月一回一日発行）
編輯兼発行人 吐生幸一郎
発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区住吉町五丁目二五番地 電話大阪(六〇八一)
振替口座大阪七五〇五〇番
定価六十円（送料四円）

山之内

不眠
昼間療法！

日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠ができ、日中のイライラや不安感もとれ、明朗・能率的な生活を送れる習慣性のない安全な新薬ですスッキリした頭で作句の為にも！

晝はすつきり・夜はぐつすり

ノクタン錠

東京・大阪　山之内製薬株式会社　福岡・札幌

倉敷紡績株式会社

東レテトロン65%　高級綿35%

クラボウ

テトロンシャツ

姉妹品 クラボウテトロンブラウス

洋酒の寿屋

幸福の足音…

1杯のトリスが1日の疲れをなおし
明日への活力を生みだす。
明るく幸せな毎日……
トリスのグラスの中から
いつも幸福の足音がひびいてくる。

サントリー姉妹品

トリスウイスキー

徳用大瓶 330円・ポケット瓶 120円